

# 堂の前貝塚発掘調査報告書 IV

平成 25 年度復興交付金対象事業関連遺跡発掘調査

2019

岩手県陸前高田市教育委員会

どうのまえかいづかはつくつちょうさほうこくしょ

# 堂の前貝塚発掘調査報告書 IV

平成25年度復興交付金対象事業関連遺跡発掘調査

2020

岩手県陸前高田市教育委員会



## 序文

陸前高田市は、岩手県南部に位置し、県内では温暖な気候の地域にあり、山、川そして三陸の海がもたらす豊かな自然の恩恵を享受し、縄文時代から現在にいたるまで発展してまいりました。その証として市内には、約270か所もの「周知の埋蔵文化財包蔵地」が確認されています。

このような先人が残した歴史文化遺産やそれを形成した自然を保存し後世に伝え活用していくことは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、市勢発展や地域活性化に伴う公共事業や社会資本整備が、充実した市民生活のためには必要であることも事実です。

しかし、一度破壊された自然・歴史文化遺産は元に戻すことはできず、我々の先人が生きた証は永久に失われてしまいます。

陸前高田市教育委員会では、開発事業や東日本大震災後の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護を両立するため、関係機関と事前の協議・調整を行いながら、やむを得ず消滅する遺跡については発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、平成25年度に東日本大震災からの復興に係る個人住宅再建に伴い実施した堂の前貝塚における発掘調査結果を収録したものです。

本書が、地域の方々をはじめとした学術研究、教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

令和2年3月

陸前高田市教育委員会  
教育長 大久保 裕 明



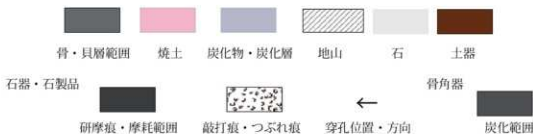
## 例言

- 1 本書は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前133番地1他に所在する堂の前貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 平成24年度から平成27年度にかけ、堂の前貝塚内で東日本大震災による住宅等の再建を主な原因として復興庁復興交付金の交付を受けて実施された事前発掘調査のうち、本書には平成25年度に実施した4～8区の発掘調査成果を所収した。
- 3 本遺跡は岩手県遺跡台帳にNF68-2130として登録されている。  
市の遺跡登録番号は160、略号はDNMあるいは、堂の前貝塚2013年度調査を表すDNM13である。
- 4 発掘調査は、陸前高田市教育委員会が文化庁・岩手県教育委員会の指導の下、県内外の公共団体と関係機関の協力を受け実施した。調査期間、調査面積、担当者は以下のとおりである。調査を実施した組織については巻末に記した。  
4区調査 平成25年4月25日～6月10日 438㎡ 担当 葛西智義(深川市派遣)  
5区調査 平成25年5月7日～6月6日 129.7㎡ 担当 安井宣也(奈良市派遣)  
6区調査 平成25年6月12日～9月20日 約450㎡ 担当 安井宣也(奈良市派遣)  
7区調査 平成25年6月13日～10月30日 約514㎡ 担当 葛西智義(深川市派遣)  
8区試掘調査 平成25年12月～20日 84㎡ 担当 安井宣也(奈良市派遣)
- 5 遺物の水洗・注記などの基礎的整理作業については、陸前高田市教育委員会が発掘調査と並行して行い、遺物復元・実測作業と貝層コラムサンプルの処理・分析については外部機関へ委託し実施した。委託機関は以下のとおりである。  
平成26年度 7区出土縄文土器復元・実測：花巻市・北上市  
平成27年度 7区出土縄文土器復元・実測：北上市  
5～7区出土縄文土器(追加抽出個体)・土製品・石器実測：株式会社 ラング  
動物遺存体分析、採取貝層コラムサンプル処理・分析：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 6 本書刊行作業は陸前高田市教育委員会が平成29～令和元年度に実施し、詳細は以下のとおりである。  
原稿執筆・編集：増崎勝仁(担当) 原稿執筆・遺物実測指導：鈴木めぐみ(平成30年度)  
遺物実測指導：遠藤勝博(平成29年度)  
版下作成・遺物復元・実測：鈴木めぐみ(平成30年度) 村上奈穂子 村上紀子(平成29年度)  
遺物実測：今野一弘 菅野江理子 藤村京子(平成29年度)  
吉田光憲 村上ナオミ 新沼月子 古澤留美(平成30年度)
- 7 本書の執筆は第Ⅱ章各節の「3 遺構と出土遺物」の縄文土器に関する部分と「4 遺構外の出土遺物」の「縄文土器」「弥生土器」を鈴木めぐみが、その他を増崎勝仁が行った。編集は増崎が行った。  
動物遺存体の分析については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 松崎哲也・山崎 健氏に、炭化材の放射性炭素分析年代測定結果については株式会社加速器分析研究所、花粉分析結果については株式会社古環境研究所に執筆いただいた。
- 8 「第Ⅱ章 第1節 4区の調査」の挿図は、調査担当者である葛西が作成した版下を、増崎が編集・再構成し掲載した。
- 9 本書の写真は、調査中は各調査員が撮影し、動物遺存体を除く遺物は、かとうまさゆき写真事務所に撮影を委託した。
- 10 本書に収録した出土遺物及び調査記録は、陸前高田市教育委員会で保管している。
- 11 発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで、以下の方々と機関にご指導・ご協力をいただいた。記して深謝いたします。(順不同・敬称略)  
発掘調査に従事された地元作業員の皆様(巻末別記) 深川市教育委員会 奈良市教育委員会  
福岡市教育委員会 京都市教育委員会 八木光則 熊谷常正 金子昭彦
- 12 本書刊行前に調査成果の一部が現地説明会や各地での展示会で公開されたが、本書の記載内容が優先する。

## 凡例

- 1 本書で使用した方位は磁北で、標高は海拔高である。
- 2 各調査区のグリッドポイントは、世界測地系（測地成果 2011）に則し平成 24 年度に測量した EA20 グリッドポイントを座標原点として配点した。  
 原点とした EA20 グリッドポイントの成果は、下記のとおりである。  
 EA20 グリッドポイント X - 110,088.728 Y 72,793.285  
 グリッド配置南北軸線は、真北方向から東へ 14° 56' 24.3" 傾向する。
- 3 本書で用いた遺構略号は以下のとおりで、種別ごとに番号を付した。  
 なお遺構種別毎に付した番号は、平成 24 年度の各調査区からの連番としている。  
 SB：建物跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 SL：焼土跡 SP：小穴 SS：配石 SU：遺物集積
- 4 調査時に付した遺構略号と番号は、整理作業の中で整理順列し新たに付した。遺構略号と番号の新旧の変遷と対照は、添付 CD 内の「堂の前貝塚 4～8 区 遺構名変遷表」を参照されたい。
- 5 挿図の縮尺は、遺構平面・断面図は 1/40・1/50、攪乱等によって破壊あるいは未調査によって推定した実測線は不連続する線分、オーバハンクした遺構底面等の実測線は破線で表した。  
 遺物実測図については完形土器 1/4、土器破片 1/3 石器と土製品 3/5・1/3 を基本としているが、図によっては変更しているものがある。
- 6 土壌の色調は『新版 標準土色帖 (2013 版)』（農林水産省農林技術会事務局監修）に準拠した。
- 7 一部の石器・石製品の石材の肉眼による岩種鑑定には、『河原の石の CD 岩石鑑定図鑑』（2003 版）・『剥片石器に使える石材の CD 岩石図鑑』（2004 版）有限会社考古石材研究所発行を参照した。
- 8 挿図中の配色・トーンは以下のとおりである。

### 遺構



- 9 各遺構の土層説明を含む記述に関しては、整理作業での調整・変更は最小限にとどめ、調査時に作成された記録を最優先した。【規模】は、調査時に現存した最大長軸値×最大短軸値×最深値である。  
 【重複】は、調査時に判断された先後関係を記載している。【出土遺物】は、調査者が遺構内出土と認定し図示した資料のみを記載している。  
 なお、挿図の縄文土器の配列については、出土層位を重複し、さらに器種・文様意匠でまとめた。
- 10 遺物挿図 ( ) 内の番号は、土器については北上市埋蔵文化財センターでの実測時の個体識別番号である。石器・ミニチュア土器を含む土製品・骨角器については、陸前高田市内遺跡出土遺物登録台帳への登録番号を表す。また、縄文土器については、出土遺構・グリッドと出土層位を付記した。
- 11 遺物図版は挿図と凡そ同一縮尺とし、土器に付した番号は「挿図番号-図中番号」、石器・石製品・土製品の番号は陸前高田市内 遺跡出土遺物登録台帳への登録番号を表す。
- 12 図示した完形土器・石器・土偶・土製品・土器片製円盤の出土グリッド・計測値・石材等の属性情報については、調査区を分けて「土器属性表」「石器属性表」「土偶・土製品属性表」「土器片製円盤属性表」「骨角器属性表」に記載し、添付 CD-ROM に XLS・CSV・TXT 形式で記録した。

# 目次

## 本文目次

序文  
例言  
凡例

第 I 章	はじめに	1
第 II 章	調査成果	3
第 1 節	4 区の調査	3
1	調査の経過と方法	3
2	遺構の概要と基本層序	3
3	遺構と出土遺物	5
	竪穴建物跡	5
	建物跡	5
	土坑	8
	焼土跡	14
	小穴	14
4	遺構外の出土遺物	15
	縄文土器	15
	弥生土器	20
	土製品	20
	土器片製円盤	20
	石器	21
第 2 節	5・8 区の調査	26
1	調査の経過と方法	26
2	遺構の概要と基本層序	28
3	遺構と出土遺物	28
	小穴	28
4	遺構外の出土遺物	28
	縄文土器	28
	石器	28
第 3 節	6 区の調査	32
1	調査の経過と方法	32
2	遺構の概要と基本層序	32
3	遺構と出土遺物	36
	竪穴建物跡	36
	土坑	43
	配石	65
4	遺構外の出土遺物	66

縄文土器	66
土製品	68
土器片製円盤	69
石器	70
第4節 7区の調査	74
1 調査の経過と方法	74
2 遺構の概要と基本層序	74
3 遺構と出土遺物	76
竪穴建物跡	76
土坑	102
遺物集積	103
焼土跡	103
貝層	103
4 遺構外の出土遺物	122
縄文土器	122
土製品	168
土器片製円盤	177
石器	178
石製品	181
第5節 7区出土の動物遺存体	195
第三章 自然科学分析	206
第1節 堂の前貝塚における放射性炭素年代 (AMS測定)	206
第2節 堂の前貝塚6区における花粉分析	211
第四章 まとめ	216

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 堂の前貝塚調査地点集成・・・・・・・・・・2	第41図 SI6 出土土器・・・・・・・・・・39
第2図 遺構確認状況と試掘トレンチの配置・・・3	第42図 SI5・6 出土土器片製円盤、 SI6 出土土器・・・・・・・・・・40
第3図 4区標準土層・・・・・・・・・・3	第43図 SI7・8・・・・・・・・・・41
第4図 4区遺構分布・・・・・・・・・・4	第44図 SI7 出土土器・土器片製円盤・・・・42
第5図 SI4 と出土遺物・・・・・・・・・・5	第45図 SI7 出土土器・・・・・・・・・・42
第6図 SB2・・・・・・・・・・6	第46図 SI8 炉・・・・・・・・・・42
第7図 SK20 と出土遺物・・・・・・・・・・6	第47図 SK33 と出土土器・・・・・・・・・・43
第8図 SK21・・・・・・・・・・6	第48図 SK34・・・・・・・・・・43
第9図 SK22 と出土遺物・・・・・・・・・・7	第49図 SK34 注口土器（埋土中位） 出土状況・・・・・・・・・・43
第10図 SK23～25 と出土遺物・・・・・・・・・・8	第50図 SK34 出土土器(1)・・・・・・・・・・44
第11図 SK26・27・・・・・・・・・・9	第51図 SK34 出土土器(2)・・・・・・・・・・45
第12図 SK26・27の出土遺物・・・・・・・・・・10	第52図 SK34 出土土器(3)・・・・・・・・・・46
第13図 SK28～30 と出土遺物・・・・・・・・・・11	第53図 SK34 出土土器・・・・・・・・・・46
第14図 SK31 と出土遺物・・・・・・・・・・12	第54図 SK35・・・・・・・・・・47
第15図 SK32 と出土遺物・・・・・・・・・・13	第55図 SK35 出土土器・土器片製円盤・・・・47
第16図 SP171～178・・・・・・・・・・14	第56図 SK36・・・・・・・・・・48
第17図 SP179・180 と SP173・178 出土遺物・・・・・・・・・・15	第57図 SK36 出土土器(1)・・・・・・・・・・48
第18図 遺構外出土土器(1)・・・・・・・・・・16	第58図 SK36 出土土器(2)・土器片製円盤・・・・49
第19図 遺構外出土土器(2)・・・・・・・・・・17	第59図 SK36 出土土器(1)・・・・・・・・・・49
第20図 遺構外出土土器(3)・・・・・・・・・・18	第60図 SK36 出土土器(2)・・・・・・・・・・50
第21図 遺構外出土土器(4)・・・・・・・・・・19	第61図 SK37・・・・・・・・・・51
第22図 遺構外出土土製品・土器片製円盤・・・・20	第62図 SK37 出土土器(1)・・・・・・・・・・51
第23図 遺構外出土土器(1)・・・・・・・・・・22	第63図 SK37 出土土器(2)・・・・・・・・・・52
第24図 遺構外出土土器(2)・・・・・・・・・・23	第64図 SK37 出土土器・・・・・・・・・・53
第25図 遺構外出土土器(3)・・・・・・・・・・24	第65図 SK38 と出土土器・土器片製円盤・・・・54
第26図 遺構外出土土器(4)・・・・・・・・・・25	第66図 SK39 と出土土器・・・・・・・・・・54
第27図 5・8区遺構分布・・・・・・・・・・27	第67図 SK40～43・・・・・・・・・・55
第28図 5区 SP181～193・・・・・・・・・・29	第68図 SK40・41・43 出土土器、 SK43 出土土器・・・・・・・・・・55
第29図 5区出土縄文土器・・・・・・・・・・30	第69図 SK44・・・・・・・・・・56
第30図 SP181 出土土器・・・・・・・・・・30	第70図 SK44 出土土器(1)・・・・・・・・・・56
第31図 遺構外出土土器(1)・・・・・・・・・・30	第71図 SK44 出土土器(2)・・・・・・・・・・57
第32図 遺構外出土土器(2)・・・・・・・・・・31	第72図 SK44 出土土器(1)・・・・・・・・・・57
第33図 6区遺構分布（北側）・・・・・・・・・・33	第73図 SK44 出土土器(2)・・・・・・・・・・58
第34図 6区遺構分布（南側）・・・・・・・・・・34	第74図 SK45・・・・・・・・・・58
第35図 6区土層断面（南側）・・・・・・・・・・35	第75図 SK45 出土土器・・・・・・・・・・59
第36図 SI5 出土土器(1)・・・・・・・・・・36	第76図 SK45 出土土器・・・・・・・・・・59
第37図 SI5・6・・・・・・・・・・37	第77図 SK46・・・・・・・・・・60
第38図 SI5・6 柱穴・・・・・・・・・・38	第78図 SK46 出土土器(1)・・・・・・・・・・60
第39図 SI5 出土土器(2)・・・・・・・・・・39	
第40図 SI5 出土土器・・・・・・・・・・39	

第 79 図	SK46 出土土器 (2)・	61	第 121 図	SI11 出土骨角器・	94
第 80 図	SK46 出土土製品・石器・	61	第 122 図	SI11 出土石器・	95
第 81 図	SK47・	62	第 123 図	SI12・	96
第 82 図	SK47 出土土器 (1)・	62	第 124 図	SI12 土層断面・	97
第 83 図	SK47 出土土器 (2)・土器片製円盤・	63	第 125 図	SI12 出土土器 (1)・	98
第 84 図	SK47 出土石器・	63	第 126 図	SI12 出土土器 (2)・	99
第 85 図	SK48・	63	第 127 図	SI12 出土土器 (3)・	100
第 86 図	SK48 出土土器・土器片製円盤・	64	第 128 図	SI12 出土土器 (4)・	101
第 87 図	SK49 と出土土器・	65	第 129 図	SI12 出土石器・	102
第 88 図	SS2 と出土土器・	65	第 130 図	SK50 と出土土器・	102
第 89 図	遺構外出土土器 (1)・	67	第 131 図	SK51・	102
第 90 図	遺構外出土土器 (2)・	68	第 132 図	SU 2・	104
第 91 図	遺構外出土土製品・	68	第 133 図	SU2 出土土器 (1)・	105
第 92 図	遺構外出土土器片製円盤・	69	第 134 図	SU2 出土土器 (2)・	106
第 93 図	遺構外出土石器 (1)・	70	第 135 図	SU2 出土土器 (3)・	107
第 94 図	遺構外出土石器 (2)・	71	第 136 図	SU2 出土土器 (4)・	108
第 95 図	遺構外出土石器 (3)・	72	第 137 図	SU 2 出土土器 (5)・	109
第 96 図	遺構外出土石器 (4)・	73	第 138 図	SU2 出土土器 (6)・	110
第 97 図	7 区南東壁土層断面・	74	第 139 図	SU 2 出土土器 (7)・	111
第 98 図	7 区遺構分布・	75	第 140 図	SU2 出土土器 (8)・	112
第 99 図	SI9・	76	第 141 図	SU2 出土土器 (9)・	113
第 100 図	SI9 出土土器・	77	第 142 図	SU2 出土土器 (10)・	114
第 101 図	SI9 出土石器・	77	第 143 図	SU2 出土石器 (1)・	115
第 102 図	SI10・	78	第 144 図	SU2 出土石器 (2)・	116
第 103 図	SI10 土層断面・	79	第 145 図	貝層出土土器 (1)・	117
第 104 図	SI10 出土土器 (1)・	80	第 146 図	貝層出土土器 (2)・	118
第 105 図	SI10 出土土器 (2)・	81	第 147 図	貝層出土土器 (3)・	119
第 106 図	SI10 出土土器 (3)・	82	第 148 図	貝層出土土器 (4)・	120
第 107 図	SI10 出土石器 (1)・	82	第 149 図	貝層出土土器 (5)・	121
第 108 図	SI10 出土石器 (2)・	83	第 150 図	貝層出土骨角器・	121
第 109 図	SI10 出土石器 (3)・	84	第 151 図	第 1 群土器 (1)・	122
第 110 図	SI11・	85	第 152 図	第 1 群土器 (2)・	123
第 111 図	SI11 土層断面・	86	第 153 図	第 2 群 1 類土器 (1)・	125
第 112 図	SI11 出土土器 (1)・	87	第 154 図	第 2 群 1 類土器 (2)・	126
第 113 図	SI11 出土土器 (2)・	88	第 155 図	第 2 群 1 類土器 (3)・	127
第 114 図	SI11 出土土器 (3)・	89	第 156 図	第 2 群 2 類土器 (1)・	128
第 115 図	SI11 出土土器 (4)・	90	第 157 図	第 2 群 2 類土器 (2)・	129
第 116 図	SI11 出土土器 (5)・	91	第 158 図	第 2 群 2 類土器 (3)・	130
第 117 図	SI11 出土土器 (6)・	92	第 159 図	第 2 群 3 類土器・	131
第 118 図	SI11 出土土器 (7)・	93	第 160 図	第 2 群 4 類土器・	132
第 119 図	SI 11 出土土器 (8)・	94	第 161 図	第 2 群 5 類土器 (1)・	133
第 120 図	SI11 出土耳飾・土器片製円盤・	94	第 162 図	第 2 群 5 類土器 (2)・	134

第163図	第2群5類土器(3)・	135	第204図	石鏃・	179
第164図	第2群6類土器(1)・	136	第205図	石錘・石匙・插器(1)・	180
第165図	第2群6類土器(2)・	137	第206図	插器(2)・石鑿・	181
第166図	第2群6類土器(3)・	138	第207図	磨製石斧(1)・	182
第167図	第2群6類土器(4)・	139	第208図	磨製石斧(2)・	183
第168図	第2群6類土器(5)・	140	第209図	磨製石斧(3)・	184
第169図	第2群6類土器(6)・	141	第210図	磨製石斧(4)・	185
第170図	第2群6類土器(7)・	142	第211図	敲石・	186
第171図	第2群6類土器(8)・	143	第212図	磨石(1)・	186
第172図	第2群6類土器(9)・	144	第213図	磨石(2)・	187
第173図	第2群6類土器(10)・	145	第214図	砥石・	187
第174図	第2群6類土器(11)・	146	第215図	凹石・	188
第175図	第2群6類土器(12)・	147	第216図	礫器・石皿(1)・	189
第176図	第2群6類土器(13)・	148	第217図	石皿(2)・	190
第177図	第2群6類土器(14)・	149	第218図	石皿(3)・	191
第178図	第2群7類土器(1)・	150	第219図	石皿(4)・	192
第179図	第2群7類土器(2)・	151	第220図	石棒・	193
第180図	第2群7類土器(3)・	152	第221図	浮子・装身具・石製円盤・	194
第181図	第2群7類土器(4)・	153			
第182図	第2群7類土器(5)・	154			
第183図	第2群8類土器(1)・	155			
第184図	第2群8類土器(2)・	156			
第185図	第2群8類土器(3)・	157			
第186図	第2群9類土器(1)・	158			
第187図	第2群9類土器(2)・	159			
第188図	第2群9類土器(3)・	160			
第189図	第2群9類土器(4)・	161			
第190図	第2群9類土器(5)・	162			
第191図	第2群9類土器(6)・	163			
第192図	第2群9類土器(7)・	164			
第193図	第2群9類土器(8)・	165			
第194図	第3群土器・	166			
第195図	ミニチュア土器・器台・	168			
第196図	蓋・	169			
第197図	腕輪・	170			
第198図	耳飾・	171			
第199図	鐸形土製品・三角形土版・斧状土製品 ・キノコ形土製品 他・	172			
第200図	土偶(1)・	173			
第201図	土偶(2)・	174			
第202図	土偶(3)・	175			
第203図	土器片製円盤・	176			

## 表目次

表1	5区小穴計測表	28	表13	堂の前貝塚6区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	209
表2	7区出土動物遺存体種名表	196	表14	堂の前貝塚6区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)	209
表3	現場採集資料 貝類	201	表15	堂の前貝塚7区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	210
表4	現場採集資料 魚類	201	表16	堂の前貝塚7区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)	210
表5	現場採集資料 哺乳類	202	表17	堂の前貝塚6区花粉分析試料採取表	211
表6	現場採集資料 哺乳類(続き)	203	表18	堂の前貝塚6区花粉分析結果	213
表7	水洗選別採集資料 エビ・カニ・ウニ類	204			
表8	水洗選別採集資料 貝類	204			
表9	水洗選別採集資料 魚類	204			
表10	水洗選別採集資料 哺乳類・鳥類・爬虫類	205			
表11	堂の前貝塚4区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	209			
表12	堂の前貝塚4区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用14C年代、較正年代)	209			

## 図表目次

図表1	7区出土土器片製円盤の属性分布	177	図表7	堂の前貝塚6区採取花粉分析試料 (堆積物)粒度組成	214
図表2	貝類組成(MNI)	197	図表8	堂の前貝塚6区における 花粉ダイアグラム	215
図表3	魚類組成(NISP)	198	図表9	堂の前貝塚6区花粉分析試料の 有機物・有機遺体含有量	215
図表4	哺乳類組成(NISP)	199			
図表5	被熱した貝類の割合(n=118)	200			
図表6	暦年較正年代グラフ(参考)	210			

## 写真目次

写真1	堂の前貝塚4区調査風景	1	写真5	5区調査終了	26
写真2	堂の前貝塚7区中高生 ボランティア調査風景	1	写真6	6区調査状況	32
写真3	堂の前貝塚7区S110 調査風景	1	写真7	堂の前貝塚6区から 検出された花粉・胞子	213
写真4	堂の前貝塚7区調査風景	1			

## 図版目次

図版1	4区調査状況(1)	図版6	4区調査状況(6)
図版2	4区調査状況(2)	図版7	5区調査状況
図版3	4区調査状況(3)	図版8	8区調査状況
図版4	4区調査状況(4)	図版9	6区調査状況(1)
図版5	4区調査状況(5)	図版10	6区調査状況(2)



- 図版 11 6区調査状況(3)  
図版 12 6区調査状況(4)  
図版 13 6区調査状況(5)  
図版 14 6区調査状況(6)  
図版 15 6区調査状況(7)  
図版 16 6区調査状況(8)  
図版 17 7区調査状況(1)  
図版 18 7区調査状況(2)  
図版 19 7区調査状況(3)  
図版 20 7区調査状況(4)  
図版 21 7区調査状況(5)  
図版 22 7区調査状況(6)  
図版 23 7区調査状況(7)  
図版 24 7区調査状況(8)  
図版 25 7区調査状況(9)  
図版 26 7区調査状況(10)  
図版 27 現地説明会実施状況  
図版 28 4区遺構内出土遺物  
図版 29 4区遺構外出土遺物(1)  
図版 30 4区遺構外出土遺物(2)  
図版 31 4区遺構外出土遺物(3)  
図版 32 5・8区出土遺物  
図版 33 6区遺構内出土遺物(1)  
図版 34 6区遺構内出土遺物(2)  
図版 35 6区遺構内出土遺物(3)  
図版 36 6区遺構内出土遺物(4)  
図版 37 6区遺構内出土遺物(5)  
図版 38 6区遺構外出土遺物(1)  
図版 39 6区遺構外出土遺物(2)  
図版 40 7区遺構内出土遺物(1)  
図版 41 7区遺構内出土遺物(2)  
図版 42 7区遺構内出土遺物(3)  
図版 43 7区遺構内出土遺物(4)  
図版 44 7区遺構内出土遺物(5)  
図版 45 7区遺構内出土遺物(6)  
図版 46 7区遺構内出土遺物(7)  
図版 47 7区遺構内出土遺物(8)  
図版 48 7区遺構内出土遺物(9)  
図版 49 7区遺構内出土遺物(10)  
図版 50 7区遺構内出土遺物(11)  
図版 51 7区遺構内出土遺物(12)  
図版 52 7区遺構内出土遺物(13)  
図版 53 7区遺構内出土遺物(14)  
図版 54 7区遺構内出土遺物(15)  
図版 55 7区遺構内出土遺物(16)  
図版 56 7区遺構外出土土器(1)  
図版 57 7区遺構外出土土器(2)  
図版 58 7区遺構外出土土器(3)  
図版 59 7区遺構外出土土器(4)  
図版 60 7区遺構外出土土器(5)  
図版 61 7区遺構外出土土器(6)  
図版 62 7区遺構外出土土器(7)  
図版 63 7区遺構外出土土器(8)  
図版 64 7区遺構外出土土器(9)  
図版 65 7区遺構外出土土器(10)  
図版 66 7区遺構外出土土器(11)  
図版 67 7区遺構外出土土器(12)  
図版 68 7区遺構外出土土器(13)  
図版 69 7区遺構外出土土器(14)  
図版 70 7区遺構外出土土器(15)  
図版 71 7区遺構外出土土器(16)  
図版 72 7区遺構外出土土器(17)  
図版 73 7区遺構外出土土器(18)  
図版 74 7区遺構外出土遺物(1)  
図版 75 7区遺構外出土遺物(2)  
図版 76 7区遺構外出土遺物(3)  
図版 77 7区遺構外出土遺物(4)  
図版 78 7区遺構外出土遺物(5)  
図版 79 7区遺構外出土遺物(6)  
図版 80 7区遺構外出土遺物(7)  
図版 81 7区遺構外出土遺物(8)  
図版 82 7区出土動物遺存体(1)  
図版 83 7区出土動物遺存体(2)

## 添付 CD 所収内容

堂の前貝塚 4～8 区 遺構名変遷表

石器属性表

土器属性表

土偶・土製品属性表

土器片製円盤属性表

骨角器属性表

動物遺存体一覧表

\*すべての表を XLS・CSV・TXT 形式で記録した。



## 第1章 はじめに

本書は、平成25年度に陸前高田市教育委員会が、陸前高田市米崎町に所在する周知の遺跡「堂の前貝塚」内で実施した発掘調査成果の報告である。調査は遺跡内の4～8区の5地点、合計面積約1,600㎡で行われた。いずれも東日本大震災の被害を受けた個人の住宅再建を調査原因としている。調査は平成25年度復興交付金対象事業として実施された。

各調査区の担当者・調査員は、福岡市・奈良市・深川市からの埋蔵文化財担当職員の派遣を受けた。

現地での調査は、30名を超える地元作業員の協力を得て、平成25年4月下旬に4区から着手し10月初旬に終了した。その後、屋内で作成図面の整理・出土遺物の水洗など基礎的整理作業を行った。

各調査区の地番、調査面積、調査期間及び担当者等の詳細については、『堂の前貝塚Ⅲ』（陸前高田市教育委員会 平成30年発行）の「表1 平成24～27年度堂の前貝塚調査組織表」を参照していただきたい。

平成26年度には、基礎的整理作業が終了した7区の土器の分類・接合・実測作業について、花巻市と北上市に委託した。

平成27年度には、残りの7区の土器の分類・接合・実測作業を北上市に委託した。

また、7区の貝層サンプリングの処理と分析を独立行政法人国立行政法人奈良文化財研究所に委託した。

本書の作成作業は、担当調査員によって版下が作成されていた4区調査分を除いて、平成29年度に5～8区の第2原図の作成・掲載遺物の抽出と実測から開始し、平成30年度には追加実測すべき土器と石器・土製品の实測を外部委託し、版下作成・編集・原稿執筆を行った。動物遺存体を除く出土遺物の写真撮影は、令和元年度にかとうまさゆき写真事務所に委託した。平成25年度の調査組織及び平成29・30年度の整理作業組織については、巻末に記した。堂の前貝塚の立地と地理・歴史的環境については、『堂の前貝塚Ⅲ』（陸前高田市教育委員会 平成30年発行）「第Ⅱ章 遺跡の立地と環境」を参照していただきたい。



写真1 堂の前貝塚4区調査風景



写真2 堂の前貝塚7区中高生ボランティア調査風景



写真3 堂の前貝塚7区S110調査風景



写真4 堂の前貝塚7区調査風景

西園寺地区の調査項目と調査面積

- 1区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 1,429 m<sup>2</sup>
- 2区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 914 m<sup>2</sup>
- 3区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 918 m<sup>2</sup>
- 4区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 438 m<sup>2</sup>
- 5区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 1,297 m<sup>2</sup>
- 6区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 約 450 m<sup>2</sup>
- 7区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 約 514 m<sup>2</sup>
- 8区：個人専用住宅建築目的の宅地区域 84 m<sup>2</sup>
- 9区：幼稚園建設のための土地地区域 2,053 m<sup>2</sup>
- 10区：幼稚園建設のための土地地区域 1,014 m<sup>2</sup>

- 「堂の前貝塚」報告（昭和47年刊）
- 「堂の前貝塚Ⅰ」報告（平成9年刊）
- 「堂の前貝塚Ⅱ」報告（平成11年刊）
- 「堂の前貝塚Ⅲ」報告（平成30年刊）
- 「堂の前貝塚Ⅳ」報告（本書）
- 「堂の前貝塚Ⅴ」報告予定
- 遺跡範囲

0 50m  
(1/1500)



第1図 堂の前貝塚調査地点集成

## 第二章 調査成果

### 第1節 4区の調査

#### 1 調査の経過と方法

平成24年11月、堂の前貝塚の遺跡範囲である陸前高田市米崎町字堂の前139番地1において個人専用住宅建築が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、平成25年4月25日から調査に着手した。

調査は、対象区域内の遺跡規模を把握するトレンチによる発掘調査から開始した。その結果、随所に近現代の攪乱を受けているが、調査対象全域に縄文時代中・後期の遺構が分布する可能性があることを確認した。

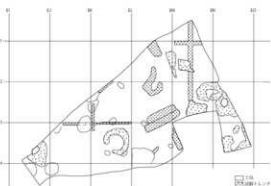
この結果を受け、全域の表土及び客土層を除去し遺構確認まで掘削した。調査区に配したグリッドは、1～3区で採用した区画に準じた。検出した遺構は、『発掘調査のてびき』に掲載された遺構略図に準拠して名称と番号を付した。遺構・遺物実測は、グリッドラインを基準に遣り方測量を行い縮尺は20分の1と10分の1を基本とした。記録写真は35mmネガフィルムでモノクロームとカラーの2種を撮影し、補助的にデジタルカメラも使用した。出土遺物は、グリッド・遺構・層位ごとに採取した。調査は、平成25年6月10日に終了した。

#### 2 遺構の概要と基本層序 (第3・4図、図版1)

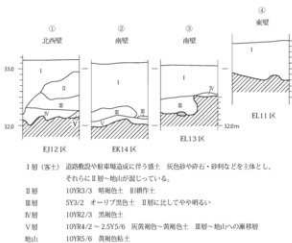
4区の遺構は、竪穴建物跡1棟・掘立柱建物跡1棟・土坑13基・小穴10基・焼土跡2基を検出した。

表土除去後の調査区は、北東から南西に向け傾斜した比高約1mを測る緩やかな斜面である。

基本層序は、砂利や碎石を混入した客土を除くと暗褐色の果樹畑耕作土が存在し、その直下に暗褐色・黒褐色を呈する土層が堆積し、漸移層を経て黄褐色粘土層へ達する。ただし、近現代の耕作や造成工事に伴う攪乱によって、層位は調査区内の各所で乱れている。

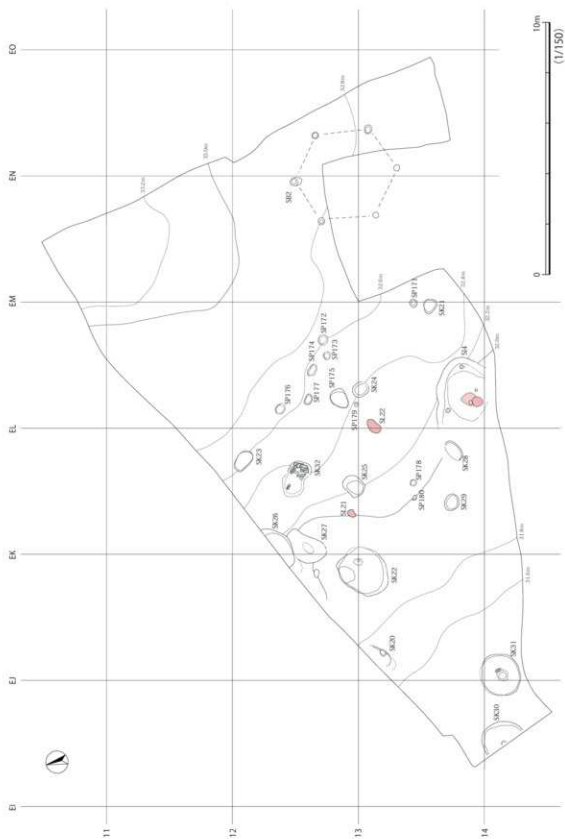


第2図 遺構確認状況と試掘トレンチの配置



- 1層 (客土) 遺構敷設や転載造成に伴う落ち土。灰色砂や碎石・砂利を主体とし、それらにII層～III層の混入している。
- II層 10YR3/3 暗褐色土。黒耕作土。
- III層 5Y3/2 オークラ質土。II層に比してやや明るい。
- IV層 10YR2/3 黄褐色土。
- V層 10YR4/2～2.5Y5/6 黄褐色土～黄褐色土。III層～III層への漸移層。
- 地山 10YR5/6 黄褐色粘土。

第3図 4区標準土層



第 4 图 4 区遺構分布

### 3 遺構と出土遺物

#### 竪穴建物跡

##### SI4 竪穴建物跡 (第5図、図版2)

【位置】調査区南端、EL13・14 グリッド 【規模】282 × 197 × 32cm

【出土遺物】縄文土器 1(後期前葉) 【所見】西壁は確認できなかった。床面の焼土 1 は厚さ 13cm を測る。

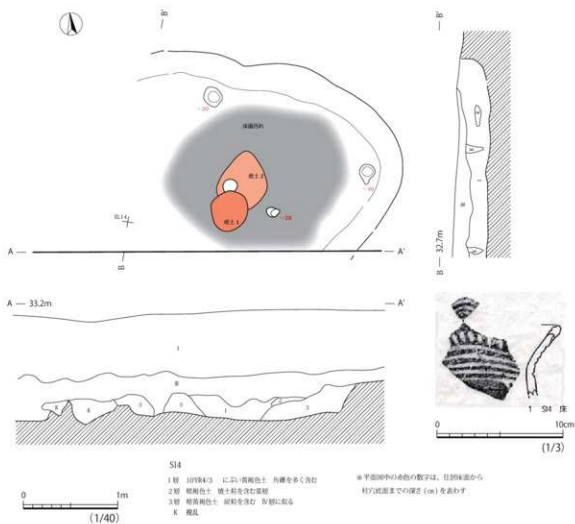
その直下から検出された焼土 2 は地山が被熱を受け赤化した範囲である。焼土 1 を含めた柱の火床部であろう。床面には深さ 10～30cm 程度の小穴が 3 基検出された。

#### 建物跡

##### SB2 建物跡 (第6図、図版2・3)

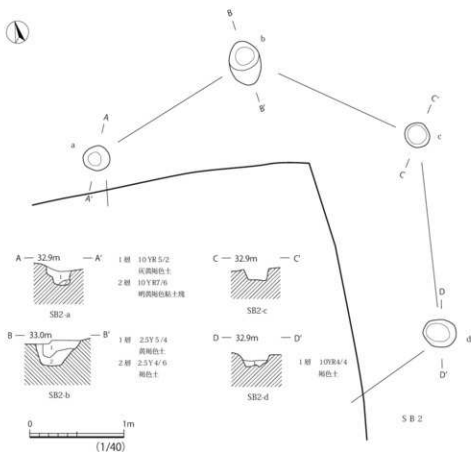
【位置】調査区南東端、EM12、EN12・13 グリッド 【規模】380 × 360 × 30cm

【所見】調査区外に存在すると推定される 2 基の柱穴を含めて、六角形を呈する掘立柱建物と思われる。

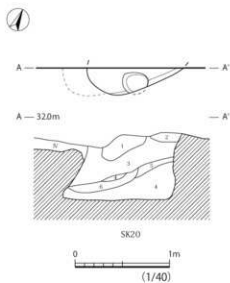


第5図 SI4 と出土遺物

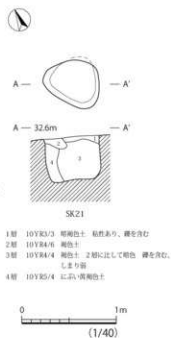




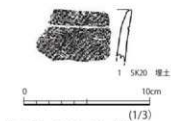
第6図 SB2



- 1層 10Y R3/2 灰褐色土 灰粒を多く含む
- 2層 10Y R6/9 明黄褐色土
- 3層 10Y R4/4 褐色土 黄褐色粒を1%程度含む
- 4層 10Y R5/4 濃い黄褐色土
- 5層 10Y R5/6 黄褐色土
- 6層 10Y R4/3 濃い黄褐色土 5層に比してやや明色

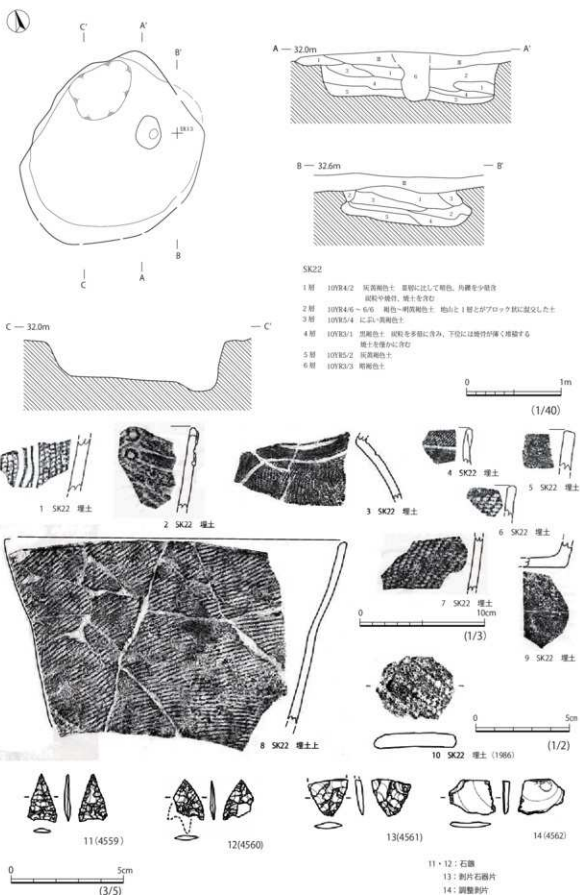


- 1層 10Y R3/3 灰褐色土 灰粒あり、礫を含む
- 2層 10Y R4/6 褐色土
- 3層 10Y R4/4 褐色土 2層に比して明色 礫を含む、しまり筋
- 4層 10Y R5/4 濃い黄褐色土



第7図 SK20と出土遺物

第8図 SK21



第9図 SK22と出土遺物

土坑

SK20 土坑 (第7図、図版3)

【位置】調査区北西、EJ13 グリッド 【規模】96 × 30 × 70cm 【出土遺物】縄文土器1 (後期)

【所見】平面形状は楕円形を呈すると推定されるが、おおよそ2分の1は調査区外に存在する。断面観察から、地山層を深く掘り込み西壁は内傾している。貯蔵穴等の機能が推定される。

SK21 土坑 (第8図、図版3)

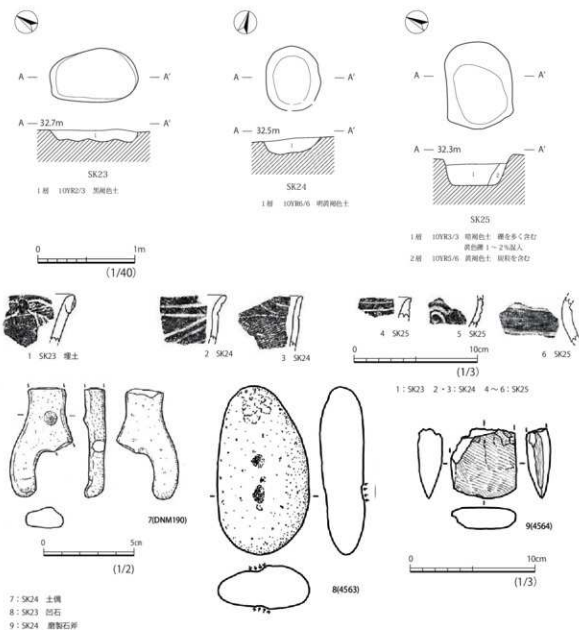
【位置】調査区南、EL13、EM13 グリッド 【規模】60 × 49 × 49cm 【出土遺物】縄文土器4 (文様摩滅、

図示せず) 【所見】暗褐色土の落ち込みとして把握。

SK22 土坑 (第9図、図版4・28)

【位置】調査区西、EJ12・13、EK12・13 グリッド 【規模】217 × 180 × 53cm

【出土遺物】縄文土器9 (後期前葉～中葉)、土器片製円盤1、石鏝2・剥片石器片1・調整剥片1、炭化物・



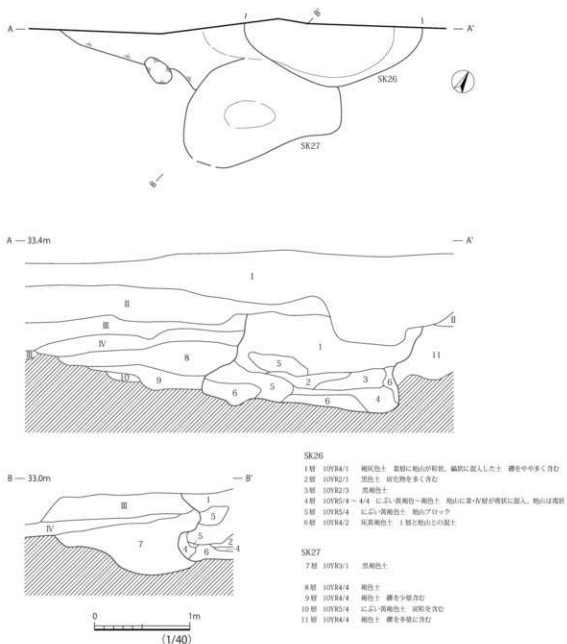
第10図 SK23～25と出土遺物

焼骨（年代測定用試料）【所見】平面形は楕円を呈し、底面はほぼ平らである。底面の北東寄りに小穴が1基検出された。埋土中に焼土・炭粒及び焼骨片が混入している。炭化物の一部は、試料採集をし放射性炭素年代測定（AMS測定）を行い、 $3,820 \pm 20$ yrBPの数値を得た。これは、伴出した縄文土器の編年の位置とほぼ整合する。

床面から検出された小穴は、土坑を被覆する土層から掘り込まれたと考えられ、土坑に付属する可能性は低い。

#### SK23 土坑（第10図、図版4・28）

【位置】調査区南、EK12グリッド 【規模】 $92 \times 54 \times 14$ cm 【出土遺物】縄文土器（後期前葉）1、凹石1、炭化物（年代測定用試料）【所見】上部は削平を受けたのか、地山を浅く掘り込んでいる。遺構内から



第11図 SK26・27

採取した炭化物試料を放射性炭素年代測定 (AMS 測定) した結果、 $3,850 \pm 30$ yrBP の数値が得られた。

SK24 土坑 (第 10 図、図版 4・28)

【位置】調査区中央付近、EL12・13 グリッド 【規模】 $68 \times 54 \times 14$ cm

【出土遺物】縄文土器 2 (後期前葉)、土偶 1、磨製石斧 1 【所見】土偶は北東壁付近から検出された。

SK25 土坑 (第 10 図、図版 4)

【位置】調査区中央付近、EK12・13 グリッド 【規模】 $92 \times 70 \times 30$ cm 【出土遺物】縄文土器 3 (後期前葉)

SK26 土坑 (第 11・12 図、図版 5・28)

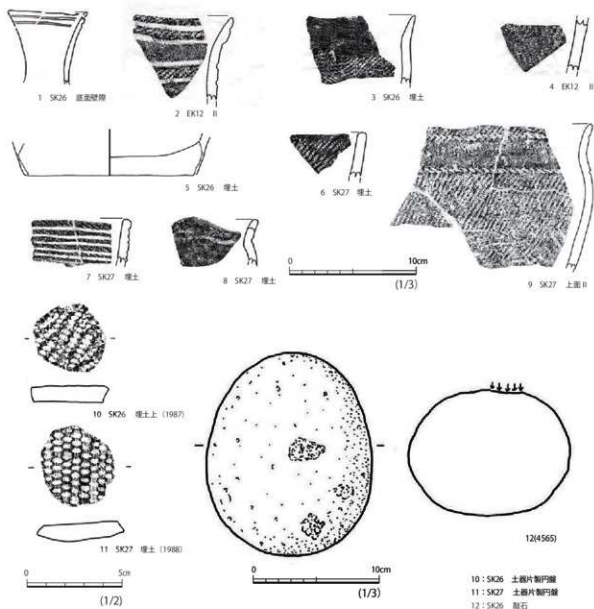
【位置】調査区北西、EJ12・EK12 グリッド 【規模】 $189 \times 62 \times 106$ cm 【重複】SK27 と重複、先

後は SK27 → SK26 【出土遺物】縄文土器 5 (後期前葉)、土器製円盤 1、敲石 1

【所見】床面直上から検出された壺口縁破片 (1) から、構築時期は縄文時代後期前葉頃と推定される。

SK27 土坑 (第 11・12 図、図版 5)

【位置】調査区北西、EJ12、EK12 グリッド 【規模】 $170 \times 102 \times 70$ cm 【重複】SK26 と重複、先



第 12 図 SK26・27 の出土遺物

後はSK27→SK26 【出土遺物】縄文土器4(後期前葉)、土器片製円盤1

SK28 土坑 (第13図、図版5)

【位置】調査区南、EK13 グリッド 【規模】88×34×24cm

SK29 土坑 (第13図、図版5・28)

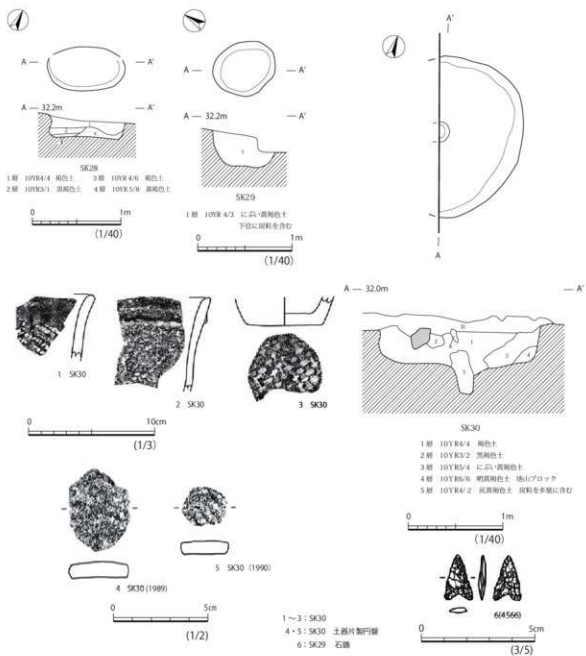
【位置】調査区南、EK13 グリッド 【規模】67×59×39cm 【出土遺物】石籤1

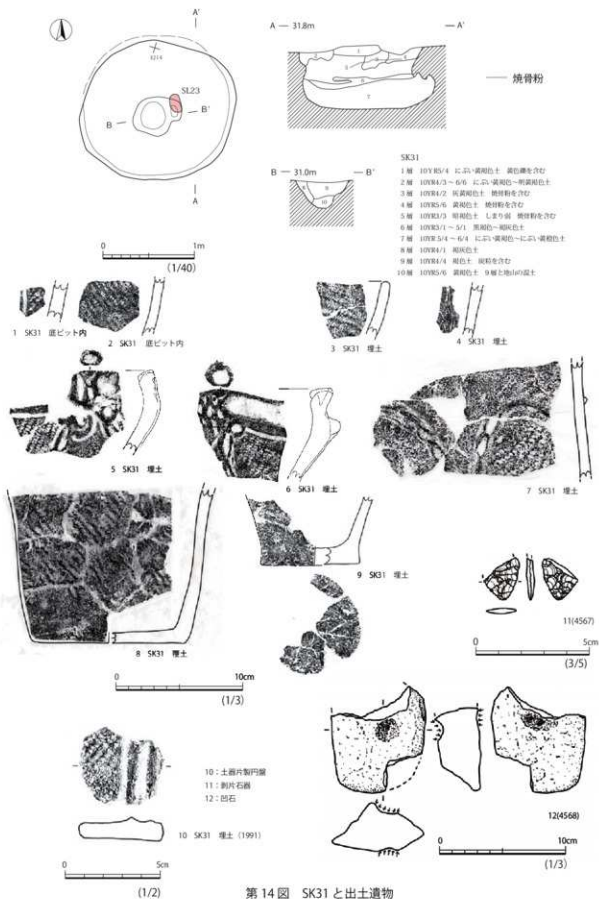
SK30 土坑 (第13図、図版5)

【位置】調査区南西端、E113・14 グリッド 【規模】180×96×54cm 【出土遺物】縄文土器3(中期末～後期前葉)、土器片製円盤2 【所見】貯蔵穴と推定、平坦な床の中央に小穴がみられる。遺構内から採取した炭化物試料を放射性炭素年代分析測定(AMS測定)した結果3,929±30 y r BPの数値が得られた。

SK31 土坑 (第14図、図版6・28)

【位置】調査区南西端、E113・14、EJ13・14 グリッド 【規模】180×163×72cm





第 14 図 SK31 と出土遺物

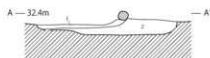
【出土遺物】縄文土器 9(後期初頭)、土器片製円盤 1、  
剥片石器片 1、凹石 1

【所見】土坑上面に厚さ 2cm 程の焼土が堆積する。  
埋土中にも炭粒や焼骨粒が混入している。形態から貯蔵  
穴と推定される。

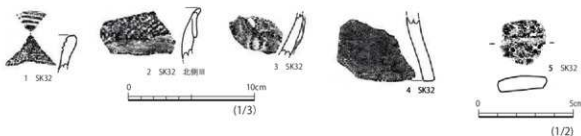
SK 32(第 15 図、図版 6・28)

【位置】調査区中央付近、EK12 グリッド

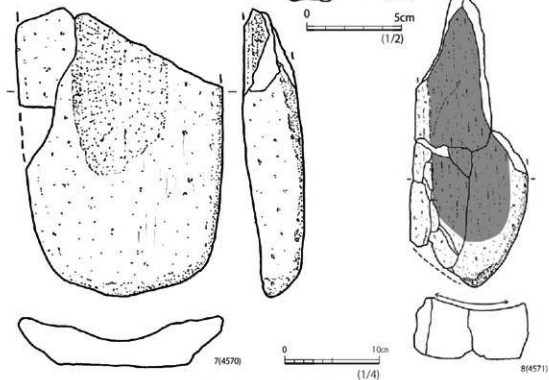
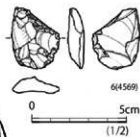
【規模】160 × 100 × 18cm 【出土遺物】縄文土器 4  
(後期初頭～前葉)、土器片製円盤 1、搔器 1・石皿 1・  
砥石 1、自然礫 11 【所見】浅い掘り込みに大形の石皿・  
砥石を含む 13 点の礫が集積された状態で検出された。  
土坑内に一括埋納されたものと推定される。



SK32  
1 層 10YR3/3 粘用土  
2 層 10YR4/6 焼土



6: 搔器  
7: 石皿  
8: 砥石



第 15 図 SK32 と出土遺物



## 焼土跡

残存した縄文時代の遺物包含層（Ⅲ層）の上面や層中から焼土跡が2基検出された。いずれも小規模で薄い堆積である。位置と規模のみの記載にとどめる。

### SL21 焼土跡（第4図）

【位置】調査区中央付近、EK12 グリッド 【規模】34×26×3cm

### SL22 焼土跡（第4図）

【位置】調査区中央付近、EK13・EL13 グリッド 【規模】67×38×5cm

## 小穴

攪乱を含む多くの小穴のうち、人為的に設けられたと確証を得た小穴は、10基のみであった。

### SP171 小穴（第16図、図版6）

【位置】調査区北、EL13・EM13 グリッド 【規模】32×30×11cm

### SP172 小穴（第16図）

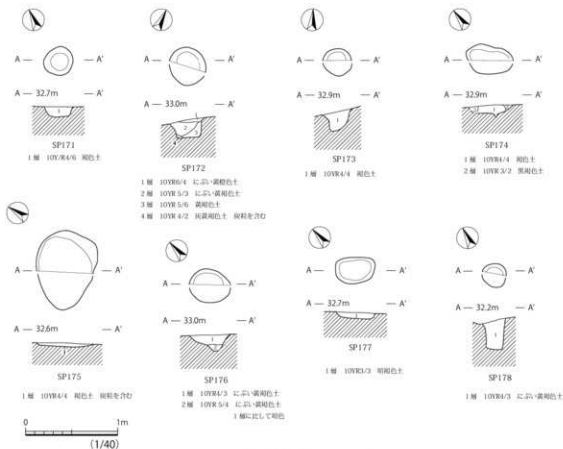
【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】40×40×21cm

### SP173 小穴（第16・17図）

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】30×30×25cm 【出土遺物】挿器1

### SP174 小穴（第16図）

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】51×32×13cm



第16図 SP171～178

SP175 小穴 (第 16 図)

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】74 × 60 × 4cm

SP176 小穴 (第 16 図)

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】45 × 33 × 18cm

SP 177 小穴 (第 16 図)

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】42 × 29 × 6cm

SP178 小穴 (第 16・17 図)

【位置】調査区北、EK13 グリッド 【規模】27 × 24 × 34cm 【出土遺物】縄文土器片 1 (後期前葉)

SP179 小穴 (第 17 図)

【位置】調査区中央付近、EL12 グリッド 【規模】20 × 14 × 26cm

SP180 小穴 (第 17 図)

【位置】調査区南、EK13 グリッド 【規模】22 × 16 × 34cm

#### 4 遺構外の出土遺物

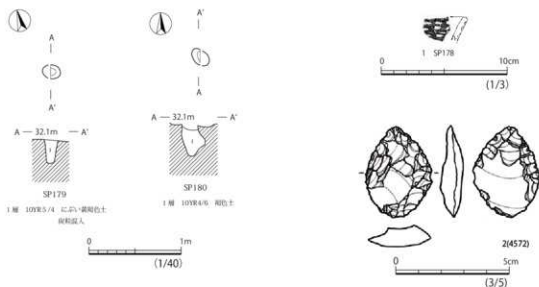
##### 縄文土器

調査で得られた縄文土器は総数 5,670 点を数える。小破片および摩滅が著しく時期判別など観察が不可能なものを除くと 1,708 点となる。その時期は、縄文時代中期後半から後期前葉に帰属する。

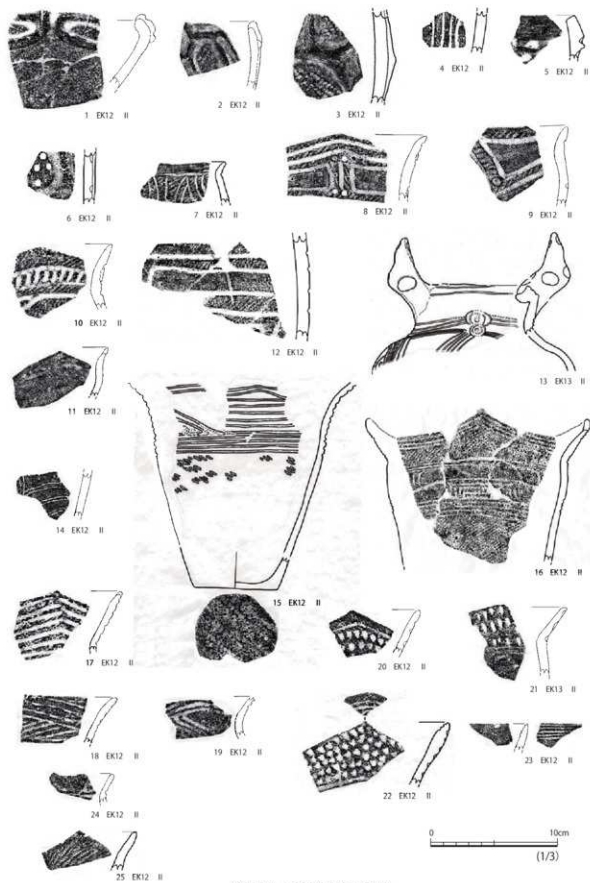
ただ、隣接する平成 8・9 年に実施された市道敷設に伴う調査で多く出土した、縄文時代後期初頭 (門前式) に比定できる資料は少ない。以下、帰属時期ごとに記述する。

##### 縄文時代中期の土器 (第 18 図 1～6)

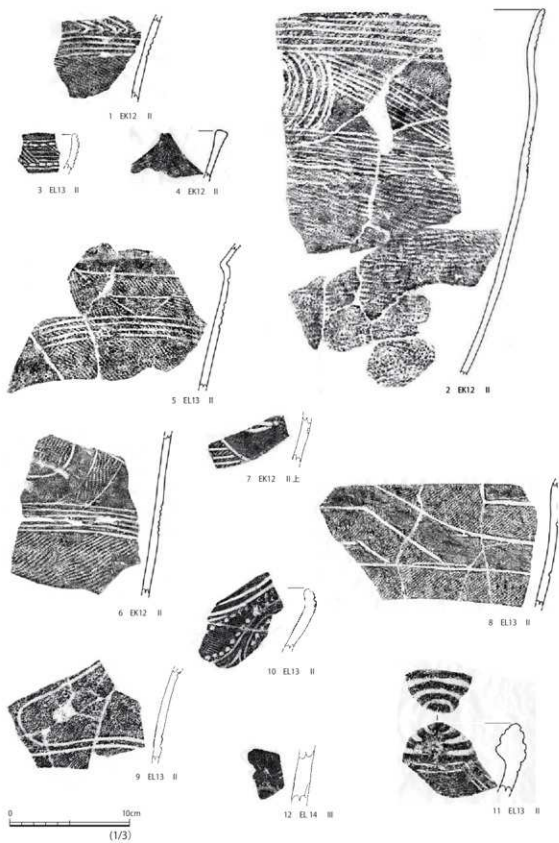
1 は浅鉢の口縁部破片で、内傾する口縁に沿って隆線で横位の楕円状区画となる。2・3 は隆線区画内に縄文が残る口縁部破片と胴部破片である。4 は平行沈線で縦位に区画している胴部破片、5 は口縁に沿った沈線内に刺突列を巡らせる口縁部破片、6 は隆沈線の区画内に刺突を充填する胴部破片である。縄文時代中期中葉から後葉とみられる。



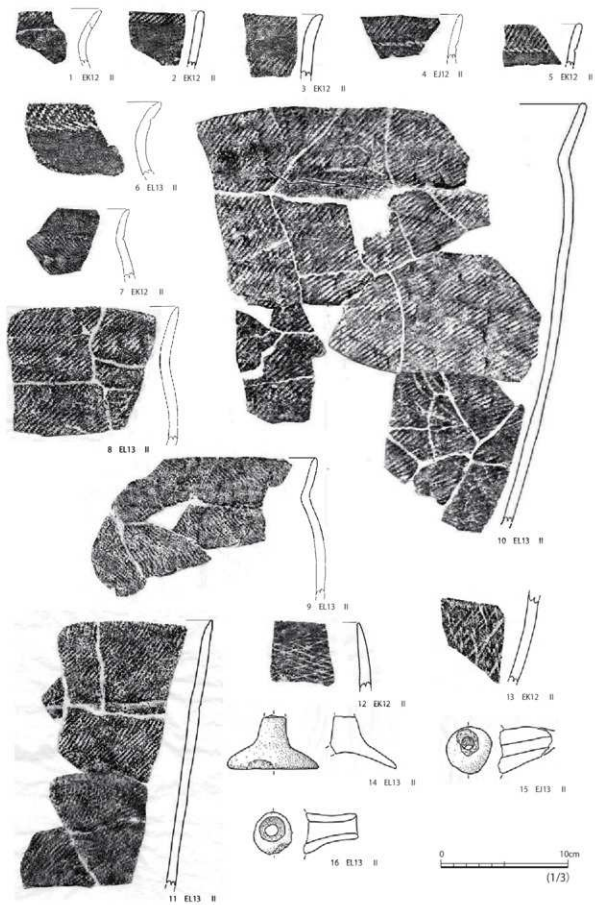
第 17 図 SP179・180 と SP173・178 出土遺物



第 18 图 遺構外出土土器 (1)



第19図 遺構外出土土器(2)



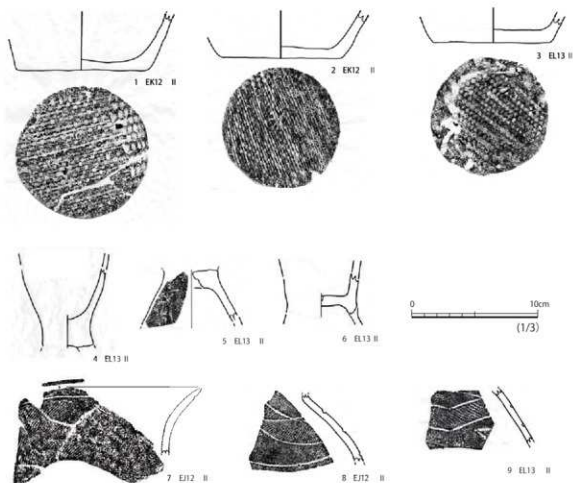
第 20 図 遺構外出土土器 (3)

縄文時代後期の土器（第18図7～25・第19図、図版29）

第18図7は胴部に弧状文が垂下する口縁部破片、8・9は平行沈線区画内に縄文が残る口縁部破片で、交点となる部分に円形突起がされる。10は口縁に沿った平行沈線間に刻み列が施される口縁部破片、11は波状を呈する浅鉢で、器面の摩滅が著しくほぼ無文の状態であるが、口縁に沿った沈線の跡が微かにみられる。12は方形区画された平行沈線間に縄文が残る胴部破片である。13は二単位の孔のある突起をもち頂部には盲孔が入る甕もしくは注口土器の口縁部で、頸部下の単位となる渦巻文から多重の弧状文が垂下する。14は平行沈線で横位・弧状沈線が描かれる胴部破片である。15～25は口縁部が外傾する深鉢である。15～17は地文施文後に間隔の狭い多重沈線を横位を基調として巡らせ、15・16は胴上部に三角状・方形の文様が施される。18・19は口縁部に沿って羽状沈線が巡り、20～22は口縁に刺突が充填される。22の波状頂部裏面には多重する沈線が描かれる。23は口縁内側上位に多重沈線が、24は摩滅が著しいが頸部に巡る沈線がみられる。25は地文のみの波状口縁部破片である。

第19図1は胴部破片で羽状沈線と文様帯区画の境に多重平行沈線が施される。2・3は横位・斜位の多重沈線を基調とし、2は円状文、3は短冊状の押し列が施される。4は摩滅が著しい波状口縁部の破片で波頂部に貼付けがされる。縄文時代後期前葉とみられる。

5～9は間隔の広い幾何学的な帯状区画に縄文が残る深鉢胴部破片である。5～7の文様帯区画の境には多重沈線が用いられている。10・11は波状を呈する口縁部破片で、10は沈線に沿って列点が施され、11は肥厚した波頂部に沈線が巡る。12は深鉢突起部分の破片である。縄文時代後期中葉とみられる。



第21図 遺構外出土土器(4)

### その他の土器 (第20図・第21図1～6)

粗製土器を一括した。第20図1～7は深鉢口縁部破片で、1～3は口縁部に無文帯をもち、4～6は口縁部の無文帯を原体圧痕で区切る。7は頸部に原体圧痕が巡る。8～11は地文のみの深鉢で、11は直線的に外傾する器形である。12・13は網目状撫糸文が施される深鉢口縁部破片である。14は円錐状の摘みがある蓋、15・16は注口土器の注口部である。

第21図1～3は網代痕がみられる底部破片、4～6は台付鉢の台部分の破片である。概ね後期前葉から中葉に属するとみられる。

### 弥生土器 (第21図7～9)

第21図7～9は磨消縄文を伴う帯状の区画文が描かれ、細かい縄文が施文される。7は壺の口縁部破片で、口唇と口縁部の幅広の区画帯に縄文が残る。8・9は壺の胴上部破片で、8は曲線的な、9は直線的な帯状区画文が描かれる。9の文様の屈曲部分には細竹管による円形刺突が施される。弥生時代中期とみられる。

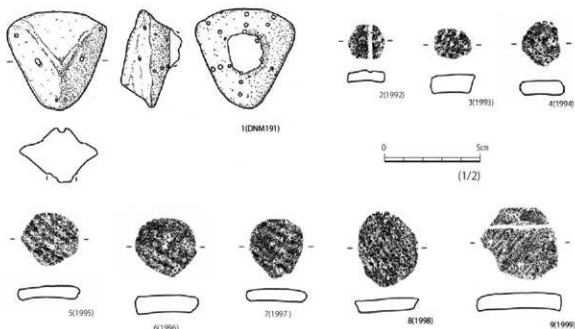
### 土製品

#### 土偶 (第22図1、図版29)

頭部の破片である。全体に磨滅が著しいが顔面中央にV字状の稜があり、その外側、左右に目が刻まれる。他に鼻や耳と推定される刺突が残る。

#### 土器片製円盤 (第22図2～9)

全て縄文土器破片を再利用している。破片の外周を研磨し円形に整えている。



第22図 遺構外出土土製品・土器片製円盤

## 石器

### 石鐮 (第23図1～17、図版29)

無茎(1～9)と有茎(10～17)に大別できる。無茎の石鐮は、基部中央に挟り込みがある。有茎の石鐮は身部が短めのもの(10・13)と身幅を超える長めのもの(11・12・14・15)がある。16・17は身部に比して茎部が極端に小さい。

### 石錐 (第23図18～20、図版29)

全て錐部の破片である。断面が円形に近く石錐の破片と判断した。

### 石匙 (第23図21、図版29)

横型の石匙である。

### 搔器類 (第23図22～34・第24図1～12、図版29・30)

概ね調整剥離が集中する刃部の角度が鈍角な剥片石器を一括した。形態・機能的には、円形搔器、削器を含む。

第23図22～27、29・30は上端が尖り、基部に向かって広がり、下辺が緩やかな弧を描く形態を呈する。31・32は厚みのある剥片の側縁を粗く調整し刃部としたと推定される。33は右側縁上部、34は下方両側縁に細かな調整剥離が見られ、同部位を刃部としている。

第24図1～3は縦長剥片の下端と左右いずれか一方の側縁を刃部としたと推定される。4は礫皮面が残り、表面のみに粗い調整が施されている。未成品の可能性がある。5・6は台形状の断面を呈し、刃部角度を鈍角に調整している。7は長方形の平板な剥片の全周を粗く打ち欠き刃部としている。

8・9はいわゆる円形搔器の形態を呈する。10～12は円・台形様の不整形な剥片の両面に粗い調整が施されている。細かい調整が施された側縁を刃部としたと思われる。一部礫皮面も残る。

### 石核 (第24図13・第25図1、図版30)

第24図13は、上面を打面とする石核で縦長剥片を剥離している。第25図1は接合され楕円状の形態となる。分割された破断面をみると、分割後に調整剥離が施されている。周縁に使用痕も見られないことから素材剥片を得るために調整された石核と判断した。

### 磨製石斧 (第25図2、図版30)

刃部の一部と基部が欠損した磨製石斧である。

### 磨石 (第25図3・4、図版30)

3・4ともに全面に研磨痕が見られる。

### 敲石 (第25図5・6、図版30)

5・6ともに下端部に敲打による剥離やつぶれ痕が見られる。

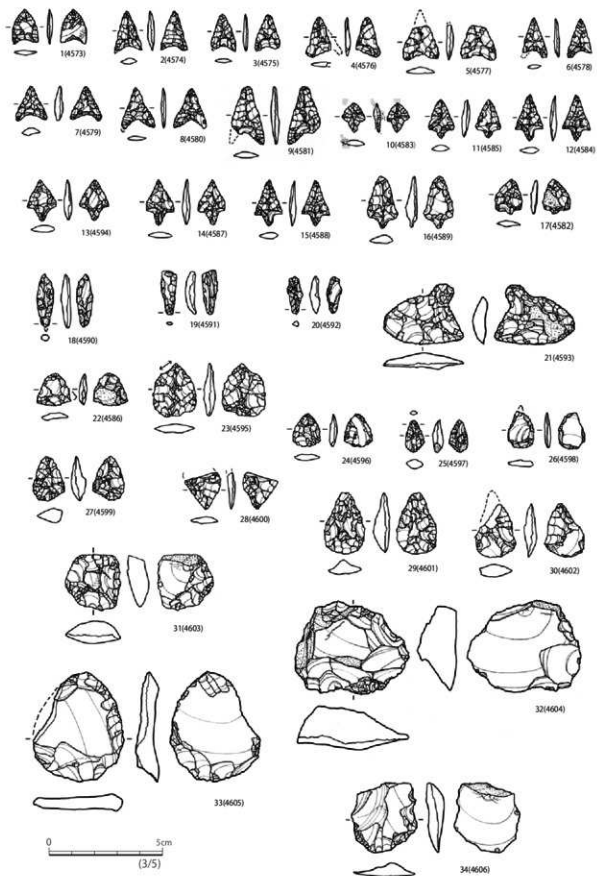
### 凹石 (第25図7～9、第26図1、図版30・31)

第25図7は表面に1箇所くぼみがある。8は破片で表裏両面にくぼみがある。9は表面と左右両面にくぼみがある。第26図1は表裏両面に2ヶ所ずつくぼみがある。

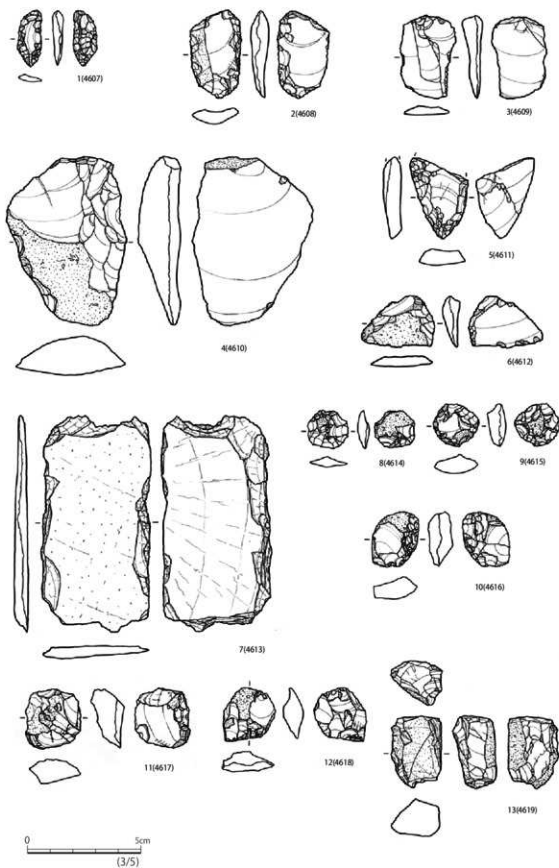
### 台石 (第26図2、図版31)

大形で扁平な礫の破片である。据え置いて研磨や敲打作業の際に作業台として用いたと思われる。

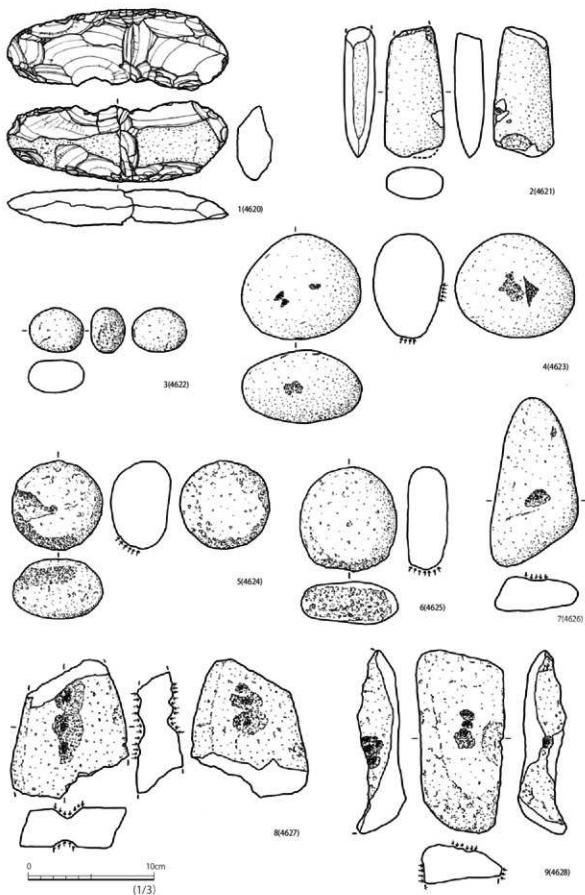




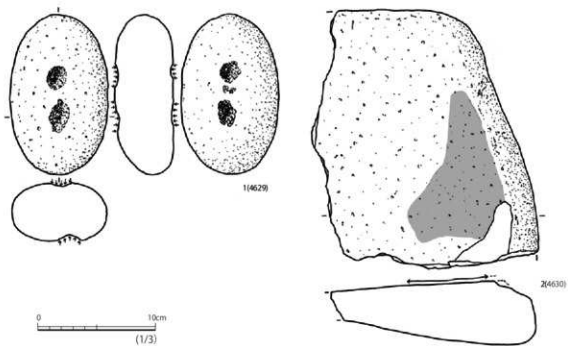
第 23 図 遺構外出土石器 (1)



第 24 図 遺構外出土石器 (2)



第 25 図 遺構外出土石器 (3)



第 26 図 遺構外出土石器 (4)

## 第2節 5・8区の調査

### 1 調査の経過と方法

平成25年4月、堂の前貝塚の遺跡範囲である陸前高田市米崎町字堂の前139番地4の一部において個人専用住宅建築に伴う進入路の造成が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、堂の前貝塚第5調査区として、平成25年5月7日から調査に着手した。

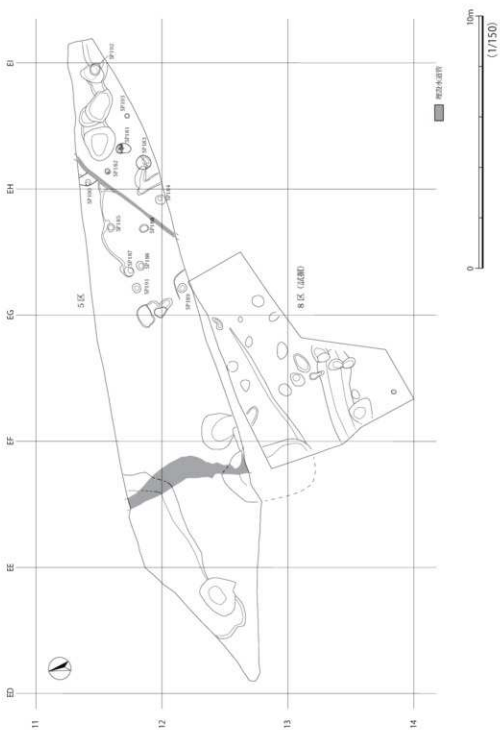
調査は、対象区域内の表土を除去し遺跡規模を把握する試掘調査から開始した。その結果、随所に近現代の攪乱を受けているが、部分的に縄文時代中・後期の遺物包含層を確認し、調査対象全域に同期の遺構が分布する可能性を認めた。

この結果を受け、全域の表土及び客土層を除去し遺構確認面まで掘削した。調査区に配したグリッドは、1～3区で採用した区画に準じた。検出した遺構は、『発掘調査のてびき』に掲載された遺構略号に準拠して名称と番号を付した。遺構実測は、グリッドラインを基準に遺り方測量を行い縮尺は20分の1と10分の1を基本とした。記録写真は35mmネガフィルムでモノクロームとカラーの2種を撮影し、補助的にデジタルカメラも使用した。出土遺物は、グリッド・遺構・層位ごとに採取した。調査は、平成25年6月5日に終了した。

さらに、平成25年8月には5区隣接の同地番地において追加造成工事が必要となり、同事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、5区の調査成果をふまえ、平成25年9月12～20日、堂の前貝塚第8調査区として区域内の表土を全面除去し、5区で確認された縄文時代中・後期の遺物包含層の広がりを確認する試掘調査を実施した。その結果、近現代の攪乱が著しく、遺物包含層は確認されず遺構も皆無であったため、本調査へ移行する必要はないと判断した。



写真5 5区調査終了



第27図 5・8区遺構分布

## 2 遺構の概要と基本層序 (第 27 図、図版 7・8)

5・8 区ともに表土除去後に精査し検出した、地山層への掘り込みと思われる全ての変色箇所を半裁し遺構の可能性を確認した。

その結果、5 区で小穴 13 基を検出した。隣接する 8 区では明確に遺構と判断できるものは無い。

両調査区ともに地山層まで及ぶ畑地造成工事が行われており、5 区においては部分的に遺物包含層を確認したものの、検出した小穴はいずれも浅く、底面付近のみの残存と思われる。調査区内から除去した表土には、現代の建築廃材が混じりわずかに縄文土器と石器の細片を含んでいる。小穴の調査は、半裁し土層断面と半裁部分の実測にとどめた。

## 3 遺構と出土遺物

検出した遺構は 5 区の小穴 13 基のみで、8 区では遺構・遺物ともに検出されなかった。

小穴 (第 28 図、第 29 図 1～3・30 図、表 1、図版 7・32)

5 区で検出された小穴は、調査対象区域の東側に集中している。その配列に特に規則性は見いだせない。小穴からは摩滅が著しい縄文土器の小片が出土した。沈線等の文様がみられるものを掲載した。

SP181 から平行沈線区画内に縄文が残る後期前葉とみられる胴部破片 (第 29 図 1)、SP183 から地文のみの胴部破片 (第 29 図 2)、SP190 から横位の沈線がある胴部破片 (第 29 図 3) がそれぞれ出土した。

SP181 からは、磨石 (第 30 図 1) も出土している。

番号	グリッド	遺構番号	規模 (cm)			形状
			長軸	短軸	深さ	
1	EH11	SP181	60	40	10	楕円
2		SP182	24	20	10	円
3		SP183	60	54	10	円
4	EH11・12	SP184	30	34	22	円
5	EG11	SP185	32	30	12	円
6		SP186	38	32	8	楕円
7		SP187	40	34	10	楕円
8		SP188	36	30	10	楕円
9	EG12	SP189	38	30	28	楕円
10	EH11	SP190	24	20	28	楕円
11	EG11	SP191	36	30	24	楕円
12	EH11	SP192	50	34	30	楕円
13		SP193	20	20	18	円

表 1 5 区小穴計測表

## 4 遺構外の出土遺物

縄文土器 (第 29 図 4～8)

4～6 は包含層、7・8 は試掘トレンチから出土した。4 は降線と沈線で施文した胴部破片、5・6 は平行沈線区画内に縄文が残る胴部破片、7 は外傾し横位の多重沈線が巡る口縁部破片、8 は沈線区画内に縄文が残る胴部破片である。4 は中期中葉、5～8 は後期前葉とみられる。

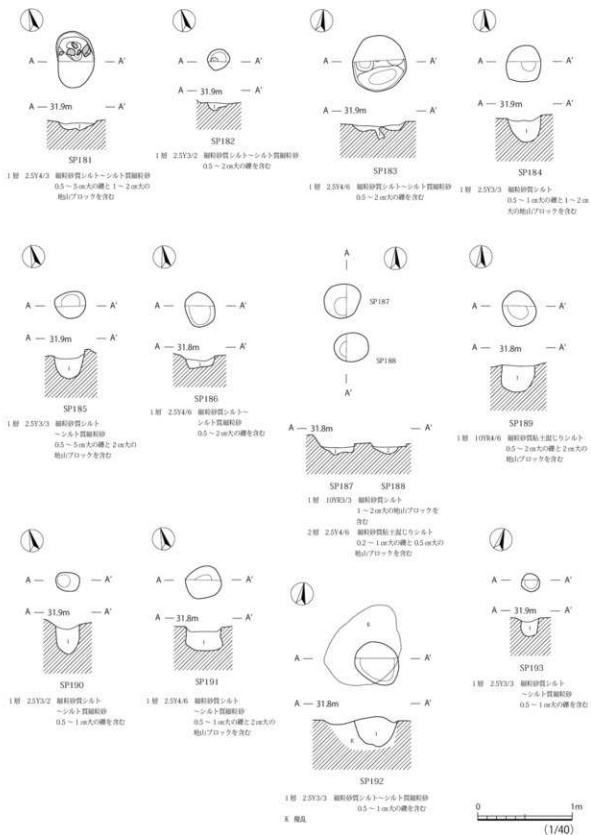
## 石器

石鎌 (第 31 図 1～4、図版 32)

1 は基部下半が欠損している。2・3 は基部が浅く欠損している。4 は基部中央が突出し菱形の形状を呈する。いずれも表裏面ともに入念な調整剥離が施されている。

石鎌 (第 31 図 5、図版 32)

先端部が欠失した破片である。

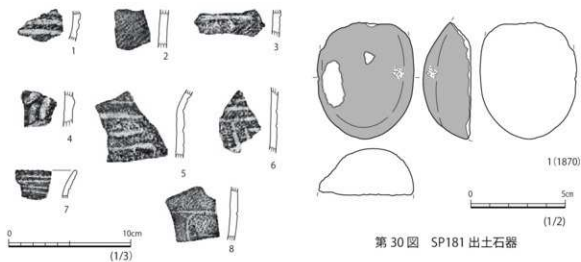


第28図 5区 SP181～193



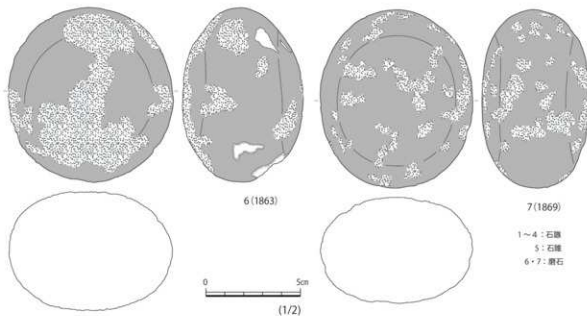
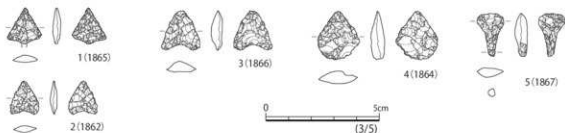
磨石 (第31図6・7、第32図1、図版32)

第31図6・7は円形の平面形を呈する磨石である。全面が研磨され、一部に敲打による剥離痕が観察される。第32図1は楕円形の磨石の半壊品である。裏面に著しい剥離痕が観察される。



第30図 SP181出土石器

第29図 5区出土縄文土器



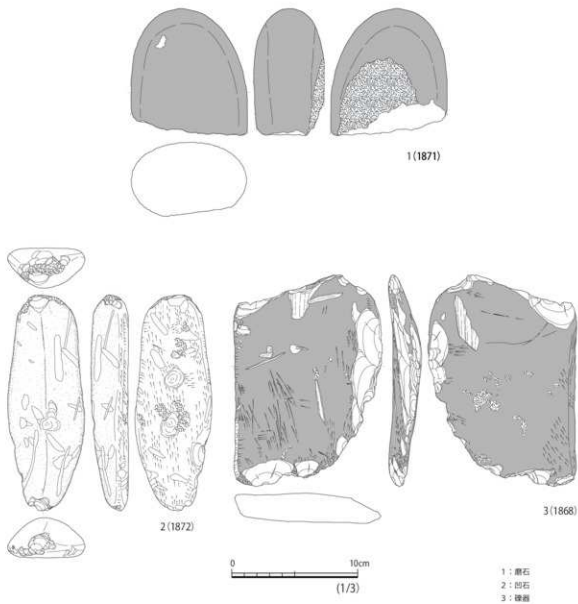
第31図 遺構外出土石器 (1)

凹石 (第 32 図 2、図版 32)

断面が三角形を呈する。平らな裏面の中央に 2ヶ所の窪みがみられる。上下端部に敲打による剥離痕がみられる。

礫器 (第 32 図 3、図版 32)

扁平な素材の弧状を呈する側縁部を粗く打ち欠き刃部とする。



第 32 図 遺構外出土石器 (2)

### 第3節 6区の調査

#### 1 調査の経過と方法

平成25年1月、堂の前貝塚の遺跡範囲である陸前高田市米崎町字堂の前138番地1の一部・3において個人専用住宅建築が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、平成25年6月12日から調査に着手した。

調査は、北側の私道部分と南側の宅地部分に分け、対象区域内の表土を遺構確認面まで重機によって除去し、その後、人力によって精査し遺構検出を行った。

調査区に配したグリッドは、平成24年度に1～3調査区で採用した区画に準じた。検出した遺構は、『発掘調査のてびき』に掲載された遺構略号に準拠して名称と番号を付した。遺構実測は、グリッドラインを基準に遺り方測量を行い縮尺は20分の1と10分の1を基本とした。記録写真は35mmネガフィルムでモノクロームとカラーの2種を撮影し、補助的にデジタルカメラも使用した。出土遺物は、グリッド・遺構・層位ごとに採取した。調査は、平成25年9月20日に終了した。

#### 2 遺構の概要と基本層序(第33～35図、図版9～11)

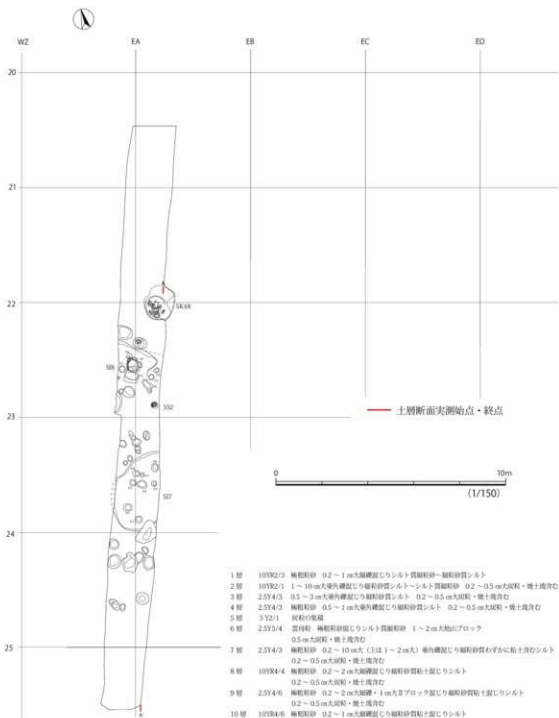
6区で検出された遺構は、竪穴建物跡4棟・土坑16基・配石遺構1基である。竪穴建物は、土坑が集中する調査区中央部を挟んで南北に2棟ずつ分布する。400基を超える小穴を調査したが、近現代の果樹畑造成工事が深部まで及び、縄文時代以降の堆積層が消失、攪乱されているため、構築時期を決定できず遺構の認定には至らなかった。また、その配列にも規則性は見いだせなかった。多数の小穴には、縄文時代以降の構造物と近現代の耕作に由来するものが混在していると思われる。

土坑は、調査区中央に円を描くように分布している。なかには大形礫が充填されているものも見られ、SK34では注口土器が3個体検出された、墓坑群の可能性もある。

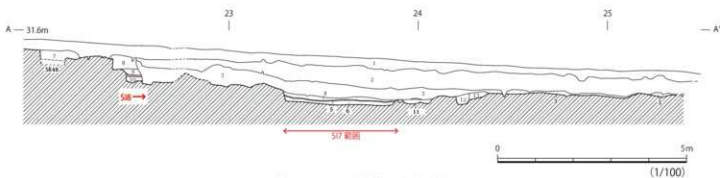
調査区全域にわたって近現代の果樹畑造成工事が及び、掘削による堆積土の消失や客土を推定させる土層が見られる。地山は、風化した花崗岩層、あるいは小礫が混じる赤褐色のシルト層である。



写真6 6区調査状況



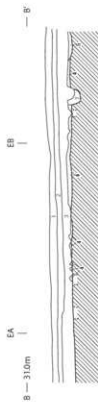
- 1層 10YR2/7 焼粘土層 0.2～1m大層積じりシルト質細粒砂-細粒砂質シルト
- 2層 10YR2/1 1～10cm大層外積じり細粒砂質シルト-シルト質細粒砂 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 3層 2.5Y4/3 0.5～3cm大層外積じり細粒砂質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 4層 2.5Y4/3 焼粘土層 0.5～1cm大層外積じり細粒砂質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 5層 5Y2/1 灰粘土層
- 6層 2.5Y5/4 雲母粘 焼粘土層積じりシルト質細粒砂 1～2cm大粒のブロック 0.5m大層積・焼土塊含む
- 7層 2.5Y4/3 焼粘土層 0.2～10cm大(主は1～2cm大)層外積じり細粒砂質わずかに粘土含むシルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 8層 10YR4/4 焼粘土層 0.2～2cm大層積じり細粒砂質粘土質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 9層 2.5Y4/6 焼粘土層 0.2～2cm大層積・1cm大ブロック質じり細粒砂質粘土質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 10層 10YR4/6 焼粘土層 0.2～1cm大層積じり細粒砂質粘土質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 11層 2.5Y4/3 0.5cm大層積じり細粒砂質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 12層 2.5Y4.5/1 0.5～1cm大層積じり細粒砂質シルト 0.2～0.5m大層積・焼土塊含む
- 13層 2.5Y4/4 0.5～1cm大層積じり砂質シルト



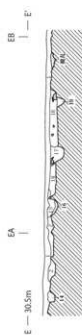
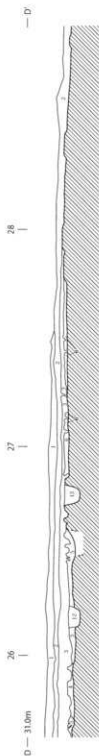
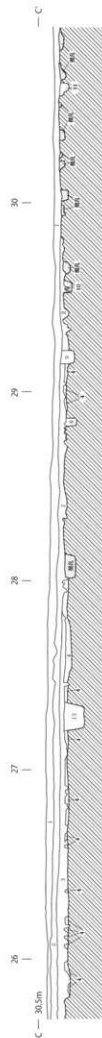
第33図 6区遺構分布(北側)



第 34 图 6 区遺構分布 (南側)



- 1層 107821.2 雑草腐植層 0.2～0.4m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 2層 107821.3 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 3層 2337.3 雑草腐植層 0.2～5.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 4層 107821.6 雑草腐植層 0.2～5.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 5層 10784.4 雑草腐植層 0.2～5.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 6層 2334.8 雑草腐植層 0.2～5.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 7層 10784.6 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0



- 8層 107821.4 雑草腐植層 0.2～0.4m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 9層 107821.4 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 10層 107821.4 雑草腐植層 0.2～0.5m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 11層 107821.4 雑草腐植層 0.2～0.5m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 12層 10784.6 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 13層 2337.3 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0



- 14層 107821.4 雑草腐植層 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 15層 107821.2 雑草腐植層 0.2～2.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、有機物含有率1.2%
- 16層 107821.2 雑草腐植層 0.2～1.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 17層 107821.4 雑草腐植層 0.2～1.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 18層 107821.4 雑草腐植層 0.2～1.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0
- 19層 107821.3 1.0m 土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0、土壌層状に中級腐植質を認められ、pHは6.0

第35図 6区土層断面(南側)

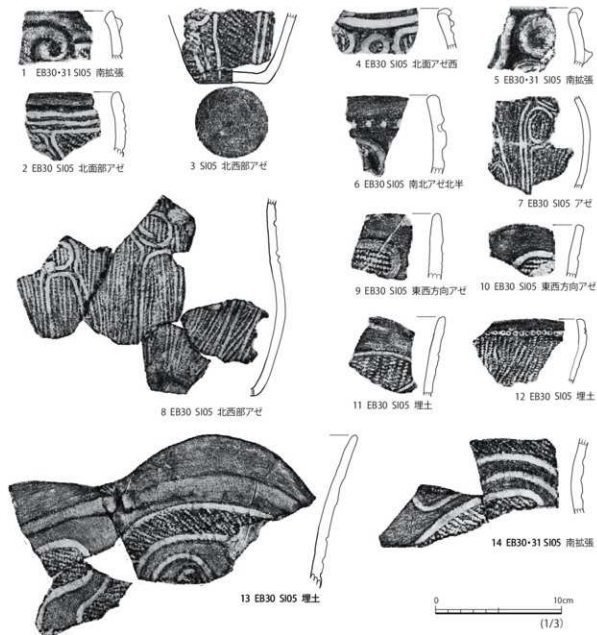
### 3 遺構と出土遺物

#### 竪穴建物跡

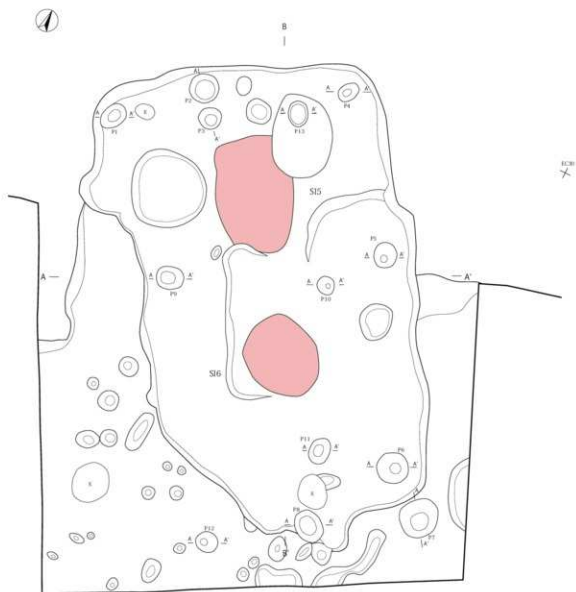
S15 竪穴建物跡 (第 36 ~ 40 図、図版 12・33)

【位置】 南側調査区南端、EB30 グリッド 【規模】 306 × 300 × 20cm

【重複】 S16、先後関係は不明 【出土遺物】 縄文土器 19(埋土一括として出土。第 36 図 1 ~ 8 は中期中葉から後葉、9 ~ 14、第 39 図 1・2 は中期末葉、3 ~ 5 は後期前葉から後葉とみられる。)、石皿 1 (砥石に転用) 【所見】 一辺 3m ほどの方形を呈すると推定される。床面の中央には、120 × 80cm の範囲で炉床と推定される被熱赤化した地山が見られる。



第 36 図 S15 出土土器 (1)



A — 30.0m

— A'



B — 29.9m

— B'

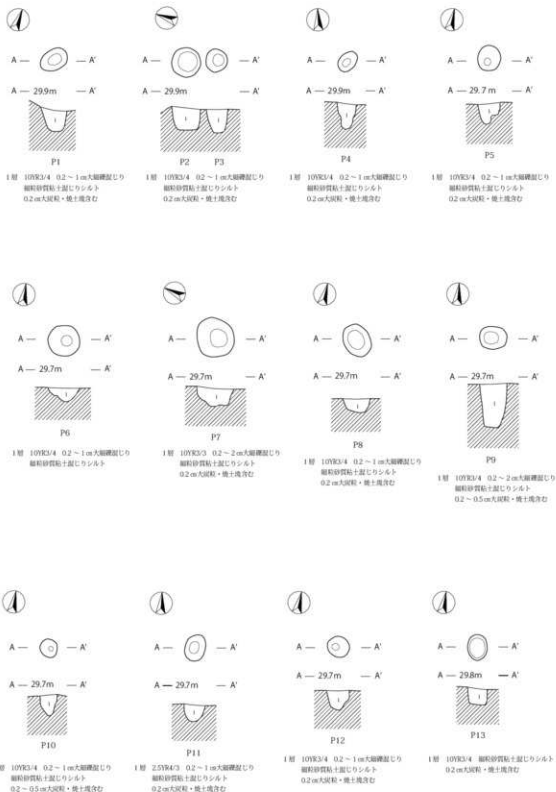


- 1 層 2 SIS/2 2~5cm大塚内埋戻し(り)細砂 0.5cm大塚砂・粘土混合  
 2 層 SIS/6 埋戻しより赤化した粘土層

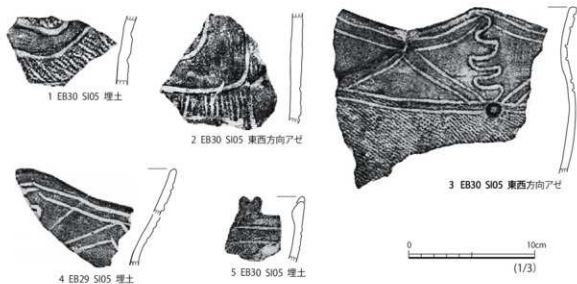
0 1m  
 (1/40)

第 37 図 SIS・6

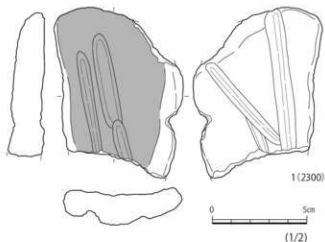




第38図 S15・6柱穴



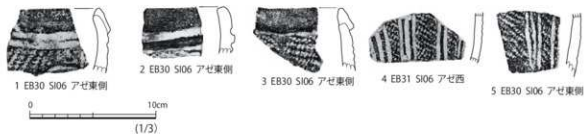
第39図 S15 出土土器(2)



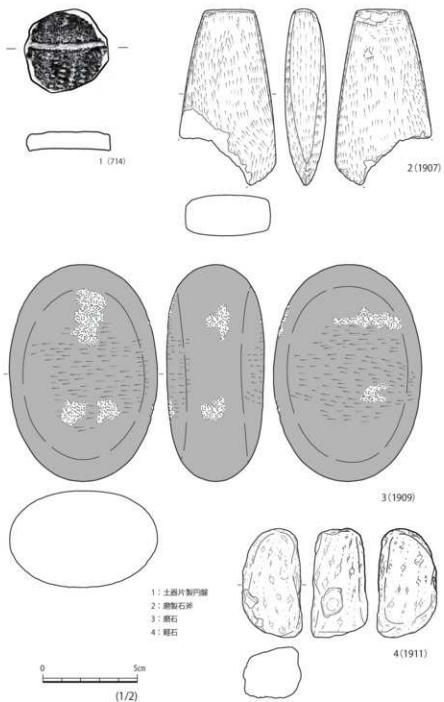
第40図 S15 出土土器

S16 竪穴建物跡 (第37・38・41・42図、図版12・33)

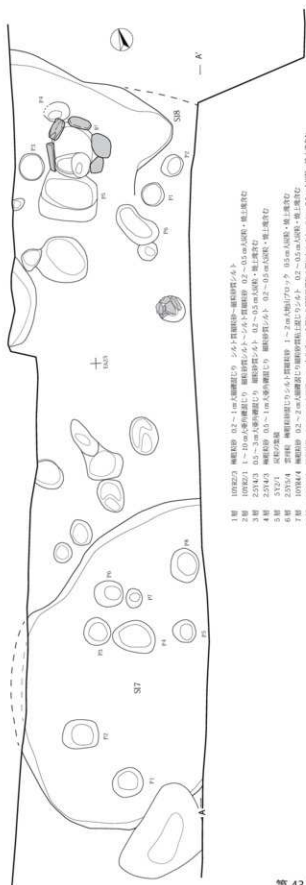
【位置】南側調査区南端、EB30・EC30 グリッド 【規模】350×300×20cm 【重複】S15、先後関係は不明 【出土遺物】縄文土器5(埋土一括として出土。中期中葉から末葉とみられる。)、土器片製円盤1、磨製石斧片(基部)1・磨石1・軽石製品1 【所見】長軸3.5m、短軸3.0m程の長方形を呈すると推定される。床面の中央には、炉床と思われる90×70cmの範囲の被熱赤化した地山が見られる。



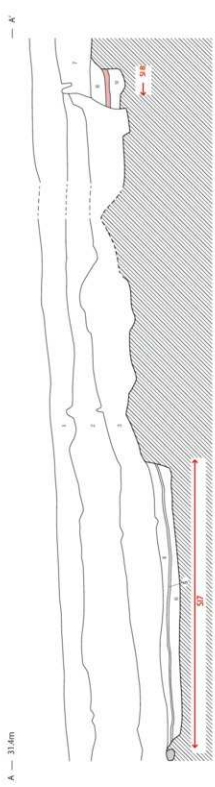
第41図 S16 出土土器



第 42 图 S15・6 出土土器片製円盤、S16 出土石器



- 1 堀 100E27 堀状跡 0.2～1.0m深掘り、シロト貫通跡・掘削跡シロト
- 2 堀 100E27 1～10m深掘り、掘削跡シロト・外ノ貫通跡 0.2～0.5m深掘り・掘上痕跡
- 3 堀 100E27 1～10m深掘り、掘削跡シロト
- 4 堀 251A3 堀状跡 0.2～1.0m深掘り、掘削跡シロト
- 5 堀 512/3 堀状跡 0.3～1.0m深掘り、掘削跡シロト 0.2～0.5m深掘り・掘上痕跡
- 6 堀 251/4 251E 堀状跡 1～2m深掘り、シロト貫通跡 0.5m深掘り・掘上痕跡
- 7 堀 100E44 堀状跡 0.2～2.0m深掘り、掘削跡掘上掘りシロト 0.2～0.5m深掘り・掘上痕跡
- 8 堀 251A6 堀状跡 0.2～2.0m深掘り、1.0m深掘り、外ノ貫通跡掘上掘りシロト 0.2～0.5m深掘り・掘上痕跡
- 9 堀 100E46 堀状跡 0.2～1.0m深掘り、掘削跡掘上掘りシロト 0.2～0.5m深掘り・掘上痕跡



第43図 S17・8

SI7 竪穴建物跡 (第 43～45 図、図版 12・33)

【位置】北側調査区中央、WZ 23・EA23 グリッド 【規模】350×280×20cm 【出土遺物】縄文土器 4(掘方埋土として出土。後期初頭から前葉とみられる。) 石鏡 1・磨製石斧 1

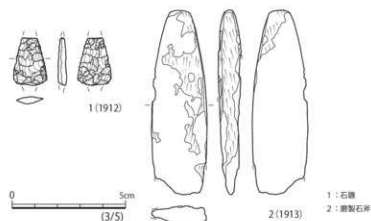
【所見】長軸 3.5m、短軸 3.0 m 程度の楕円形を呈すると推定される。地山の混じる貼り床の上面に、炭化物の薄層が堆積していた。

SI8 竪穴建物跡 (第 43・46 図、図版 12・13)

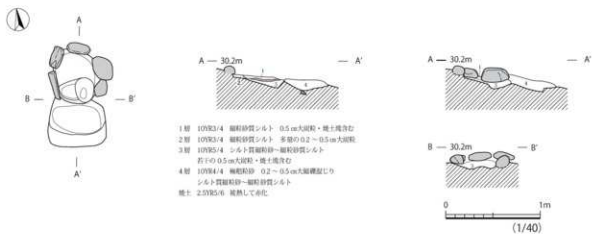
【位置】北側調査区中央、WZ22・EA22 グリッド 【規模】一辺 2.5m 以上 【所見】石囲い炉と柱穴のみ検出された。方形を呈すると推定されるが、詳細は不明である。



第 44 図 SI7 出土土器・土器片裂円盤



第 45 図 SI7 出土石器

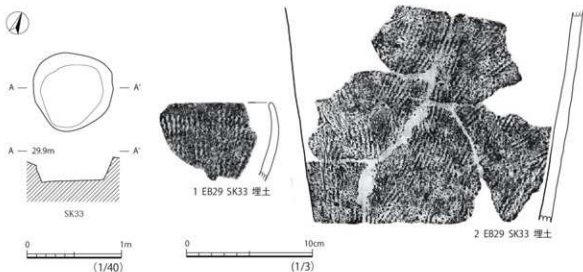


第 46 図 SI8 炉

土坑

SK33 土坑 (第 47 図、図版 13)

【位置】南側調査区南、EA29・EB29 グリッド 【規模】80×80×24cm 【出土遺物】縄文土器 2(埋土一括として出土。いずれも地文のみの破片である。) 【所見】直径 80cm の円形を呈する。底面は平坦である。



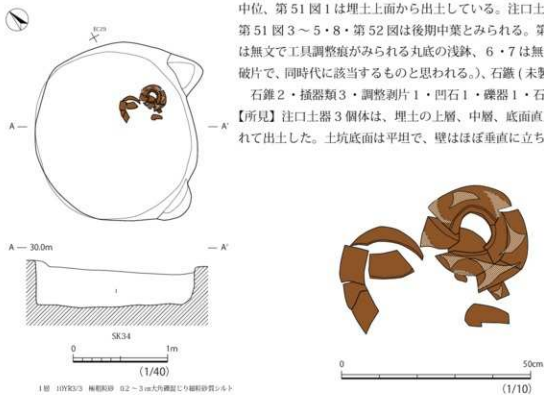
第 47 図 SK33 と出土土器

SK34 土坑 (第 48～53 図、図版 13・33・34)

【位置】南側調査区南東、EB29・EC 29 グリッド 【規模】220×190×48cm

【出土遺物】縄文土器 12(埋土一括として出土。精査状況写真より、第 50 図 1 は埋土下位、2 は埋土中位、第 51 図 1 は埋土上面から出土している。注口土器 3 点・第 51 図 3～5・8・第 52 図は後期中葉とみられる。第 51 図 2 は無文で工具調整痕がみられる丸底の浅鉢、6・7 は無文の深鉢破片で、同時代に該当するものと思われる。)、石鏝(未製品) 1・石錐 2・挿器類 3・調整剥片 1・凹石 1・礫器 1・石皿 1

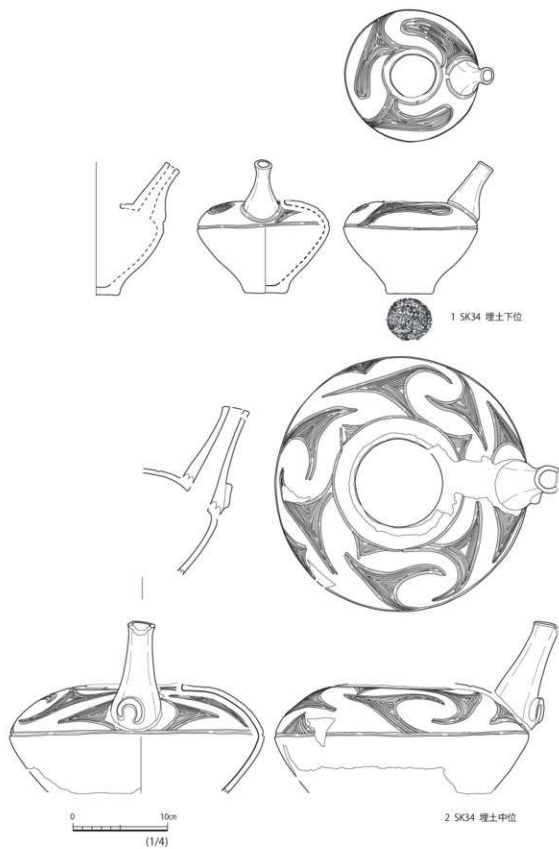
【所見】注口土器 3 個体は、埋土の上層、中層、底面直上に分かれて出土した。土坑底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



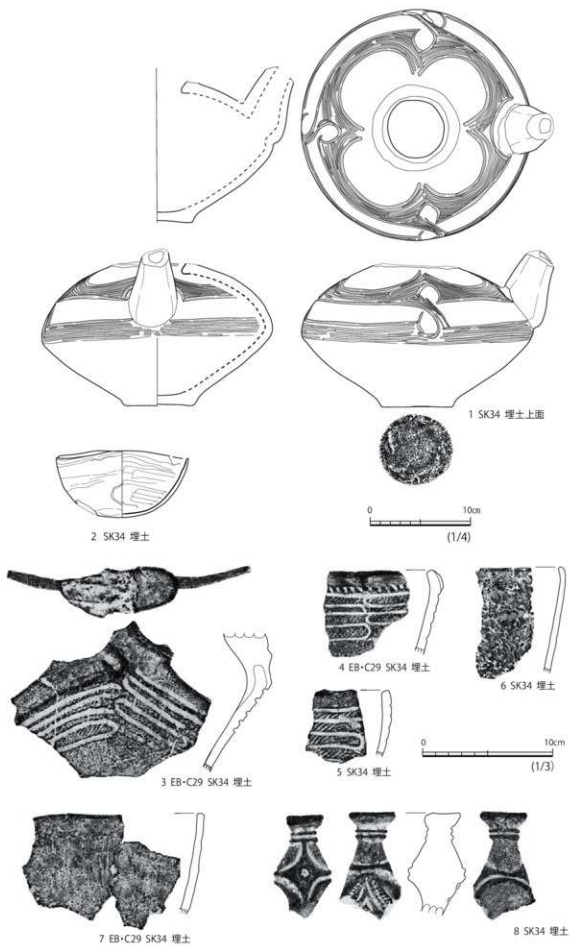
1 器 10YK3/C 横形陶器 0.2～3.0cm 大内側面じり横形砂質ロート  
0.5cm 大断面・後土高付む

第 48 図 SK34

第 49 図 SK34 注口土器(埋土中位出土) 出土状況

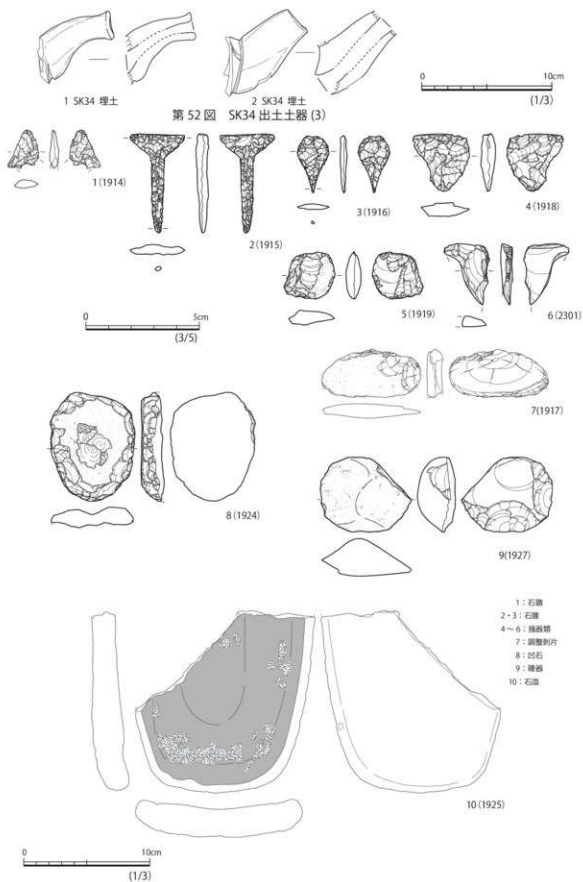


第 50 图 SK34 出土土器 (1)



第 51 图 SK34 出土土器 (2)





第 53 图 SK34 出土石器

SK35 土坑 (第 54・55 図、図版 14)

【位置】 南側調査区南、EA28、EB28・29 グリッド

【規模】 168 × 130 × 30cm

【出土遺物】 縄文土器 3(埋土一括として出土。第 55 図 2 は中期末葉から後期初頭とみられる。1 は無文、3 は木葉痕がある底部破片で、いずれも摩滅が著しい。)、土器片製円盤 1

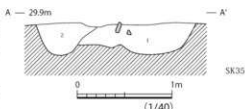
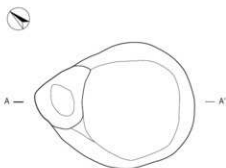
SK36 土坑 (第 56 ~ 60 図、図版 14・34)

【位置】 南側調査区中央付近、EB27・28、EC27・28 グリッド

【規模】 180 × 170 × 90cm

【出土遺物】 縄文土器 14(第 58 図 1 は 6 ~ 8 層、第 57 図 1・第 58 図 2・3 は 3・4 層、第 57 図 2 は 1 ~ 3 層、第 58 図 4 ~ 8 は 1・2 層、第 57 図 3・第 58 図 9 ~ 11 は埋土一括として出土。第 58 図 1 は地文のみの胴部破片、その他は後期中葉とみられる。)、土器片製円盤 2 調整剥片 1・磨石 1・礫器 1・砥石 1

【所見】 開口部より底面が広いフラスコ状を呈する。底面近くに炭化物や焼土の堆積が認められる。底面付近では、拳大から人頭大の礫が出土した。埋土 3・5 層から花粉分析試料 4 点を採取した。



- 1層 25%1/4 腐植砂 0.2 ~ 2cm 大角礫混じり細粒砂質シルト  
0.5 cm 大炭粒・焼土塊含む
- 2層 10%3/4 腐植砂 0.2 ~ 2cm 大角礫混じり  
細粒砂質シルト 2cm 大角山ブロックと  
0.5 cm 大炭粒・焼土塊含む

第 54 図 SK35



1 EB28・29 SK35 埋土



2 EB28・29 SK35 埋土

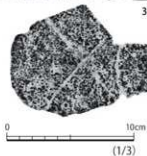


3 EB29 SK35 埋土



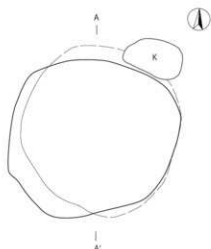
4(717)

(1/2)



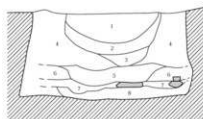
(1/3)

第 55 図 SK35 出土土器・土器片製円盤



- 1層 2.573/3 細粒砂砂 0.2～3cm大礫内埋設じり細粒砂質シルト  
1～2cm大礫山ブロック 0.5cm大礫形・埋土塊含む
- 2層 10VX3/2 細粒砂砂 0.2～1cm大礫埋設じり細粒砂質シルト  
0.5cm大礫形・埋土塊含む
- 3層 2.573/3 若干の0.5～1cm大礫埋設じり細粒砂質シルト  
0.2～0.5cm大礫形・埋土塊含む

A — 30.0m — A'

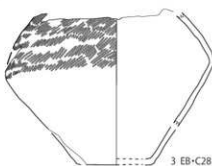
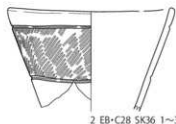
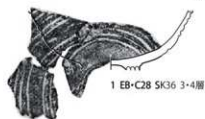


0 1m  
(1/40)

- 4層 2.574/6 極細砂砂 0.2～2cm大礫埋設じり細粒砂質粘土質シルト  
2～5cm大礫山ブロックと0.5cm大礫形・埋土塊含む
- 5層 10VX4/4 粗～細粒砂砂埋設じり細粒砂質粘土質シルト  
1～2cm大礫山ブロックと0.5cm大礫形・埋土塊含む
- 6層 磁砕した礫山(シルトブロックと2～3cm大礫埋設じり)
- 7層 10VX1/1 0.5～1cm大の同化物粒の集積
- 8層 10VX5/6 細粒砂質粘土質シルト 0.5cm大礫形・埋土塊含む(埋土塊あり)

SK36

第56図 SK36



0 10cm  
(1/4)

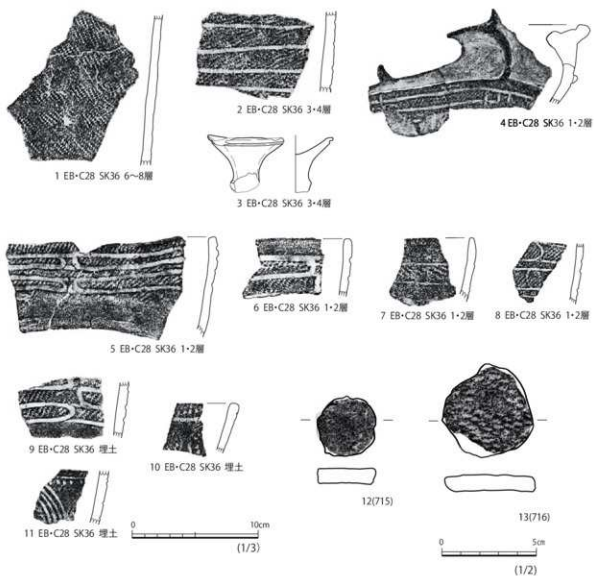
第57図 SK36 出土土器(1)

SK37 土坑 (第61～64図、図版14・35)

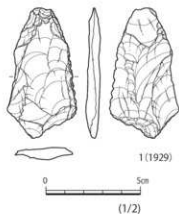
【位置】南側調査区中央付近、EB28グリッド 【規模】162×128×80cm 【重複】SK46、先後関係はSK37→SK46 【出土遺物】縄文土器21(第62図1・2・第63図3～9は3層、8～10は2層、第63図1・2・13～19は埋土一括として出土。いずれも後期中葉とみられる。) 礫器1・台石1 【所見】底面の南半には、拳大から人頭大の礫が充填されている。埋土3層から花粉分析試料2点採取した。

SK38 土坑 (第65図、図版14)

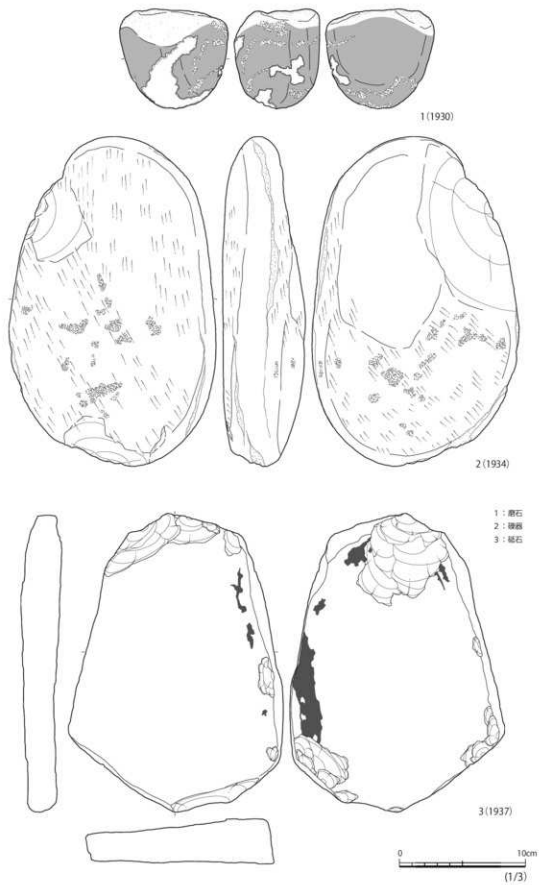
【位置】南側調査区中央付近、EB28グリッド 【規模】90×70×12cm  
【出土遺物】縄文土器1(埋土一括として出土。後期中葉とみられる。)、土器片製円盤1



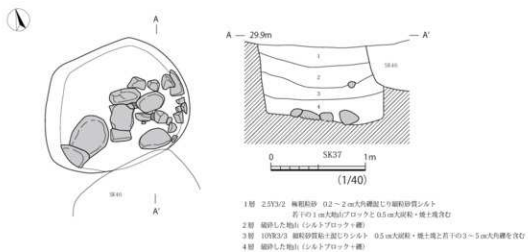
第58図 SK36出土土器(2)・土器片製円盤



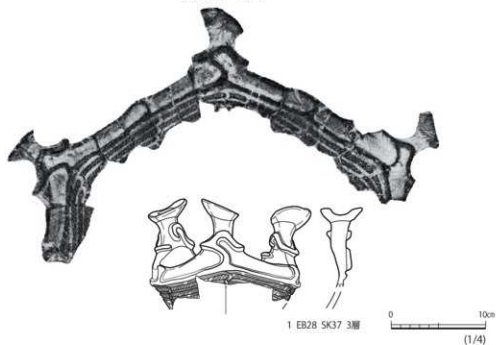
第59図 SK36出土石器(1)



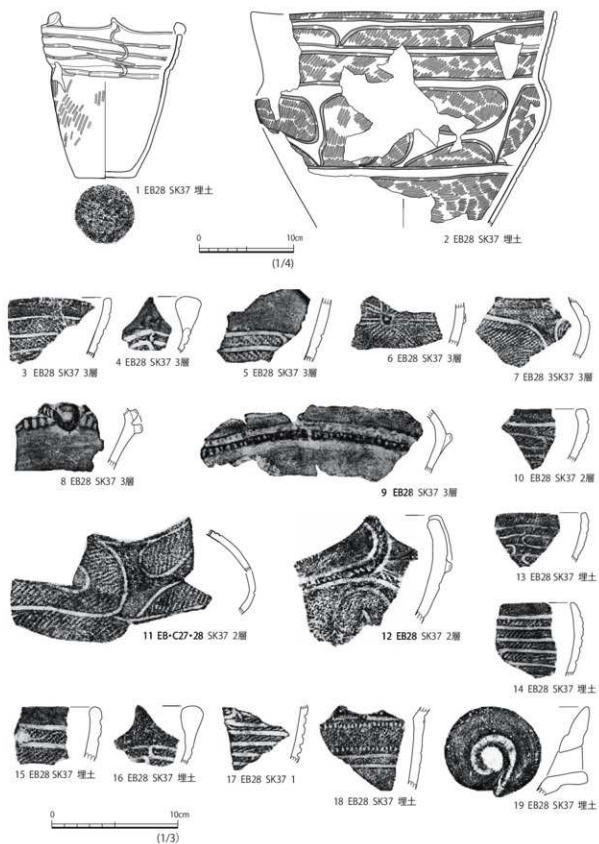
第 60 图 SK36 出土石器 (2)



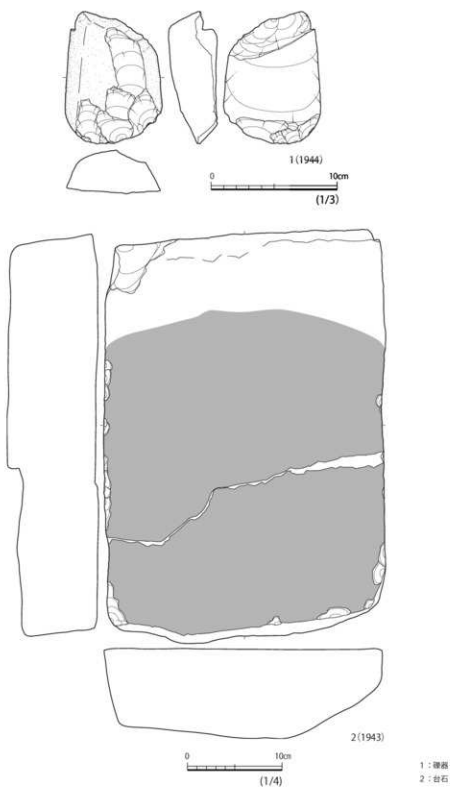
第 61 図 SK37



第 62 図 SK37 出土土器 (1)

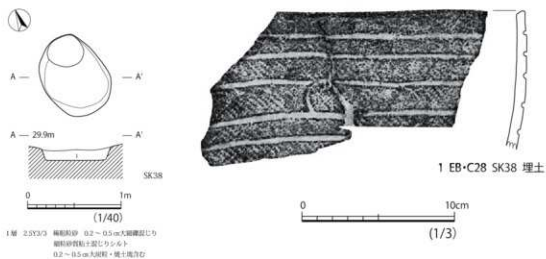


第 63 図 SK37 出土土器 (2)



第 64 図 SK37 出土石器





SK 39 土坑 (第 66 図、図版 14)

【位置】南側調査区中央付近、EA28 グリッド

【規模】170 × 150 × 34cm

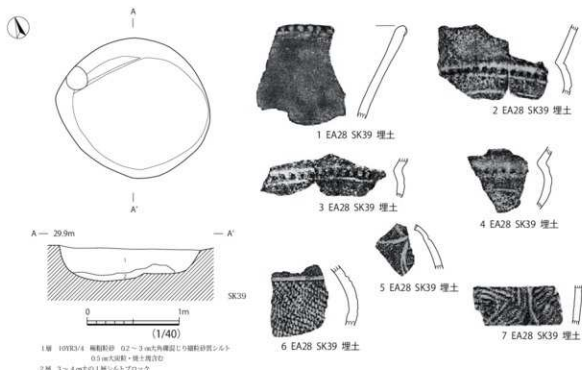
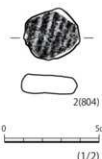
【出土遺物】縄文土器 7 (埋土一括として出土。後期中葉から後葉とみられる。)

SK40 土坑 (第 67 図・第 68 図 1～3、図版 15)

【位置】南側調査区中央西、EA28 グリッド

【規模】160 × 70 × 10cm

【出土遺物】縄文土器 3 (埋土一括として出土。第 68 図 1～3はいずれも摩滅が著しい破片である。)



第 66 図 SK39 と出土土器

SK41 土坑 (第 67 図・第 68 図 4・5、図版 15)

【位置】南側調査区中央西、WZ28・29、EA28・29 グリッド

【規模】110 × 90 × 22cm

【出土遺物】縄文土器 2 (埋土一括として出土。第 68 図 4 は中期中葉とみられる、5 は地文のみの破片である。)

SK42 土坑 (第 67 図、図版 15)

【位置】南側調査区中央、EA28 グリッド

【規模】128 × 125 × 18cm

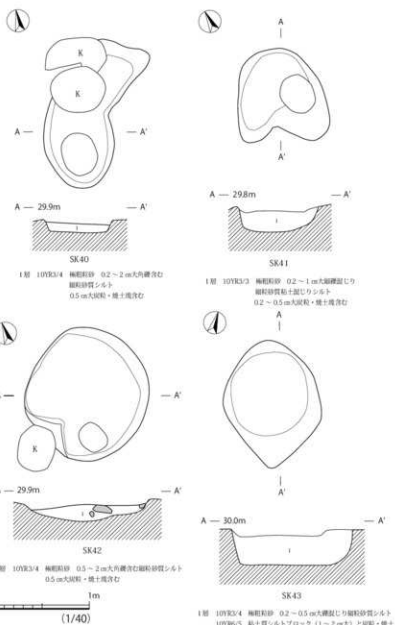
【出土遺物】縄文土器 2 (埋土一括として出土。摩滅が著しい小破片 2 点 (未掲載) のみ。)

SK43 土坑 (第 67 図、第 68 図 6 ~ 8、図版 15・35)

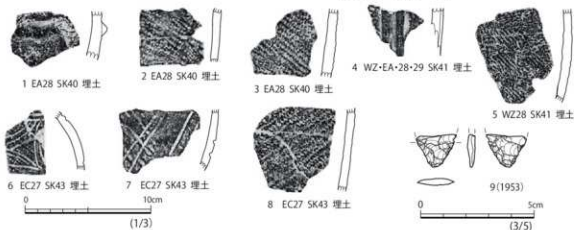
【位置】南側調査区中央東、EC27 グリッド

【規模】134 × 102 × 40cm

【出土遺物】縄文土器 3 (埋土一括として出土。第 68 図 6・7 は後期前葉とみられる。8 は地文のみの破片である。)、剥片石器片 1



第 67 図 SK40~43



第 68 図 SK40・41・43 出土土器、SK43 出土石器

SK44 土坑 (第 69 ~ 73 図、図版 15・35・36)

【位置】南側調査区北、EB26 グリッド

【規模】148 × 148 × 126cm

【出土遺物】縄文土器 14(埋土一括として出土。第 70 図 4・5 中期末葉、第 70 図 1・3・6・7・第 71 図 1・5 は後期初頭から前葉、第 71 図 4 は後期後葉とみられる。第 70 図 2・第 71 図 2 は地文のみであるが器形から後期に属すると思われる。第 70 図 1・第 71 図 5 ~ 7 は赤色顔料が付着している。)、搔器 1・両極石器 1・石匙(未成品) 1・磨製石斧 1・凹石 2(1 は石棒片再加工)・磨石 2・礫器 1

【所見】底面が開口部より広がるフラスコ状を呈する。底面付近には炭化物と焼土粒を混入するシルトが堆積する。

SK45 土坑 (第 74 ~ 76 図、図版 15・36)

【位置】南側調査区北、EA26 グリッド

【規模】206 × 210 × 120cm

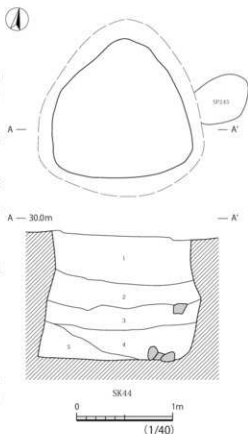
【出土遺物】縄文土器 6(埋土一括として出土。いずれも摩滅が著しい破片で明確な時期は不明である。第 75 図 1・2 は赤色顔料が付着している。)、台石 1(凹・研磨痕あり)

【所見】フラスコ状を呈する。底面付近には炭化物や焼土ブロックが混入したシルトが堆積する。

SK46 土坑 (第 77 ~ 80 図、図版 16・37)

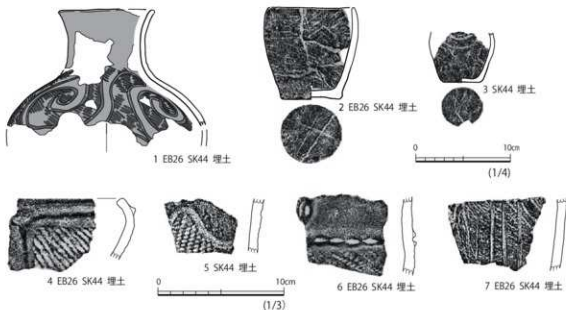
【位置】南側調査区中央、EB 28 グリッド

【規模】146 × 126 × 44cm 【重複】SK37、先後は

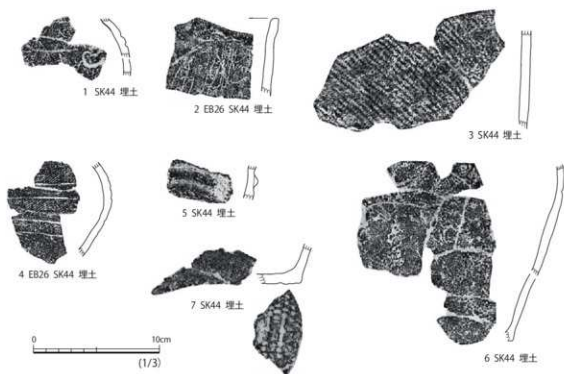


- 1 層 2.5Y4/2 細粒砂質 0.2 ~ 3.0cm 大径角礫混じり細粒砂質シルト 0.2 ~ 0.5cm 大径砂・焼土塊含む
- 2 層 10YR3/4 細粒砂質 0.2 ~ 1.0cm 大径角礫混じり細粒砂質シルト 1 ~ 3.0cm 大径角礫と 0.5cm 大径砂・焼土塊含む
- 3 層 10YR2/4 細粒砂質 0.2 ~ 0.5cm 大径角礫混じり細粒砂質粘土混じりシルト 0.5cm 大径砂・焼土塊含む
- 4 層 2.5Y3/3 細粒砂質粘土混じりシルト 0.5cm 大径砂・焼土塊含む
- 5 層 10YR3/4 細粒砂質粘土混じりシルト 0.5cm 大径砂・焼土塊含む

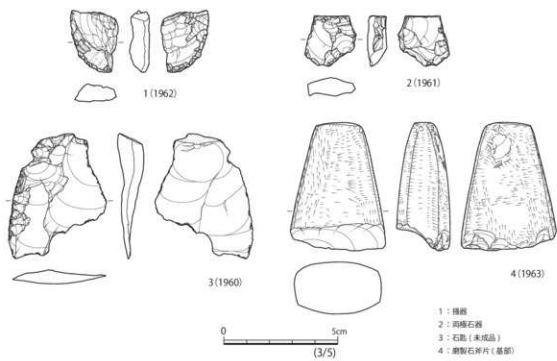
第 69 図 SK44



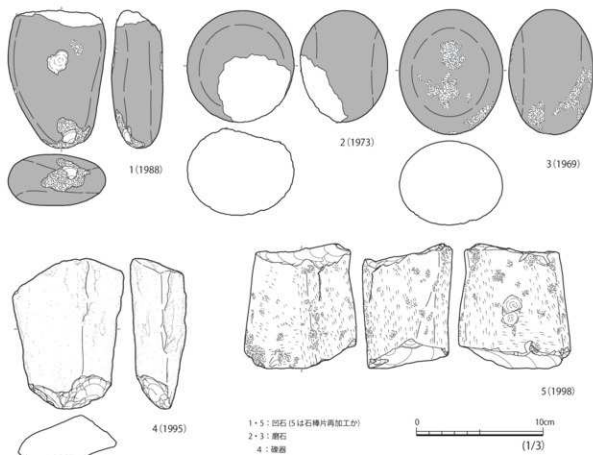
第 70 図 SK44 出土土器 (1)



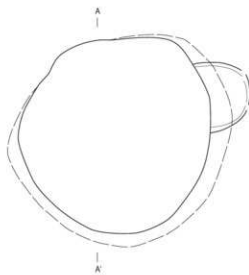
第71図 SK44 出土土器(2)



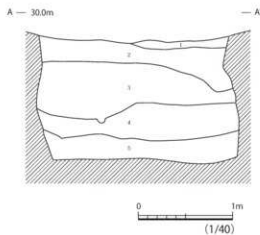
第72図 SK44 出土石器(1)



第73図 SK44 出土石器 (2)



- 1層 破砕された地石 (2～3m大シルトブロック 0.2～2m大内側)  
0.2～0.5m大炭石・焼土塊含む
- 2層 2.5/2/3 横形砂礫 0.2～1.0m横断面じり細形砂礫シルト  
1m大地山ブロックと0.5m炭石・焼土塊含む
- 3層 破砕された地石 (2～3m大シルトブロック 0.2～3m大内側)  
0.2～0.5m大炭石・焼土塊含む

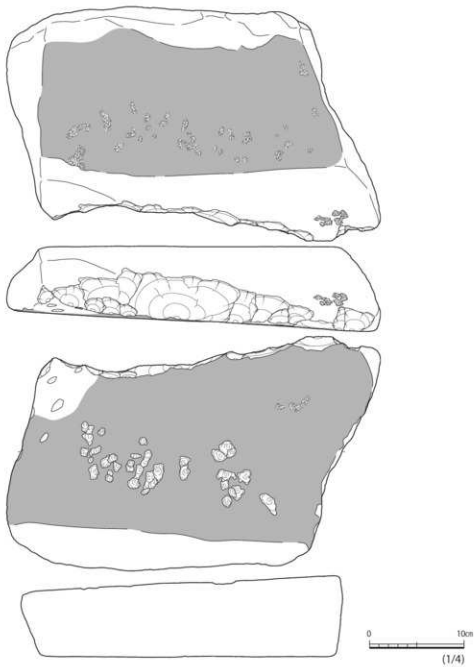


- 4層 2.5/4/6 横形砂礫 0.2～2m大断面横断面じり 細形砂礫土混じりシルト  
若干の1～2m地山ブロックと0.5m大炭石・焼土塊含む
- 5層 1/5/3/4 細形砂礫土混じりシルトブロック 0.5m大炭石・焼土塊含む

第74図 SK45



第75图 SK45出土土器



第76图 SK45出土石器

SK37→SK46 【出土遺物】縄文土器 12(埋土一括として出土。第78図2・3は後期初頭から前葉、第78図1・4～9・第79図3は後期中葉、第79図2は後期後葉とみられる。)、耳飾1、石錐1・敲石1

【所見】拳大から人頭大の礫が、底面の南東隅に集中して検出された。壁面の上部が削平されたフラスコ状土坑の可能性ある。

SK47 土坑 (第81～84図、図版16・37)

【位置】南側調査区北端、EA25 グリッド

【規模】196×172×124cm

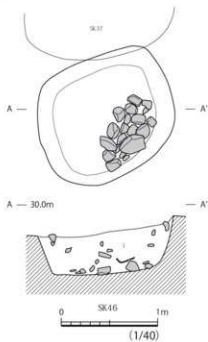
【出土遺物】縄文土器 17(第82図1～3は6～9層、4～8は3～5層、9・10は1・2層、11～14・第83図1～3は埋土一括として出土。第82図11は中期とみられ、第82図10・14・第83図1・2は粗製土器破片、3は木葉痕がある底部破片で、その他は後期初頭から前葉とみられる。第83図1～3は赤色顔料が付着している。)、礫器1・凹石1

【所見】フラスコ状を呈し、底面付近に炭粒や焼土ブロックを含むシルトが堆積する。底面中央には楕円形の窪みがある。

SK48 土坑 (第85・86図、図版16)

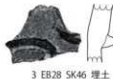
【位置】北側調査区北、EA21・22 グリッド

【規模】100×98×130cm 【出土遺物】縄文土器 17(第



1 図 2.03/3 0.3～2m大塊内埋藏しり細砂質粘土面にリリット  
2～5m大塊のブロックと0.2～0.5m大塊の焼土塊と  
縄文土器破片を含む

第77図 SK46



第78図 SK46 出土土器 (1)

86 図 1～4 は 8 層、5 は 6 層、6・7 は 1・2・4 層、8・9 は 2 層、10～17 は埋土一括として出土。

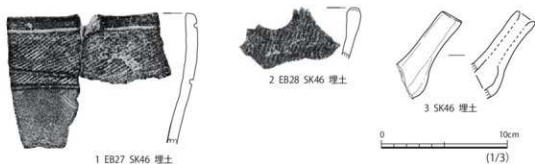
10 は中期後葉、1・5～7・11～14 は後期初頭から前葉とみられる。14 には微かに赤色顔料が付着している。17 は木葉痕のある底部破片である。）

【所見】フラスコ状を呈する。埋土上層には角礫を多く含み、下層には炭粒や焼土ブロックを多く混入する。埋土 5・6・8 層から花粉分析試料 4 点を採取した。

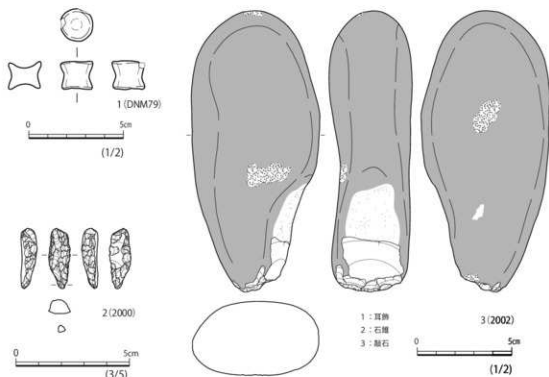
#### SK49 土坑 (第 87 図、図版 16)

【位置】南側調査区中央東、EB27・28 グリッド

【規模】144 × 124 × 56cm 【出土遺物】縄文土器 3 (埋土一括として出土。いずれも摩滅が著しい破片である。) 【所見】削平を受けた土坑底部と推定される。南端の小穴は土坑埋土を切って構築されている。小穴内からは縄文土器が検出されているが、構築時期については確定できなかった。

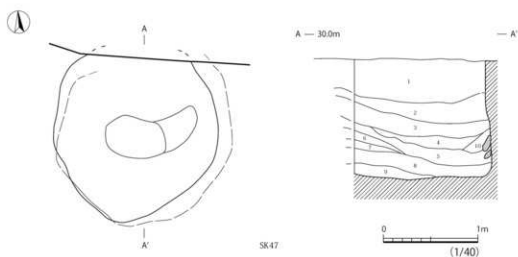


第 79 図 SK46 出土土器 (2)



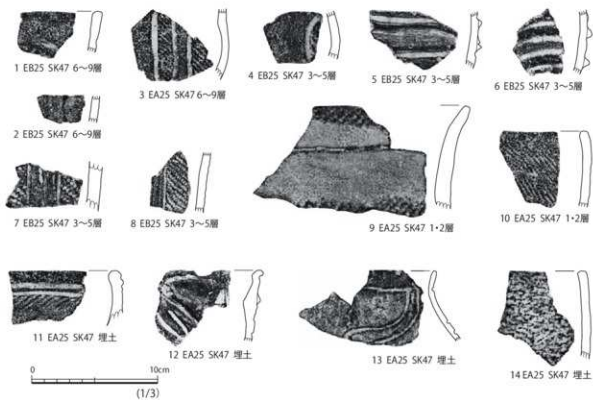
第 80 図 SK46 出土土製品・石器



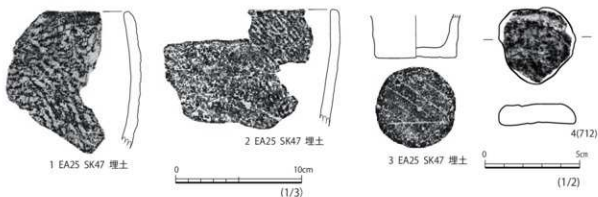


- |   |   |
|---|---|
| <p>1層 10YR4/4 極細砂 0.2～1.0m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.2～0.5m大断面・堆土残存む</p> <p>2層 10YR4/6 0.2～0.5m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.5m大断面・堆土残存む</p> <p>3層 10YR3/4 極細砂 0.2～2.0m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.2～0.5m大断面・堆土残存む</p> <p>4層 10YR3/5.2 極細砂質粘土層にリシント<br/>比較的多数の0.5～1.0m大断面 0.5m大断面残存む</p> <p>5層 10YR4/4 0.2～0.5m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.5m大断面・堆土残存む</p> | <p>6層 10YR4/4 0.2～0.5m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.2～0.5m断面・堆土残存む</p> <p>7層 鏡面された面(フリツク 12～3m大)</p> <p>8層 10YR3/4 極細砂 0.2～0.5m断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.2～0.5m大断面・堆土境 2～3m大断面土境に存む</p> <p>9層 10YR4/6 0.2～0.5m大断面掘削し細粒砂質粘土層にリシント<br/>0.2m大断面若干存む</p> <p>10層 10YR6/6 細粒砂質粘土層にリシント 5～10m大断面残存む</p> |
|---|---|

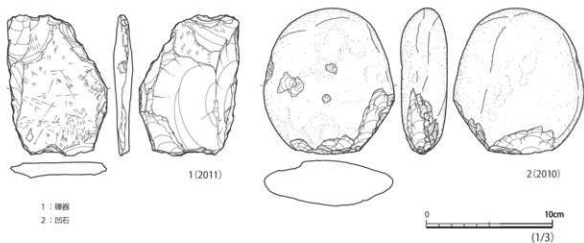
第81図 SK47



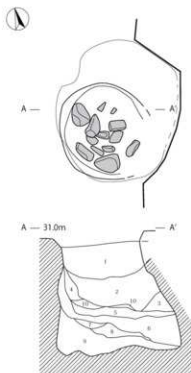
第82図 SK47出土土器(1)



第83図 SK47出土土器(2)・土器片製円盤



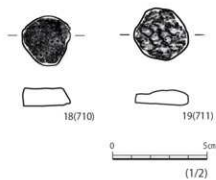
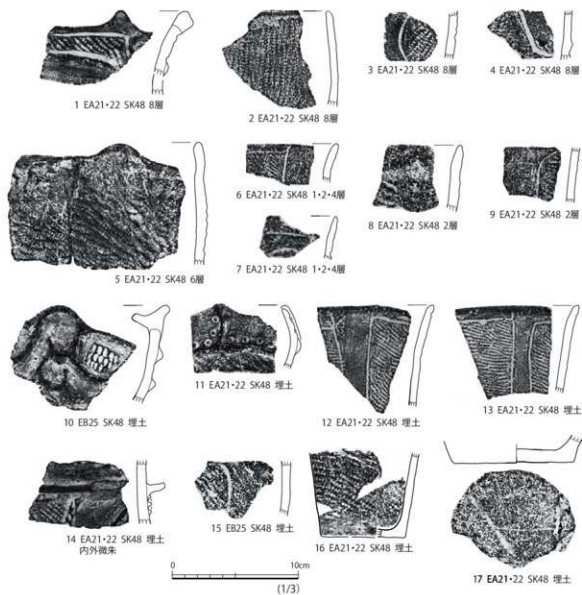
第84図 SK47出土土器



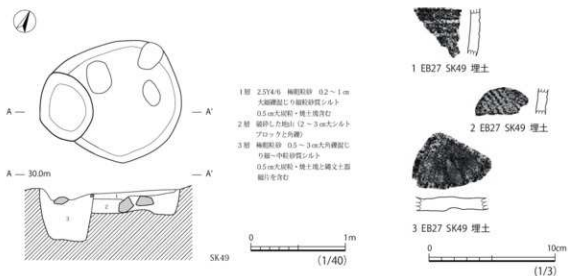
- 1層 2.5x4.3 輪郭不明 0.2～1.0mほどより20cm大断面内縁部よりシルト質細砂～粗粒砂質シルト 0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 2層 10YR4/0 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より 1～2cm厚ブロック含む 粗粒砂質粘土質シリシルト 0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 3層 10YR4/0 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より 0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 4層 10YR3/4 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より粗粒砂質粘土質シリシルト 0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 5層 10YR3/4 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より約2cm大断面内縁部より粗粒砂質粘土質シリシルト 比較的多くの0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 6層 10YR4/4 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より粗粒砂質粘土質シリシルト 比較的多くの0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 7層 1～2cm大厚ブロックの堆積
- 8層 10YR3/4 輪郭不明 0.2～0.5cm大断面内縁部より粗粒砂質粘土質シリシルト 比較的多くの0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 9層 10YR4/4 輪郭不明 シルト 0.5cm大炭粒・焼土塊含む
- 10層 10YR4/4 輪郭不明 0.2～2cm大断面内縁部より粗粒砂質粘土質シリシルト 0.5cm大炭粒・焼土塊含む

0 1m  
(1/40)

SK48  
第85図 SK48



第 86 図 SK48 出土土器・土器片製円盤



第 87 図 SK49 と出土土器

### 配石

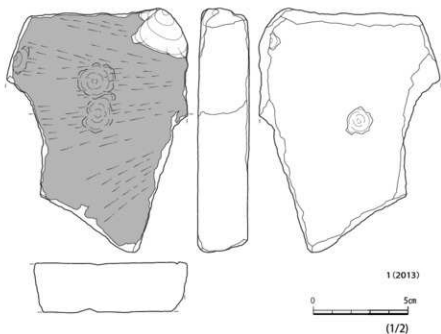
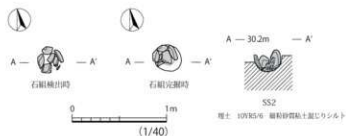
#### SS2 配石 (第 88 図、図版 16・37)

【位置】北側調査区中央付近、EA22 グ

リッド 【規模】30 × 30 × 20cm

【出土遺物】凹石 1 【所見】浅い掘り込みに 20cm 前後の礫を配置している。

S18 に付属した遺構の可能性もある。



第 88 図 SS2 と出土石器

#### 4 遺構外の出土遺物

##### 縄文土器

遺構外の遺物包含層から出土した縄文土器をまとめた。概ね遺構検出以前の1・2層に相当するものと思われるが、明確な出土層位は不明である。また、検出はしたものの遺構とは確定できなかった、多数の小穴から出土した遺物も含まれている。

##### 縄文時代中期の土器 (第89図1～12)

1は渦巻状隆線、2～5は縦位に隆線と沈線が垂下する胴部破片である。縄文時代中期中葉から後葉とみられる。

6は沈線区画内に刺突を、7は楕円状の沈線区画内に縄文が残る口縁部破片である。8・9は隆線で緩い渦巻き状が描かれる胴部破片である。縄文時代中期後葉とみられる。

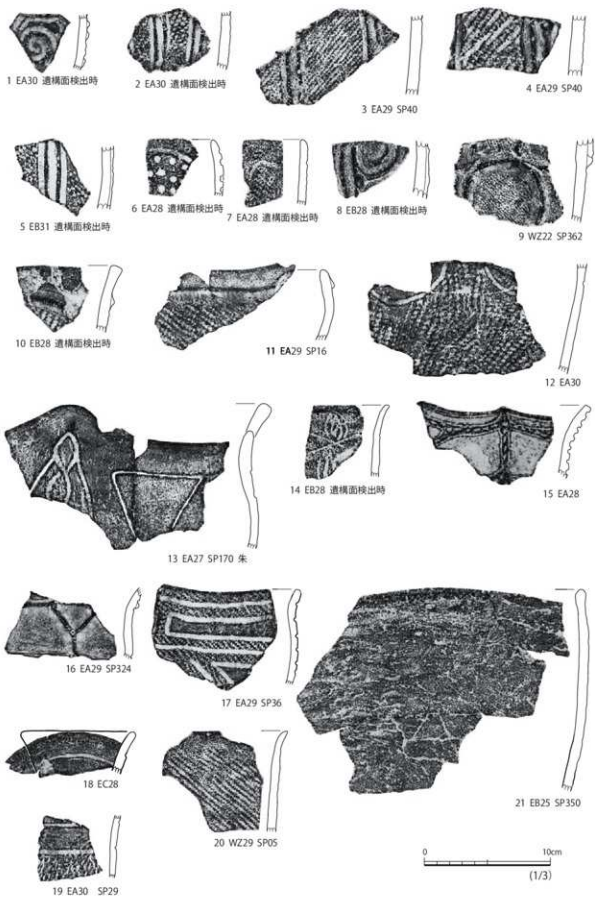
10は隆沈線区画内に縄文が残り、11は緩やかな波状で折返し状となる口縁部破片である。12は胴部文様下位の破片で区画沈線が横位に展開するとみられる。縄文時代中期末葉とみられる。

##### 縄文時代後期の土器 (第89図13～21・第90図、図版38)

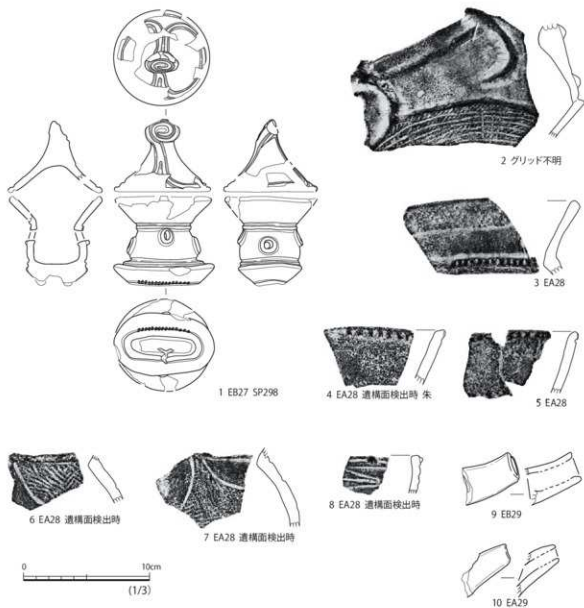
第89図13は波頂部から垂下する鎖状沈線と倒卵形の文様を持つ口縁部破片で、器面に赤色顔料が微かに付着している。14は単位となる弧状モチーフの下位に弧状文が垂下する口縁部破片である。15は波状口縁、16は口縁下の破片で、無文の口縁帯に刺突・縄文を施した隆線で縦・横・斜位に貼付けをし、分岐点に円形刺突がされる。17は方形・曲線状の平行沈線区画内に縄文が残る口縁部破片である。18は頸部の帯状区画内に縄文が残る壺の口縁部破片、19は帯状区画内が磨消される深鉢胴部破片である。縄文時代後期初頭から前葉とみられる。20・21は粗製土器で、20は口縁が外反する器形、21は無文で緩やかに内傾する器形である。

第90図1は中空の突起部分で、上部は三角錐状となり輪積部分で割れた状態で、頂部は渦巻き状の沈線が描かれ握み状になっている。突起の胴部部分は透かし状に貫通孔が4ヶ所施される。2は器形は胴部が大きく開き口縁に向けて「く」字に内傾する器形の深鉢破片である。波頂部が欠損しているが、単位部分に「ノ」字状の貼付けがされる。胴部には地文施文後に多重平行沈線が巡る。3～5は頸部から口縁が外傾する器形の深鉢で、3は口縁に縄文帯、頸部に刺突のある貼付けが、4・5は口縁に沿って刻み列が巡り、4の器面には、赤色顔料が微かに付着している。6・7は木葉状区画とランダムな羽状の地文が施される胴部破片である。8は口縁に瘤状貼付けがされ横・斜位に沈線が描かれる。縄文時代後期中葉から後葉とみられる。

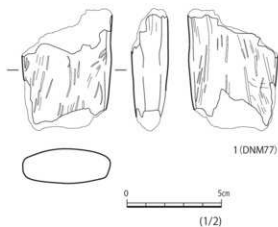
9・10は注口土器の注口部分である。



第 89 図 遺構外出土土器 (1)



第90図 遺構外出土器(2)



第91図 遺構外出土製品

土製品

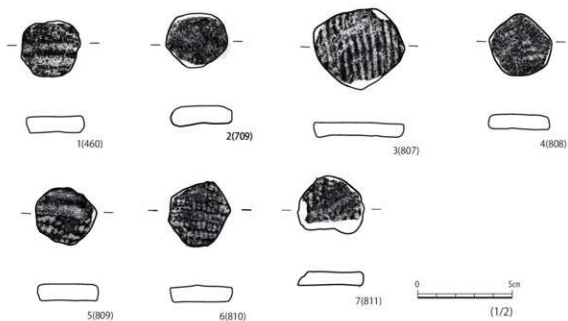
斧状土製品 (第91図、図版38)

表裏面に擦痕がみられる。断面形状及び全形から斧状土製品の破片と推定される。

土器片製円盤 (第 92 図)

遺構外から出土した土器片製円盤は 11 点を数える。半壊品を除く 7 点を図示した。

縄文土器の破片の周縁を円形に整形する。錘として利用したような明確な組くりの痕跡などは観察されなかった。



第 92 図 遺構外出土土器片製円盤



## 石器

### 石鏃 (第93図1～9、図版38)

有茎と無茎に分けられる。有茎の1～3は、身部の長さが基部より長い。無茎の4～8は、基部の挟入がみられる。9は未成品あるいは半壊品である。

### 石匙 (第93図10、図版38)

おそらく縦型石匙の基部の破片である。

### 挿器 (第93図11～14、図版38)

11は、逆三角形の平面形で両側縁を刃部とする。表面に集中して調整が施され、裏面は平坦である。

12～14は、台形の平面形の小形挿器で、上端部を除いた側縁を刃部とする。

### 凹石 (第94図1・2、図版38)

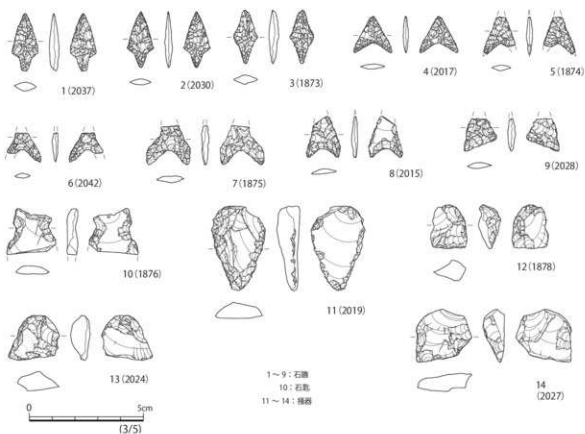
1は三角形の平面形で表裏面と側面に凹がみられる。全面に研磨痕が認められる。2は三角柱状の形態で二側面に凹がみられる。

### 磨石 (第94図3、図版38)

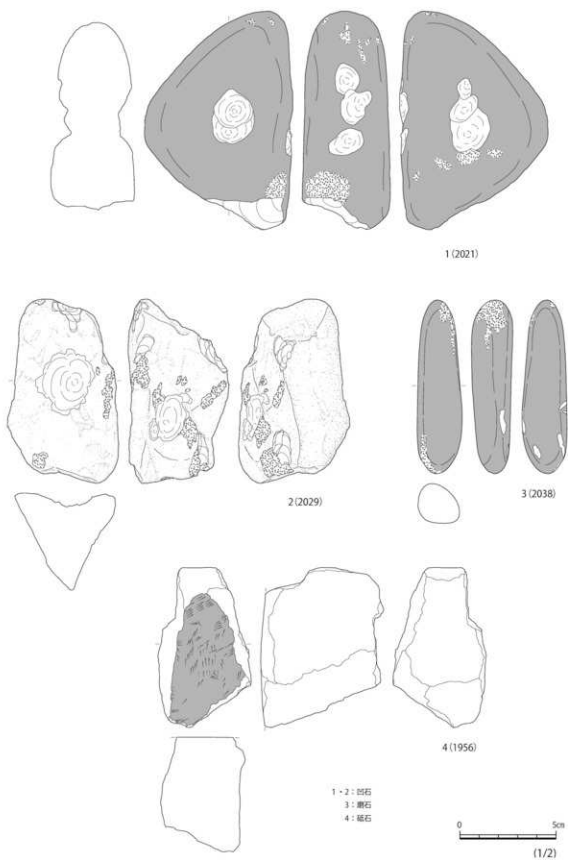
全面に研磨痕が認められ磨石としたが、上下端部には敲打痕も見られる。

### 砥石 (第94図4、図版38)

平滑な研磨面が認められ、砥石の破片である。



第93図 遺構外出土石器(1)



第94図 遺構外出土石器(2)

礫器 (第95図1、図版38)

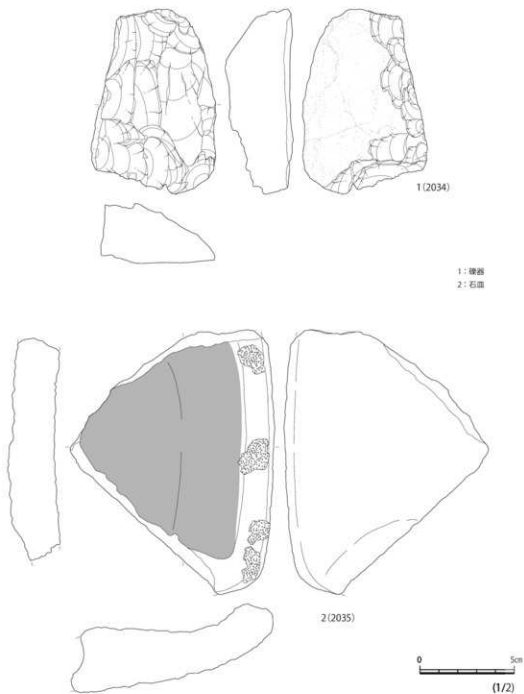
表・裏面の片側側縁部に粗い調整を加えて利器としている。

石皿 (第95図2、図版38)

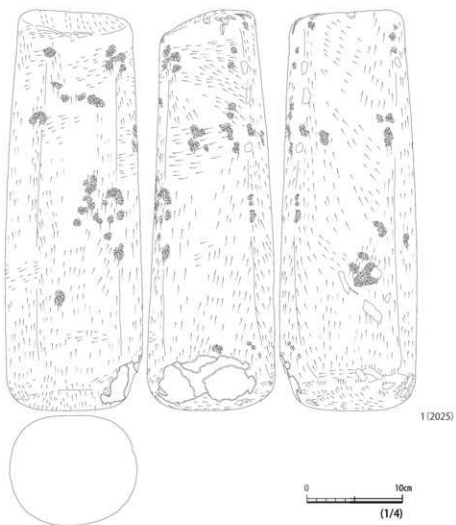
第95図2は幅広い縁を持ち、角のある方形の石皿片である。

石棒 (第96図2、図版39)

断面が隅丸方形の大形石棒である。角柱状の石材を研磨加工したと推定されることから、節理状露頭からの転石などを素材として利用したと思われる。



第95図 遺構外出土石器(3)



第 96 図 遺構外出土石器 (4)

## 第4節 7区の調査

### 1 調査の経過と方法

平成25年5月、堂の前貝塚の遺跡範囲である陸前高田市米崎町字堂の前133番地1において個人専用住宅建築が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、平成25年6月13日から調査に着手した。

調査は、対象区域内の表土を遺構確認面まで重機によって除去し、その後、人力によって精査し遺構検出を行った。調査区に配したグリッドは、平成24年度に1～3調査区で採用した区画に準じた。

検出した遺構は、『発掘調査のたび』に掲載された遺構略号に準拠して名称と番号を付した。遺構実測は、グリッドラインを基準に遺り方測量を行い縮尺は20分の1と10分の1を基本とした。記録写真は35mmネガフィルムでモノクロームとカラーの2種を撮影し、補助的にデジタルカメラも使用した。出土遺物は、グリッド・遺構・層位ごとに採取した。調査は、平成25年10月30日に終了した。

### 2 遺構の概要と基本的層序(第97・98図、図版17)

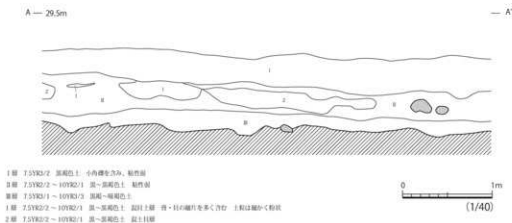
調査区は、北に向かって緩やかに傾斜した斜面である。

検出された遺構は、中央に近接して竪穴建物跡3棟、東端に1棟(大半は調査区外)、土坑2基、遺物集積1基、焼土跡1基、貝層1ヶ所であった。貝層は、調査区南東隅で検出され、調査区外に広がるようである。

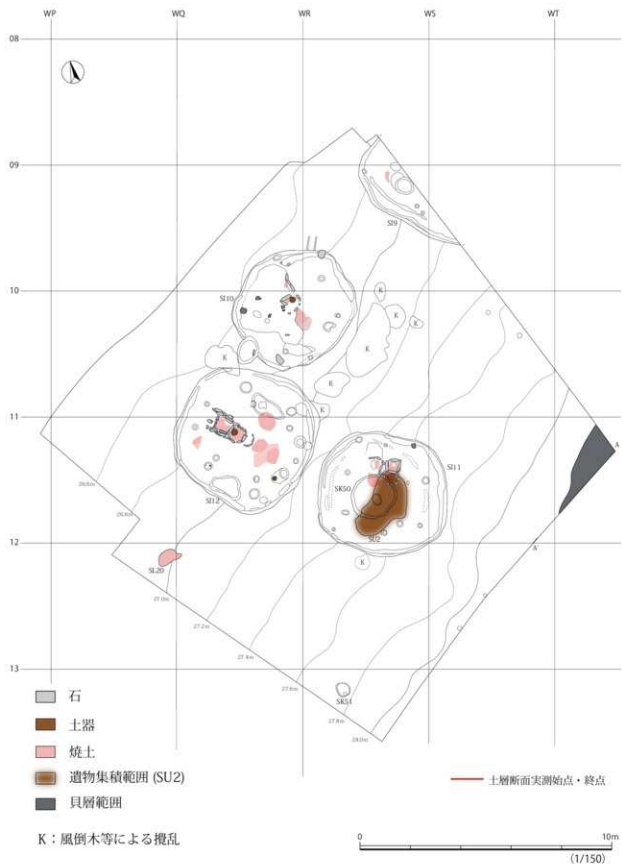
調査区の中央より北付近は、竪穴建物内外に風倒木と推定される土壌攪乱を広範囲に受けている。

調査区内の基本的層序は、I層は果樹畑耕作土、II・III層は縄文時代遺物包含層であるが、後世の攪乱により調査区内での分布はプライマリーではない。

遺構は風倒木による土壌攪乱以外に、果樹畑の灌漑を目的とした配管工事によって破壊・攪乱を受けている。



第97図 7区南東壁土層断面



第98図 7区遺構分布

### 3 遺構と出土遺物

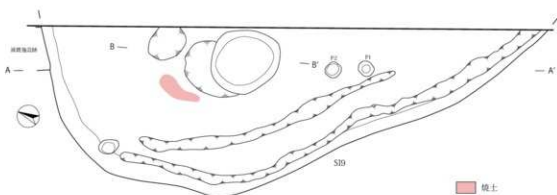
#### 竪穴建物跡

SI9 竪穴建物跡 (第 99～101 図、図版 18・40)

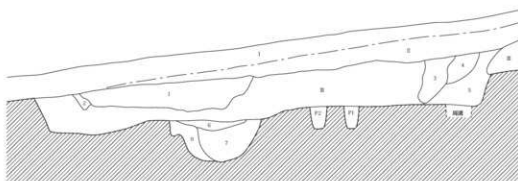
【位置】調査区北西隅、WR 8・9、WS 9 グリッド 【規模】537 × 188 × 48cm

【出土遺物】縄文土器 21 (第 100 図 1～3 は床落ち込み上部、4～16 はⅢ層、17～21 は埋土一括として出土。2～6・13～15・19～21 は中期末葉から後期初頭、7～9・16～18 は後期前葉から中葉とみられる。1 は調整圧痕が残る無文鉢の口縁部破片、10～12 は粗製深鉢の口縁部破片である。)、石匙 1・磨製石斧 1

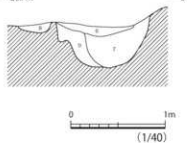
【所見】楕円あるいは隅丸方形の平面形を呈すると推定される。一部、配管工事による攪乱を受けているが、床面には柱穴と周溝を検出・調査した。床面の一部に焼土粒の分布が確認されたが、堆積は薄く、今は調査区外にあると推定される。周溝の一部は二重となり、拡張、建替えが行われた可能性がある。



A — 27.8m

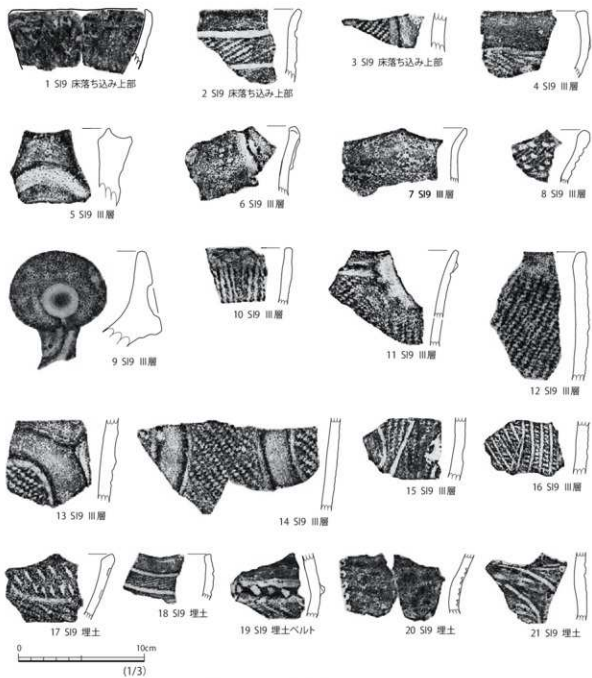


B — 26.7m

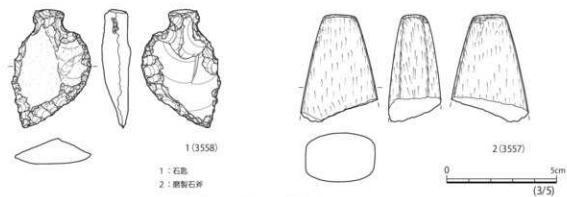


- 1層 10YR3/2 黒褐色土 小内溝底土
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 1層から漸移する
- 3層 10YR4/4 褐色土 炭化礫石を多数に含む
- 4層 褐色 草履形縁部破片
- 5層 10YR3/4 黒褐色土 草履形縁部破片
- 6層 10YR4/1 黒褐色土
- 7層 10YR4/6 褐色土
- 8層 10YR3/4～2/3 に近い褐色土
- 9層 10YR4/1 黒褐色土 炭質粒、しまり層
- 10層 10YR4/2 灰青褐色土 しまり層 中位くらいまで傾斜底土
- 11層 10YR3/3 安褐色土 焼土混入
- 12層 10YR4/4 褐色土
- P1 10YR2/1 赤褐色土
- P2 10YR2/2 赤褐色土 地中の小ブロック混入

第 99 図 SI9



第 100 図 SI9 出土土器



第 101 図 SI9 出土石器

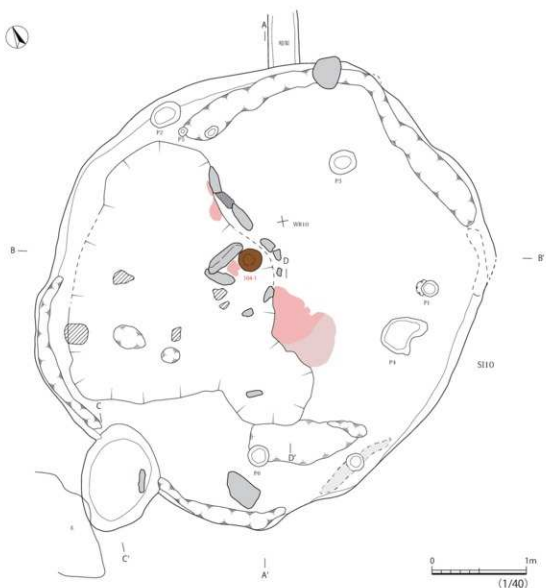


SI10 竪穴建物跡 (第 102～108 図、図版 19～20・図版 40・41)

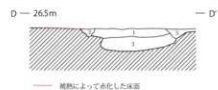
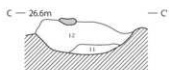
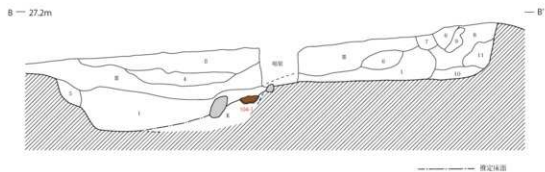
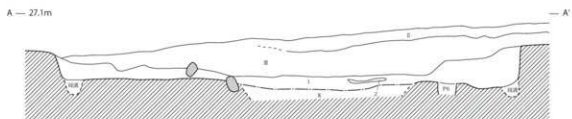
【位置】調査区中央から北、WQ9・10、WR9・10 グリッド 【規模】480 × 444 × 61cm

【出土遺物】縄文土器 46 (第 104 図 2・4・9～18・第 105 図 2・9～13 は中期末葉、第 104 図 5・6・第 105 図 3～5・15～19 は後期初頭から前葉、第 105 図 6～8・第 106 図 8・9 は後期中葉とみられる。第 106 図 1 には僅かに赤色顔料が付着している。)、磨製石斧 4・磨石 2・凹石 2・石皿 1・石器 2

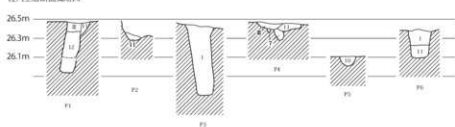
【所見】おおよそ五角形の平面形を呈する。周溝は、北・南壁沿いに見られる。竈を含む北西側 4 分の 1 は住居廃絶後、短期間のうちに破壊されている。竈は石囲いで内部に埋設土器が検出された。土器内には炭化物が遺存しており、放射性炭素年代測定試料を採取し、4,030 ± 30 (yrBP δ 13C 補正值) の測定結果であった。



第 102 図 SI10



柱穴土層断面概略図



12層 10YR2/1 黒色土、しまり石、粘状質

11層 10YR3/2 黒褐色土、粘状質

10層 10YR4/3 濃い黄褐色土

9層 10YR5/6 黄褐色土

8層 10YR4/4 褐色土

7層 10YR2/1 褐色土、炭屑を含む

6層 10YR4/4 褐色土、黒炭に粘土ブロックを含む

5層 10YR4/2 灰黄褐色土、多大の礫を含む

4層 10YR3/1 黒褐色土

3層 10YR3/1 黒褐色土、粘状質、しまり石

2層 10YR5/6 黄褐色土

1層 10YR3/2 黒褐色土、粘状質、しまり石

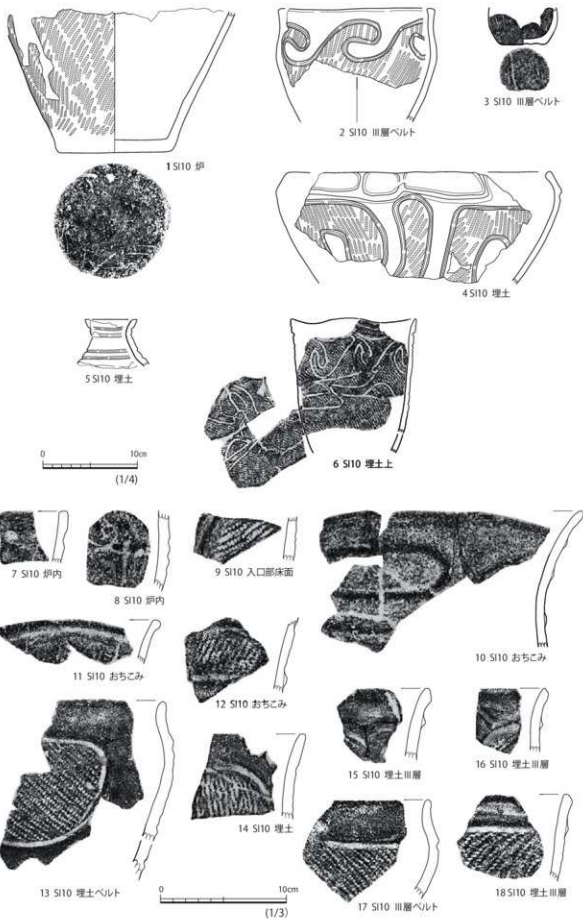
0層 10YR4/6 褐色土、しまり石

12層 10YR4/4-5/8 褐色-黄褐色土

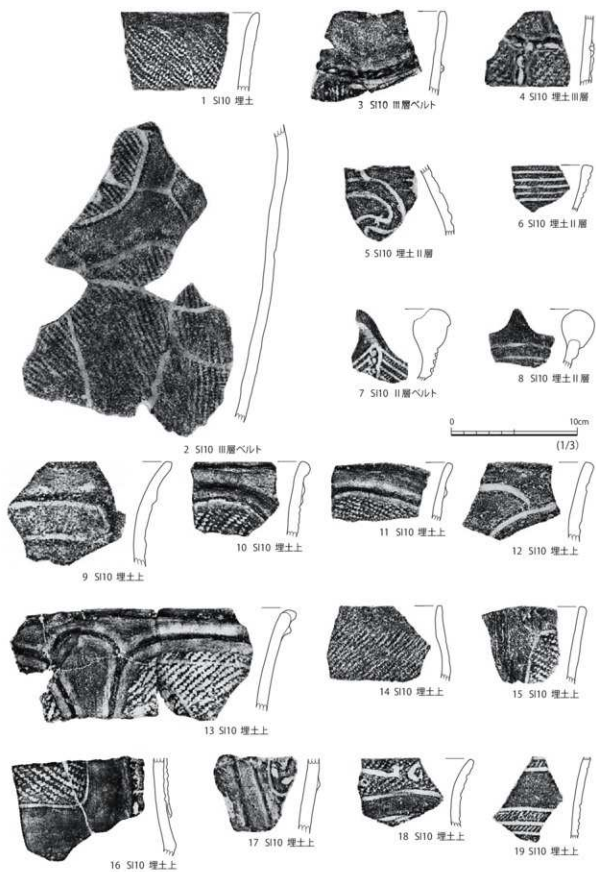
K 埋戻し



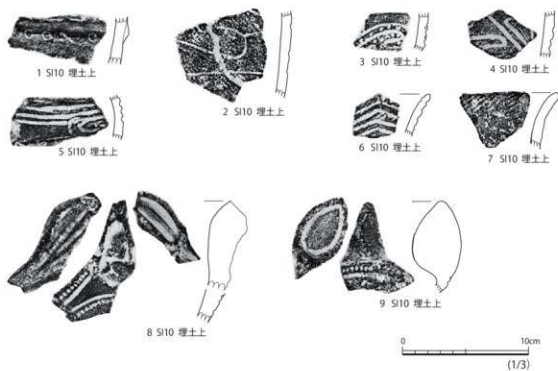
第103図 S10土層断面



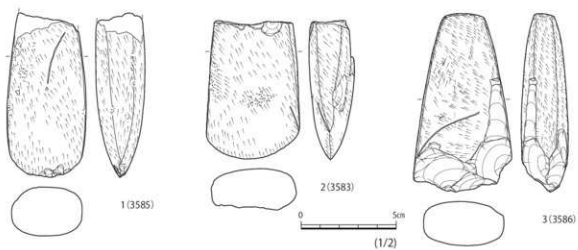
第104図 Si10出土土器(1)



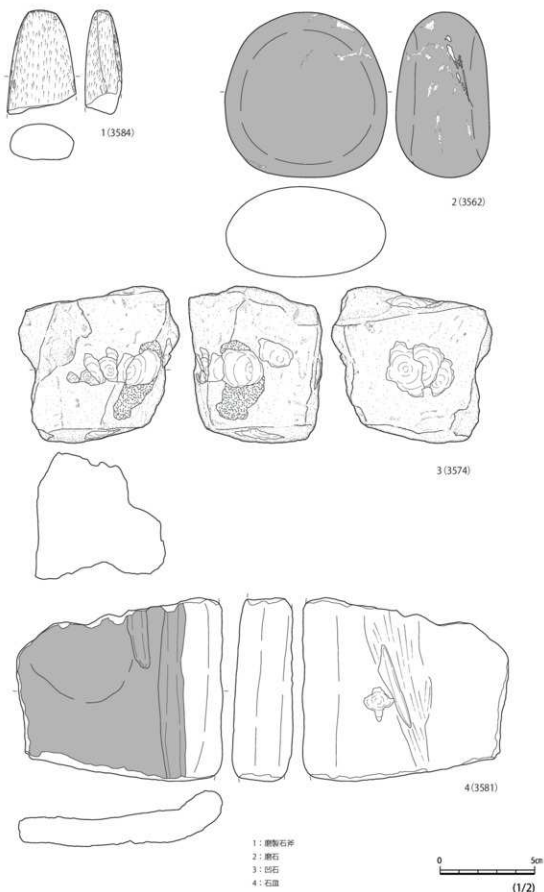
第105図 S110出土土器(2)



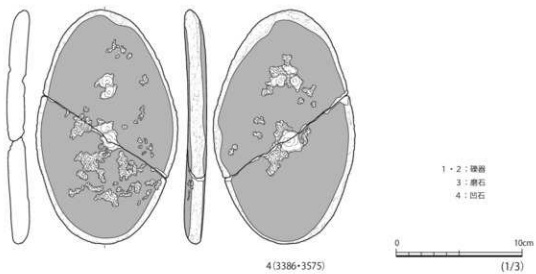
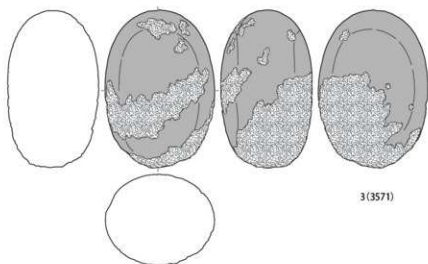
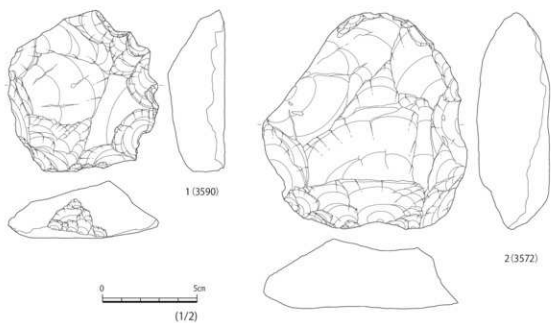
第 106 図 SI10 出土石器 (3)



第 107 図 SI10 出土石器 (1)



第 108 图 SI10 出土石器 (2)



第109图 S110出土石器(3)

SI11 竪穴建物跡 (第 108 ~ 120 図、図版 21・22・図版 42 ~ 46)

【位置】調査区中央から南東、WR11・12、WS11 グリッド 【規模】513 × 492 × 68 cm

【重複】SK49、SU 2 先後関係 SK49 → SI11 → SU 2 【出土遺物】縄文土器 41 (SI11 と SU2 等との接合が多くみられ、SI11 の土器について後述のとおり取扱った。埋土ベルトと注記のある土器は、第 111 図の 3 層以下の埋土と解釈した。SI11 の II -3 層と注記のある土器は、SU2 直下の II -3 層と推測されるが、住居外から分層されている部分もある。

それをふまえ、① SI11 埋土、② SI11 II - 3 層及び II -3 層と接合した SI11 埋土、③ II -3 層・SU2 及びその上位層と接合した SI11 埋土の順で掲載した。第 118 図 1 ~ 12 は中期中葉から後葉、第 114 図 3・第 118 図 13 は中期末葉、第 112 図・第 113 図 1・第 114 図 1・2・第 115 図 ~ 第 117 図・第 118 図 14 ~ 24・第 119 図は後期初頭から前葉とみられる。第 112 図 1 の A の埋設土器の内面胴下から底部は煤等が吸着した様相である。第 112 図 6 の壺胴下部には内外面に、第 118 図 16・17



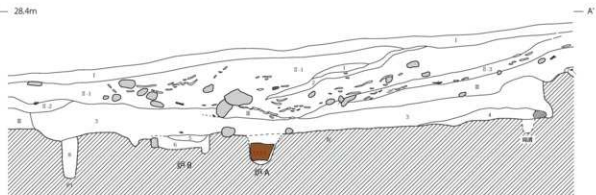
第 110 図 SI11



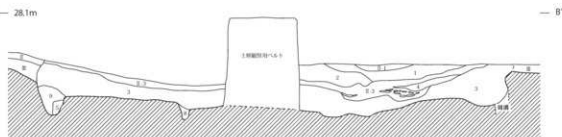
の同一個体とみられる壺胴部破片には器面に赤色顔料が付着している。第118図21の深鉢口縁部破片の断面には黒色タール状のものが付着している。)、耳飾1、土器片製円盤1、骨針片1、石匙1・軽石製品2

【所見】平面形は円形。床面は平らで、壁直下には周溝が北・西辺の一部を除き全周する。柱穴は9か所検出された。A・B、2つの複式炉が検出された。炉Aは長軸を南北方向に向け北側を前底部とし、8字状の石組みによって火床を囲む。北側の炉石は4点の長大な礫で方形に組まれ、南側は中央に土器を埋設した火床を小形礫9点で囲む。南側の炉石と北側北辺の炉石は、劣化し砂状の痕跡として検出した。北側の火床の中央には、焼土堆積が認められない埋設土器を抜いたような円形の範囲がある。

A — 28.4m

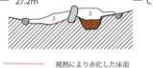


B — 28.1m



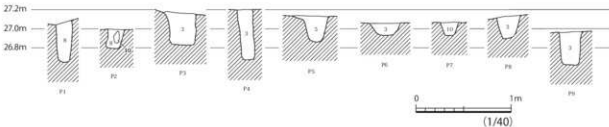
炉A

C — 27.2m

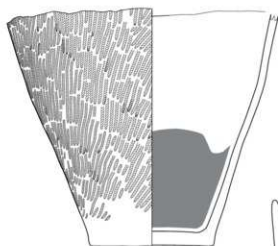


- |      |          |       |                    |     |          |        |             |
|------|----------|-------|--------------------|-----|----------|--------|-------------|
| 1層   | 7.5YR3/2 | 赤褐色土  | 黄土                 | 3層  | 7.5YR4/3 | 褐色土    | 粘状層         |
| 2-1層 | 7.5YR2/2 | 赤褐色土  | 粘状層                | 4層  | 7.5YR4/3 | 褐色土    | 砂質          |
| 2-2層 | 10YR4/2  | 灰黄褐色土 | 地山(ブロック層、粘状層)      | 5層  | 10YR5/4  | 灰色黄褐色土 | 地山(ブロック)    |
| 2-3層 | 10YR3/1  | 赤褐色土  | 地山(砂・礫を含む(1%))、粘状層 | 6層  | 7.5YR3/3 | 暗褐色土   | 粘状層         |
| 3層   | 7.5YR3/2 | 赤褐色土  | 上部に地山(礫層)、小礫も多く含む  | 7層  | 10YR3/3  | 暗褐色土   | 地山(砂や礫層を含む) |
| 1層   | 7.5YR2/1 | 赤土    | 粘状、しまり層            | 8層  | 10YR4/4  | 褐色土    | 粘状層         |
| 2層   | 7.5YR3/2 | 赤褐色土  | 焼土礫、地山(砂を含む)       | 9層  | 2.5Y3/2  | 暗赤褐色土  | 粘状層、しまり層    |
|      |          |       |                    | 10層 | 10YR4/3  | 灰色黄褐色土 | しまり層        |

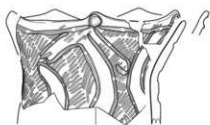
柱穴土層断面概略図



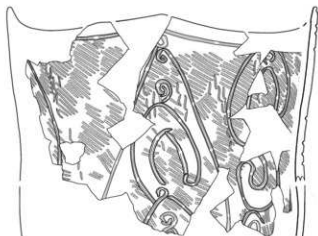
第111図 S111土層断面



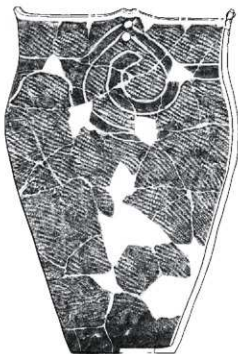
1 S11 卍A



2 S111 埋土ベルト



3 S111 埋土ベルト



4 S111 埋土ベルト(13-12)



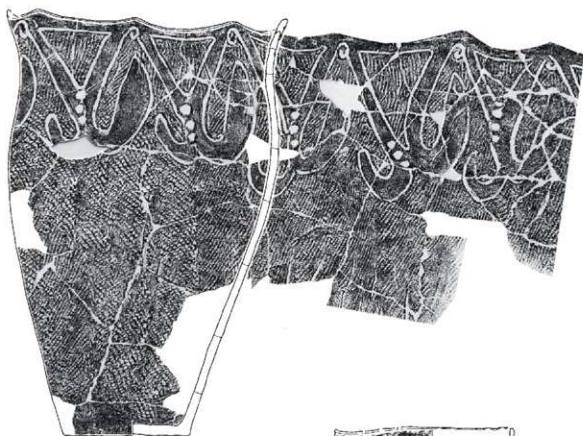
5 S111 埋土ベルト



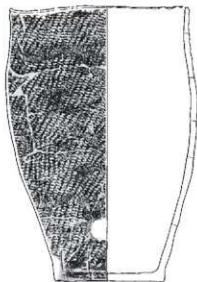
6 S111 埋土ベルト



第112図 S111出土土器(1)



1 S11 埋土ベルト(13-9)



2 S11 埋土ベルト(13-18)



第 113 図 S11 出土土器(2)



1 S111 埋土・II-3・II層ベルト(13-103)



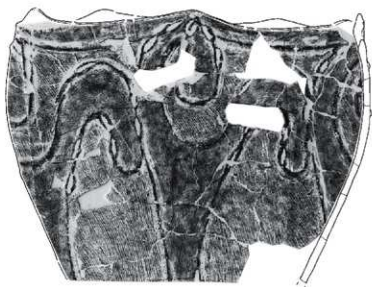
2 S111 埋土・II-3層ベルト



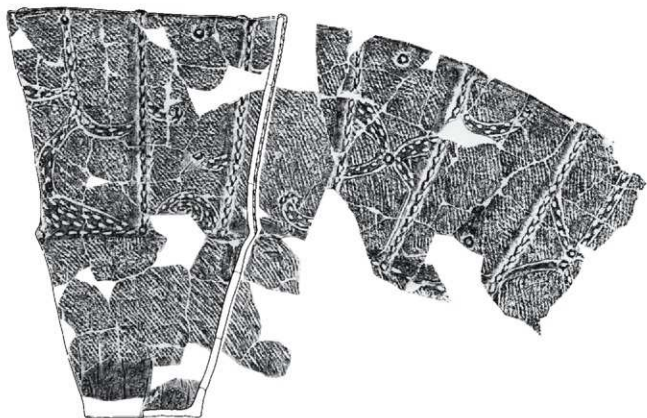
3 S111 埋土・II層2回目ベルト、SU02ベルト、  
WR11 II-1層、WR12-b II・II-2層(13-3)



第114図 S111出土土器(3)



1 S111 埋土ベルト、SU02 II層ベルト3回目・底面・底面ベルト2回目、WR10-a II層(13-107)



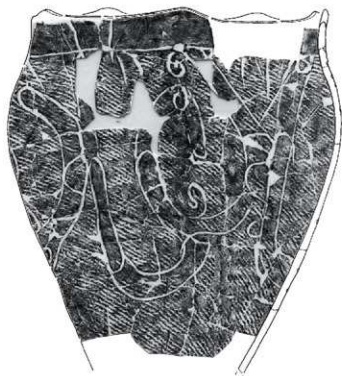
2 S111 埋土・II-3層、WS12 II・III層ベルト(13-55)



第115図 S111出土土器(4)

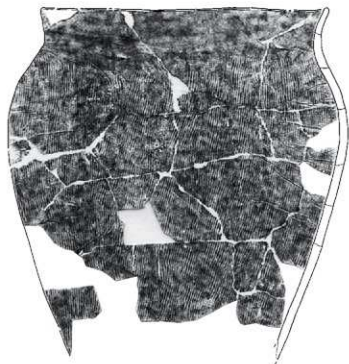


1 S11 埋土・II-3層ベルト, SU2 II層2・3回目・底面ベルト,  
WR11 II-2層, WR11-d II-1層(13-15)



2 S11 埋土ベルト, SU2 埋土・床面ベルト・II層ベルト2・3回目(13-114)  
第116図 S111出土土器(5)





1 SI11 埋土・II-3層ベルト, SU2 底面・II層ベルト2・3回目, WR11 II・II-3層(13-117)



2 SI11 埋土ベルト, SU2 II層ベルト2回目, WR11-b II・II-1層(13-96)

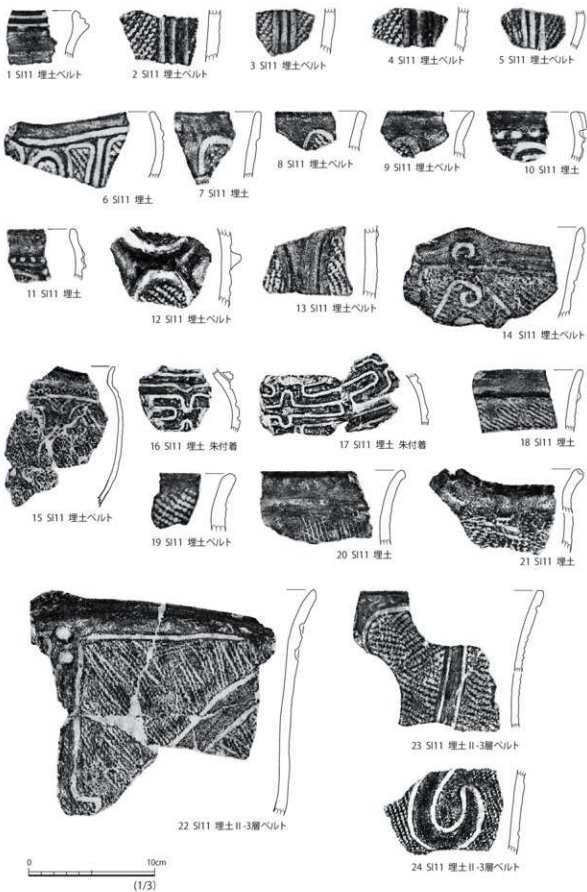


3 SI11 埋土ベルト, SU2 II層ベルト1回目(13-50)



第117図 SI11出土土器(6)





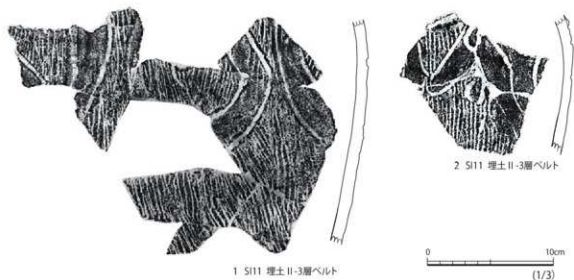
第118図 S111出土土器(7)



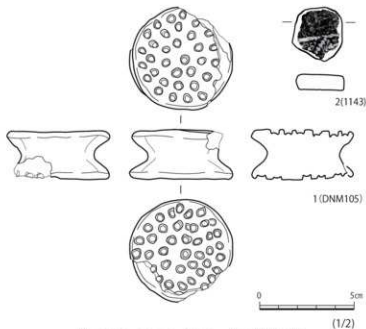
炉Aの西に隣接して、石囲いの痕跡と2か所の焼土を検出し、炉Bが設置されていた。炉Bは地山ブロックで埋められており、床面に残る周溝状の痕跡に対応した古い竪穴建物跡に付属していた可能性がある。

さらに、床面の中央にはSK49土坑が検出された。土坑は、竪穴建物に付属する炉A・Bを破壊することなく築かれ、埋土は地山ブロックを多く含み、建物構築時に人為的に埋め戻されたものと推定される。

竪穴建物の埋土中には、多数の土器片が建物中央付近に集中して出土した。建物廃絶後の埋没過程において、SU2を形成した人為的遺物投棄が行われたものと推定される。



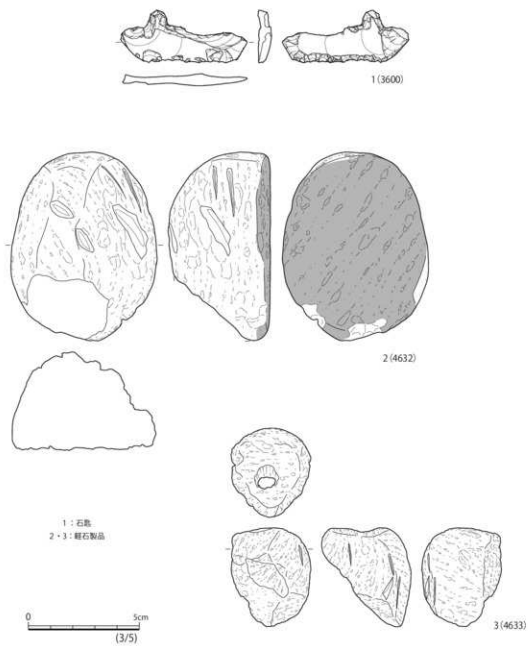
第119図 SI11出土土器(8)



第120図 SI11出土耳飾・土器片製円盤



第121図 SI11出土骨角器



第 122 図 S111 出土石器

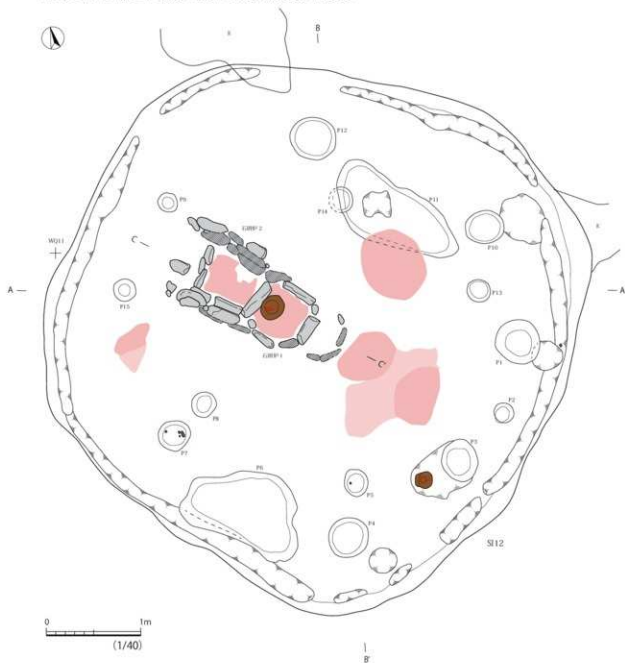
SI12 竪穴建物跡 (第 121～125 図、図版 25・26・図版 46・47)

【位置】調査区中央、WP 11、WQ10・11、WR 10・11 グリッド 【規模】561×530×76cm

【出土遺物】縄文土器 68(第 126 図 7～11 は中期中葉から後葉、第 125 図 1・3・4・第 126 図 1・12～14・第 127 図 1～6 は中期末葉、第 125 図 6～9・第 127 図 8～15・第 128 図は後期初頭から前葉とみられる。第 125 図 6 は器面に赤色顔料が付着する。) 磨石 1

【所見】平面形は円形に近い隅丸方形。床面は平らで、長軸方向を北西に向け西側を前庭部とする埋設土器を伴う複式炉を備える。火床を囲む 8 字の石組の東側には、空間をあけ半円状の石組みが見られる。床面にはがいを囲むように 3 か所、焼土の堆積が認められた。

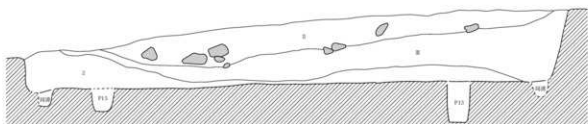
柱穴は、が前庭部の東西に検出された小穴を含め 15 か所を数える。周溝は、壁直下にほぼ全周する。埋土の上層には多量の礫が含まれ、人為的投棄が伺える。



第 123 図 SI12

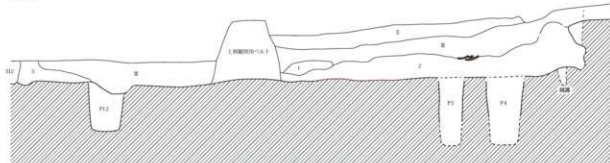
A — 27.3m

— A'



B — 27.3m

— B'

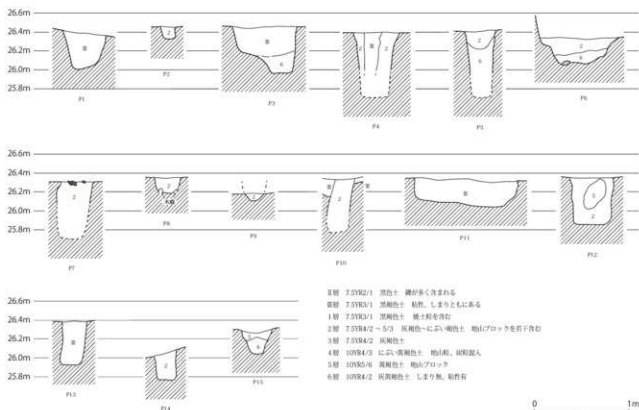


C — 26.5m

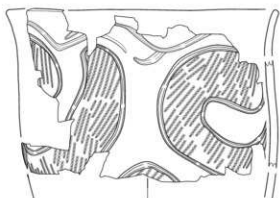
— C'



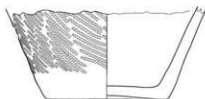
柱穴土層断面概略図



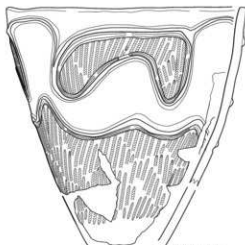
第 124 図 Si12 土層断面



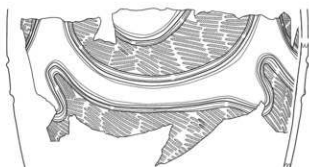
1 S112 石囲炉1



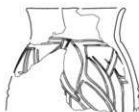
2 S112 床面南側  
おちこみ1



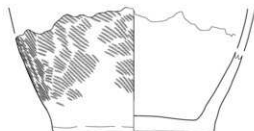
3 S112 埋土III層



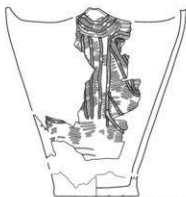
4 S112 埋土



6 S112 埋土



5 S112 埋土



7 S112 II層ベルト

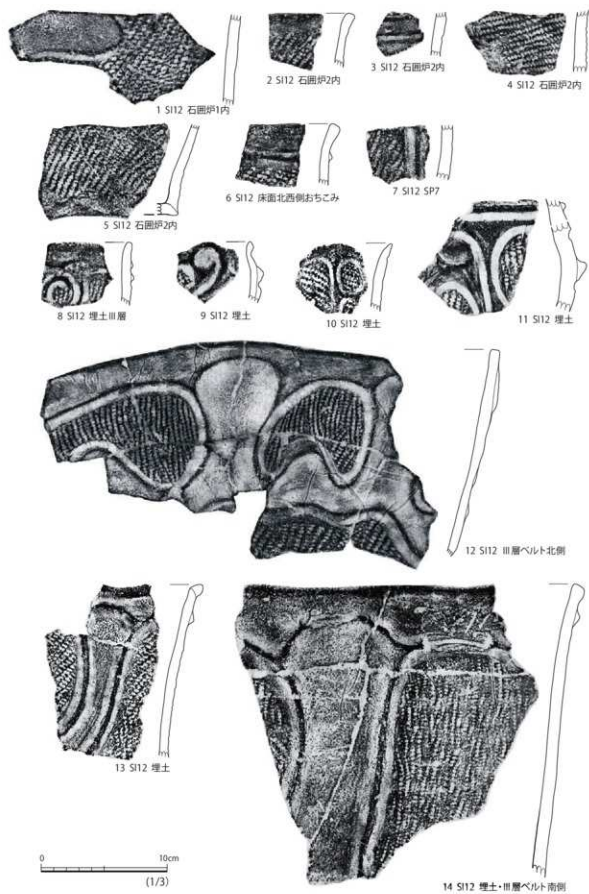


8 S112 II層ベルト

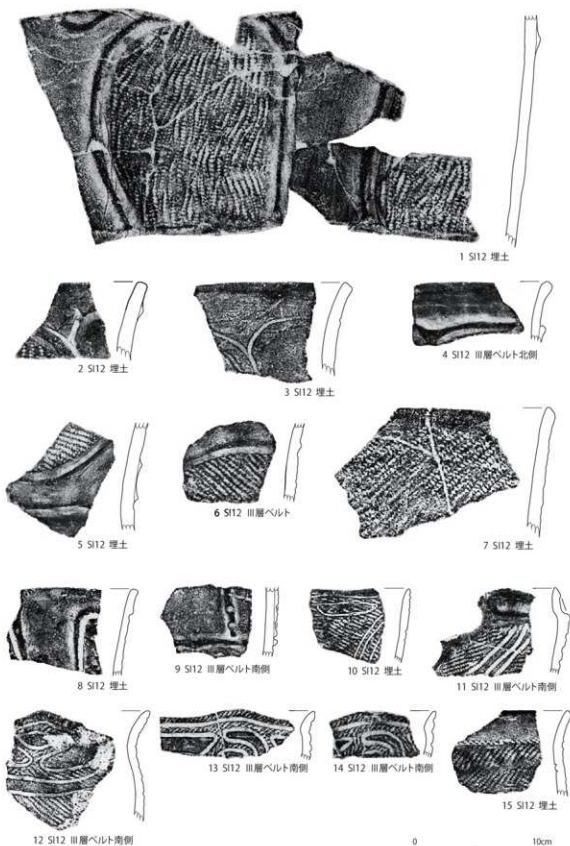


9 S112 II層ベルト

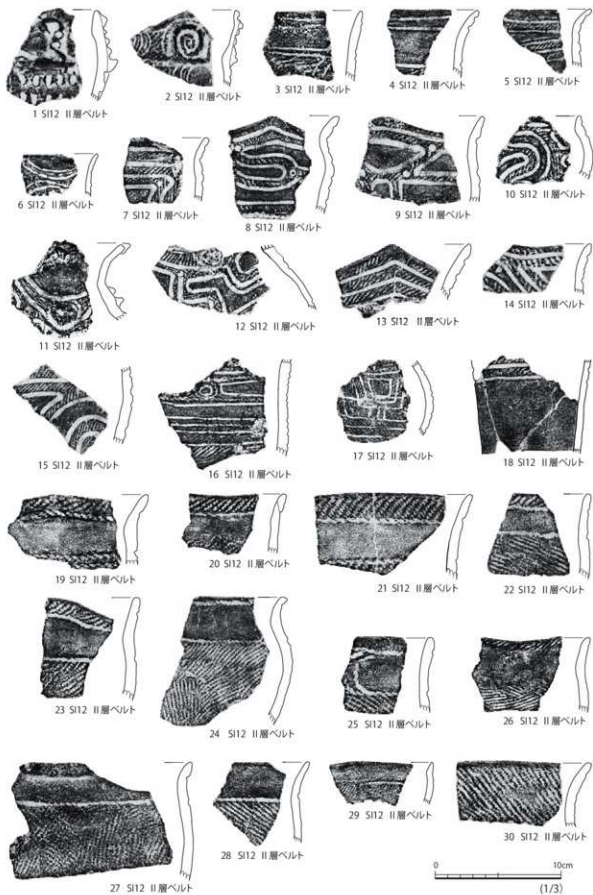
第125図 S112出土土器(1)



第126図 SI12出土土器(2)

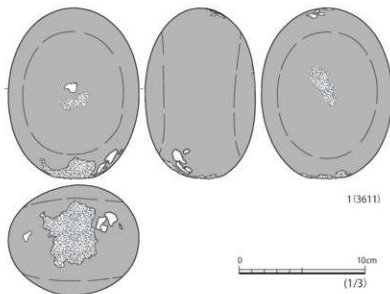


第127図 Si12出土土器(3)



第128図 SI12出土土器(4)





第129図 SI12 出土石器

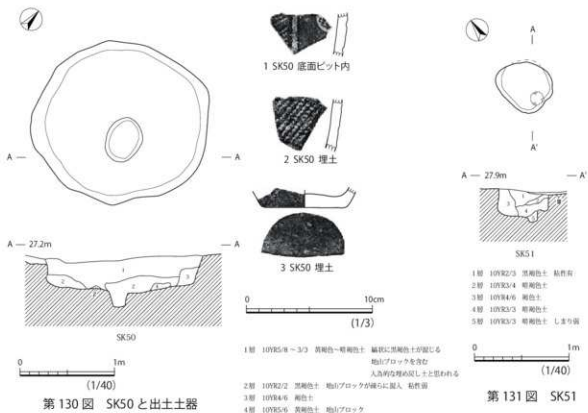
土坑

SK50 土坑 (第126図、図版25)

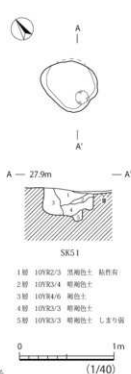
【位置】調査区中央から南、WR11 グリッド 【規模】192 × 167 × 38cm

【重複】SI12・SU2 先後関係SK49→SI11→SU2

【出土遺物】縄文土器3 (1・2は埋土、3は底面ピット内から出土。僅かに沈線・地文はみられるが詳細な時期は不明である。) 【所見】円形を呈し底面は平坦であるが、中央から南寄りに直径40cm程の小穴が設けられている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第130図 SK50と出土土器



第131図 SK51

- 1層 10YR5/8～3/3 黄褐色～暗褐色土 凝結した黒褐色土が混じる  
地山ブロックを含む  
入角形な埋め戻し土と思われる
- 2層 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックが破らに混入、粘着面
- 3層 10YR4/6 褐色土
- 4層 10YR5/6 黄褐色土 地山ブロック

#### SK51 土坑 (第 131 図、図版 26)

【位置】調査区南端、WR 13 グリッド 【規模】62 × 51 × 28cm 【所見】円形を呈する。南側に壁に接した小穴は、木根による攪乱である。底面は、ほぼ平らで壁は垂直に立ち上がる。

#### 遺物集積

##### SU2 遺物集積 (第 128 ~ 130 図、図版 26・47 ~ 54)

【位置】調査区中央から南、WR11 グリッド 【規模】271 × 149cm 【重複】SK49・SI11 先後関係は、SK49 → SI11 → SU2 【出土遺物】縄文土器 42(第 98 図によると、SI11 内に窪地状に落ち込んだⅡ・Ⅲ層を対象としているが、Ⅱ・Ⅱ-1 ~ 3・Ⅲ層は SI11 と混在している。遺物取り上げは各層につき複数回に分けて行ったようであるが、多くは SU2 と記載されている中でランダムに接合している。そのため、① SU2 一括、② SU2 とその上位層と接合したものの順で掲載した。

第 133 図 1 は中期末葉、第 133 図 2・3・第 134 ~ 137 図・第 142 図 2 は後期初頭から前葉とみられる。粗製土器となる第 138 ~ 141 図は器形等から中期末葉から後期前葉、第 142 図 7・8 は同一個体とみられる。) 磨石 1・凹石 2・礫器 1・敲石 1・石刀 1・石棒 1

【所見】SI 11 竪穴建物廃絶後に、その窪みに遺物が連続して投棄され、形成されたと推定される。一部では土器片が敷設されたように広がっていた。土器の他に、動物骨や石棒片なども見られる。

上部と下部 2 か所で放射性炭素年代測定用試料を採取し、上部 3,770 ± 20yrBP(δ 13C 補正值)、下部 3,870 ± 30yrBP(δ 13C 補正值) の測定結果であった。

#### 焼土跡

##### SL20 焼土跡 (第 98 図)

【位置】調査区南西端、WP12、WQ12 グリッド 【規模】100 × 50 × 3cm

【所見】Ⅲ層上面で検出された。焼成面は確認できず、廃棄ブロックだと思われる。

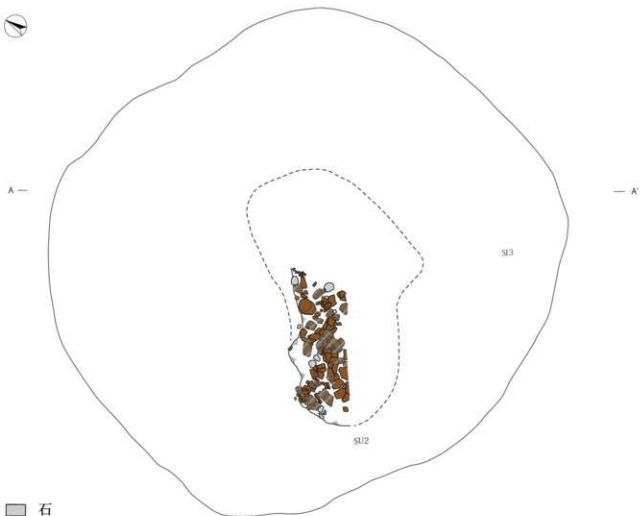
#### 貝層 (第 98・131 図、図版 54・55)

【位置】調査区南東隅、WT11 グリッド 【規模】調査区外、南東方向へ広がるものと推定される。

【出土遺物】縄文土器 25(貝層内からの出土とみられる土器は第 148 図 1 のみのため、貝層と明記された遺物の他に、調査記録写真や精査日等を考慮して同グリッド内で貝層の時期を推測できるものも掲載した。第 145・146 図・第 148 図 1・2・6 ~ 8 は中期末葉、第 148 図 5・9・第 149 図は後期初頭から前葉とみられる。第 147 図・第 148 図 3・4 の粗製土器は器形等から中期末葉から後期前葉とみられる。) 棒状骨角器 1・骨針片 2 (サンプリング・コアから検出)

【所見】動物骨・貝の細片を含みブロック状に堆積していた。調査時に採取した動物骨・貝と貝層サンプリング・コアの分析・同定は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所へ委託した。

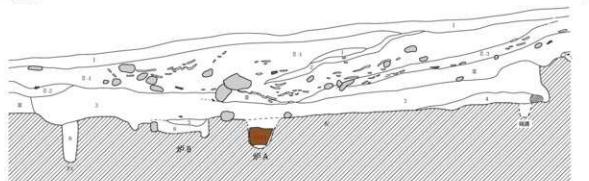
また、貝層中から放射性炭素年代分析試料を採取し、その結果は 3,860 ± 20yrBP(δ 13C 補正) であった。



- 石
- 土器
- 土器裏面

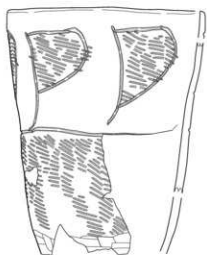


A — 28.4m

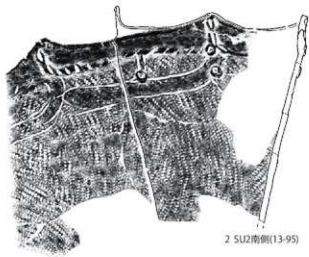


- |    |          |      |                   |     |          |        |                    |
|----|----------|------|-------------------|-----|----------|--------|--------------------|
| 1層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 黄土                | 3層  | 7.5YR4/3 | 褐色土    | 粘状有                |
| 2層 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土 | 粘状有               | 4層  | 7.5YR4/3 | 褐色土    | 砂質                 |
| 3層 | 10YR4/2  | 灰褐色土 | 地山ブロック混入、粘状有      | 5層  | 10YR5/4  | 紅い黄褐色土 | 地山ブロック             |
| 4層 | 10YR3/1  | 黒褐色土 | 地山混・硬砂を含む(1%)、粘状有 | 6層  | 7.5YR3/3 | 暗褐色土   | 粘状有                |
| 5層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 上層に地山混入、小礫も多く含む   | 7層  | 10YR3/3  | 暗褐色土   | 地山混や硬砂を含む          |
| 1層 | 7.5YR2/1 | 黒色土  | 粘状、しまり面 微石・砂化物が混入 | 8層  | 10YR4/4  | 褐色土    |                    |
| 2層 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土 | 粘土粒、地山混を含む しまり面   | 9層  | 2.5Y3/2  | 暗赤褐色土  | 粘土粒、しまり面<br>大きな硬砂混 |
|    |          |      |                   | 10層 | 10YR4/3  | 紅い黄褐色土 | しまり面               |

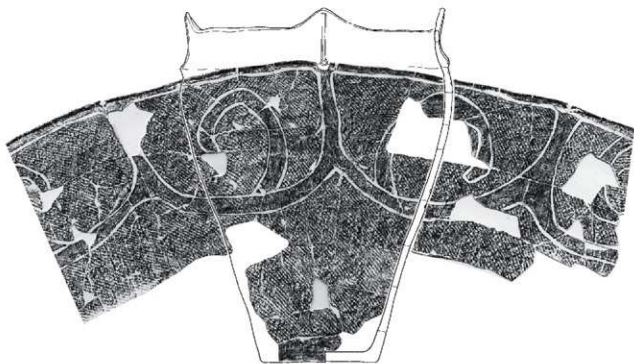
第132図 SU2



1 SU2 II 層3回目



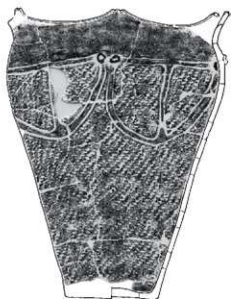
2 SU2南側(13-95)



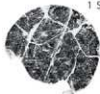
3 SU2底面ベルト・図B下, T-2(13-16)



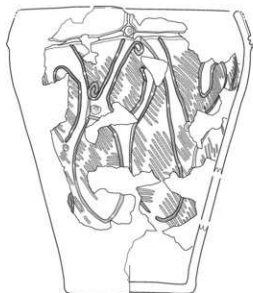
第133図 SU2出土土器(1)



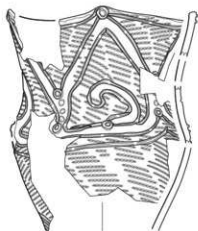
1 SU2 下面(13-10)



2 SU2 図



3 SU2 底面ベルト



4 SU2 Ⅱ層ベルト3回目



5 SU2 Ⅱ層ベルト1回目(13-31)



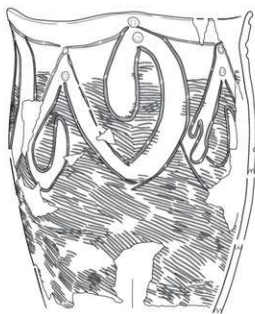
6 SU2 ベルト2回目



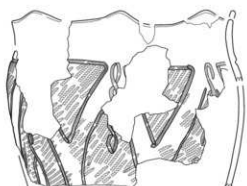
7 SU2 Ⅱ層ベルト1・2回目



第134図 SU2 出土土器(2)



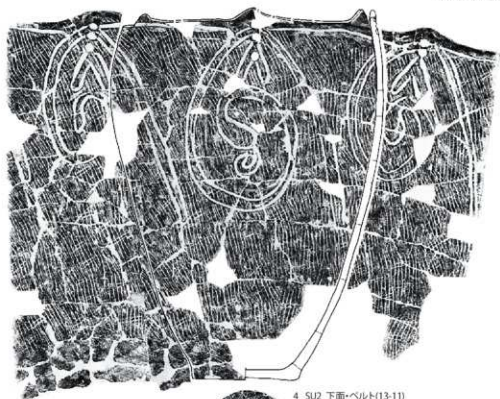
1 SU2 底面2回目・図6



2 SU2 II層ベルト3回目



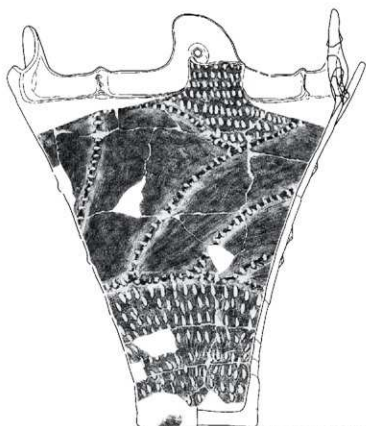
3 SU2 底面ベルト



4 SU2 下面+ベルト(13-11)



第 135 図 SU2 出土土器 (3)



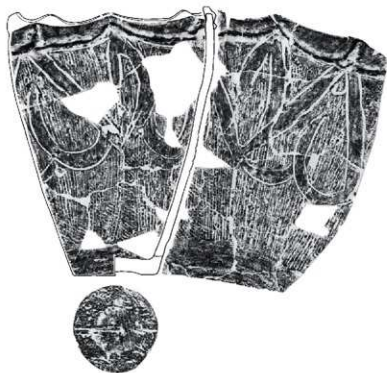
1 SU2 底面・底面ベルト2回目, WS10 II層, T-1(13-34)



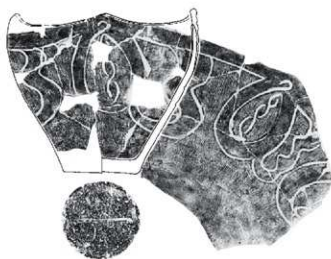
2 SU2 II層3回目・II層ベルト2回目, WR11 II層(13-111)

0 10cm  
(1/4)

第136図 SU2 出土土器(4)



1 SU2 下面, WR11 II層, WR11-d II・II-3層(13-29)

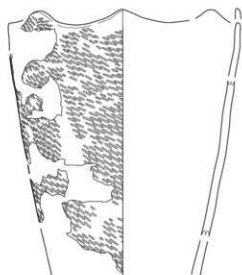


2 SU2 底面ベルト, WR11 II-3層, WR11-b II-1層(13-33)

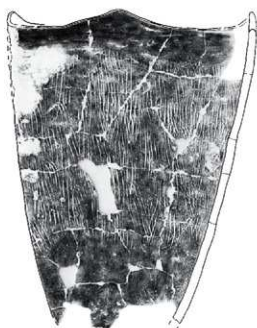


第137図 SU2出土土器(5)

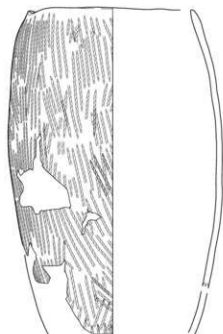




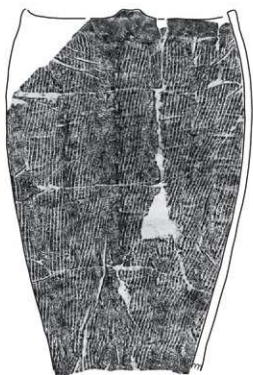
1 SU2 底面



2 SU2 II層ベルト2・3回目(13-94)



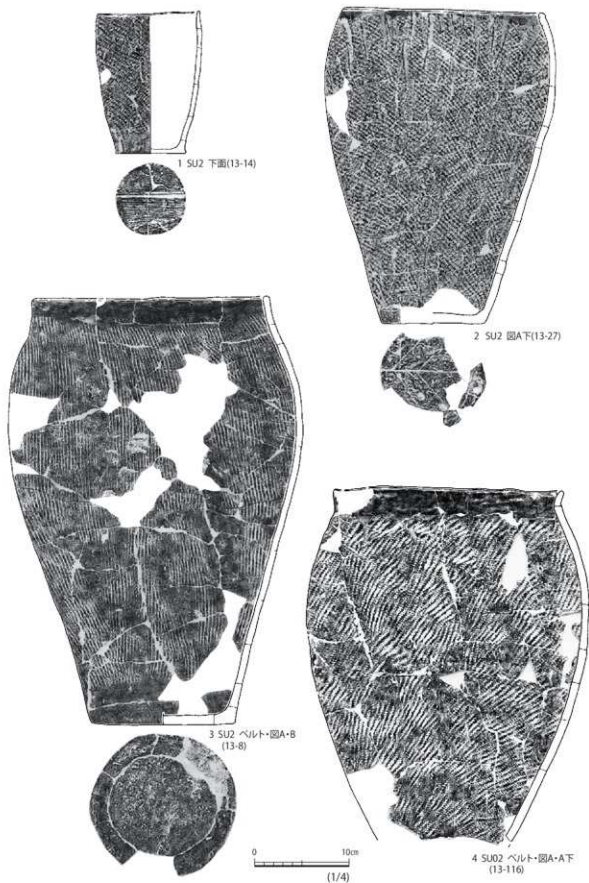
3 SU2 図B・B下



4 SU2 II層ベルト2・3回目・底面ベルト



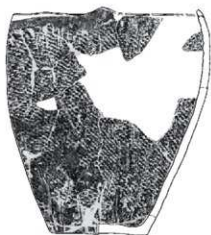
第138図 SU2出土土器(6)



第 139 図 SU2 出土土器 (7)



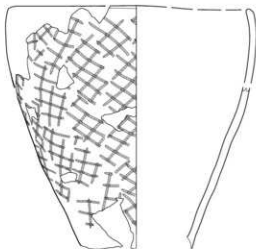
1 SU2 底面ベルト・ベルト2回目



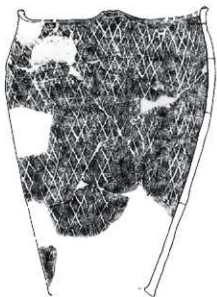
2 SU2 下面(13-24)



3 SU2 図B・B下



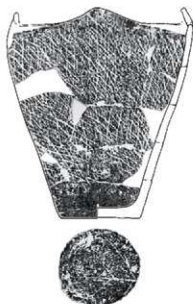
4 SU2 図C



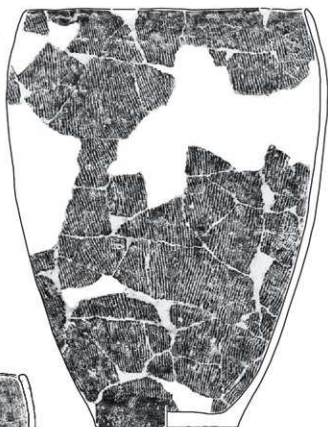
5 SU2 下面, WR11(13-109)



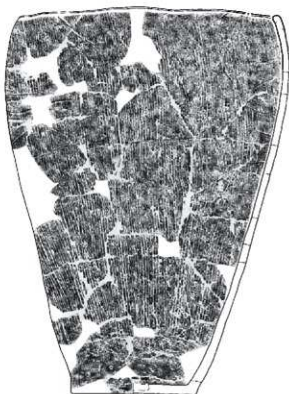
第140図 SU2出土土器(8)



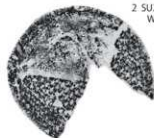
1 SU2 底面ペルト-底面2回目, WS11-a II層 (13-58)



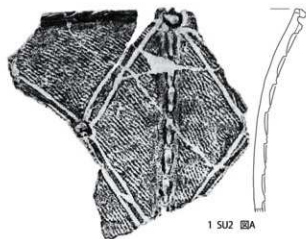
2 SU2 底面ペルト-図C  
WR11 II層



3 SU2 底面ペルト, WR11C-d II-1層(13-26)



第141図 SU2出土土器(9)



1 SU2 図A



3 SU2 II層ベルト1回目



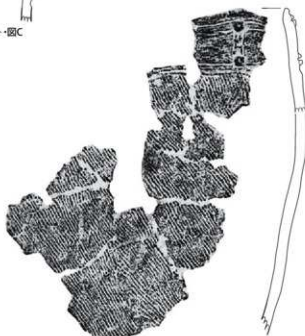
2 SU2 II層ベルト3回目・底面ベルト・図C



4 SU2 II層ベルト1回目



5 SU2 II層ベルト1回目



6 SU2 II層ベルト1・2回目



7 SU2 II層ベルト2回目

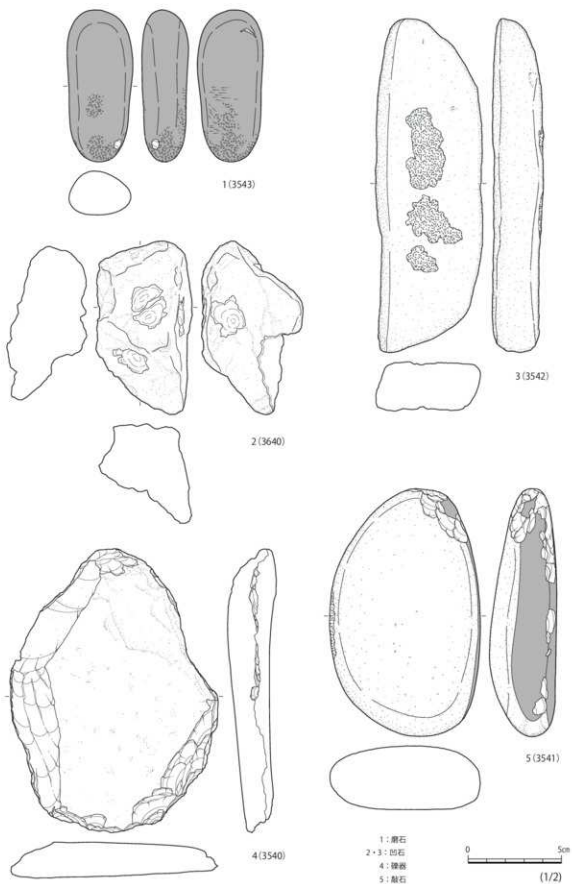
0 10cm

(1/3)

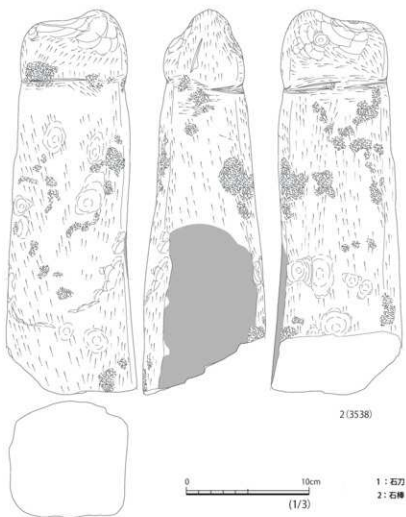
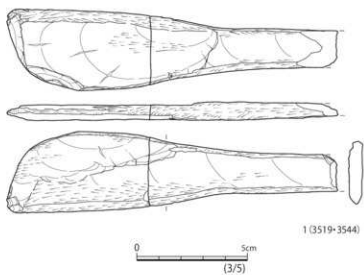


8 SU2 II層ベルト2回目, WR11 II-3層

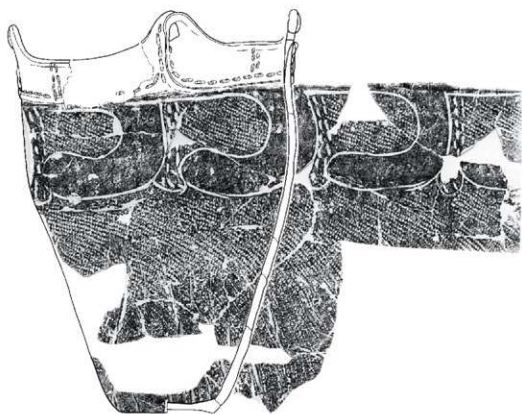
第142図 SU2出土土器(10)



第 143 图 SU2 出土石器 (1)



第144图 SU2出土石器(2)



1 WT11 Ⅱ層・貝層直下(13-63)

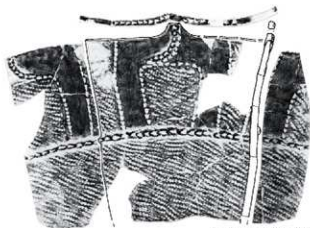


2 WT11 Ⅱ層・貝層直下(13-45)

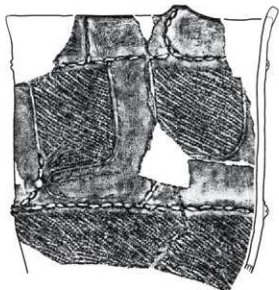


第 145 図 貝層出土土器(1)





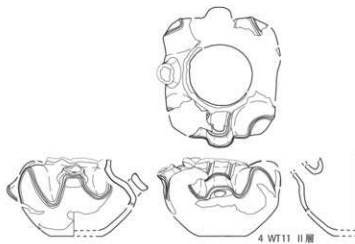
1 WT11 I・II層・貝層周辺(13-93)



2 WT11 II層

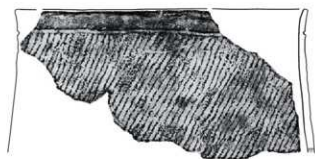


3 WT11 II層

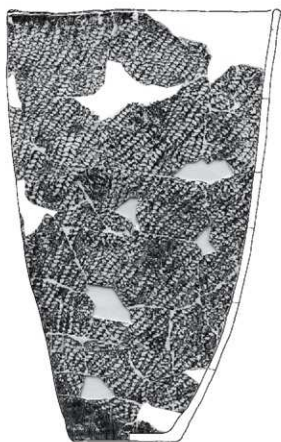


4 WT11 II層

第 146 図 貝層出土土器 (2)



1 WT11 Ⅱ層



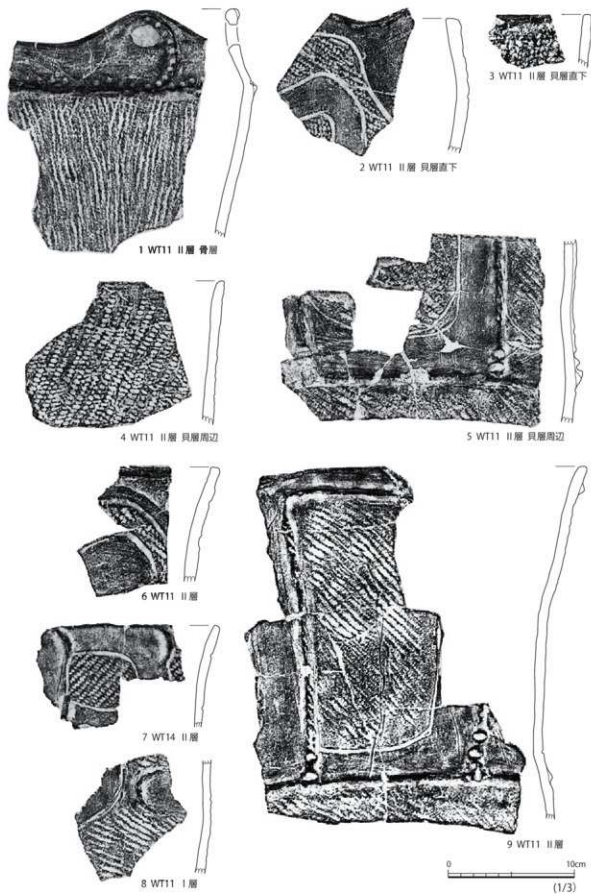
2 WT11 Ⅱ層(13-51)



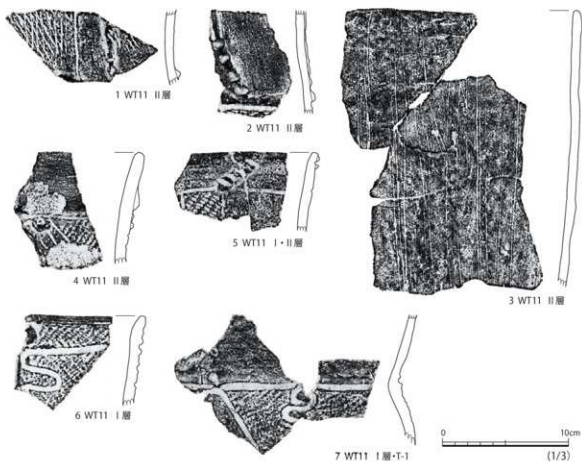
3 WT11 Ⅱ層(13-74)



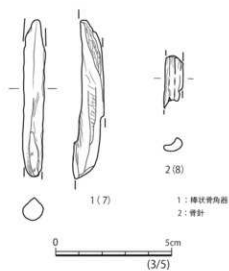
第 147 図 貝層出土土器 (3)



第 148 図 貝層出土土器 (4)



第149図 貝層出土土器(5)



第150図 貝層出土骨角器

#### 4 遺構外の出土遺物

##### 縄文土器

出土遺物の特徴により以下のとおり分類した。

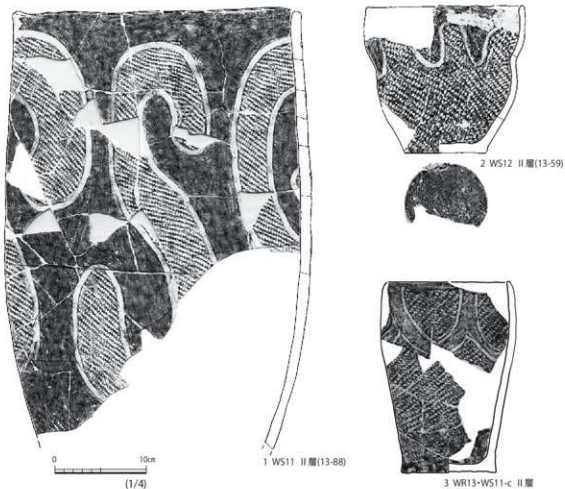
##### 第1群土器(第151～152図、図版56)

縄文時代中期の土器を一括した。中期中葉から末葉にかけてのもので、大木8b～10式に相当するものである。遺跡全体の出土土器の総数としては少ない。

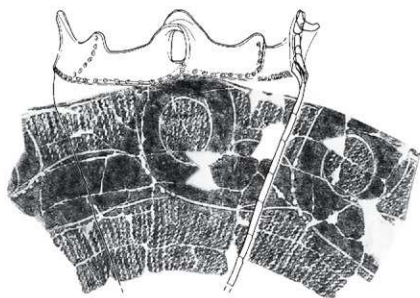
第152図2は口縁に沿った沈線と刺突列、その下位に溝巻状沈線が施される深鉢口縁部破片である。中期中葉とみられる。

第151図1は長胴形の深鉢で、縦位に伸びたS字状沈線区画内に縄文が残る。2は胴部と口縁部に膨らみをもち、頸部が括れる器形の深鉢である。口縁を波状沈線で区画し、口縁部は無文、胴部は地文となる。中期中葉とみられる。

第151図3はU字状沈線区画が横位に連続する深鉢、第152図1は口縁に環状突起と小突起を伴う深鉢で、胴部には一部に刺突列を伴った円状の区画文が描かれる。第152図3は深鉢胴部破片で、L字状沈線区画の接合部に刺突列を充填した円状の区画がある。中期末葉とみられる。



第151図 第1群土器(1)



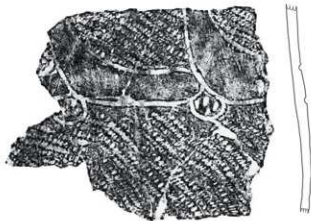
0 10cm

1 WS11 II層(13-91)

(1/4)



2 WQ12 II層



3 WS10-WT11 II層

0 10cm

(1/3)

第152圖 第1群土器(2)

## 第2群土器 (第153～193図、図版56～73)

縄文時代後期初頭から前葉の土器を一括した。混在しているが、門前式から宮戸1b・十腰内1式に相当するもので、細網I・II式、称名寺式・堀之内1・2式の要素がみられるものもある。遺跡全体の出土土器の大半を占める時期となる。

1類・・・鎖状降線・降線・刺突・刻みが施されるもの、口縁から続く文様をもつもので、門前式とその直前も含む。(第153～155図、図版56～58)

第153図1・2は頂部に刺突を伴う突起をもつ深鉢で、1は8単位の突起を持ち、突起下から斜位に伸びる平行線が交差し、格子状を呈する。2は頸部で最大径を計る器形で、2個1対の突起から頸部にかけて鎖状降線が巡り、突起下の降線間には刺突が充填される。3は口縁部に横位の楕円状降線区画が施される深鉢で、降線上と降線区画間に2個1対の刻みがされる。4は頂部に刻みがされた波状線を呈し、頸部に鎖状降線が巡る深鉢である。5は口縁部に弧状降線が横位に展開する深鉢である。

第154図1は口縁から単位となる鎖状降線が垂下し頸部を巡る深鉢である。2・3は胴部が筒状になる器形の深鉢で波状線を呈する。2は波頂部に貫通孔を持ち、刻み目列を伴う降線が貫通孔と頸部に沿って巡り、接合部にはボタン状貼付けがされる。3は頸部に刺突列が巡る。4・5は頸部に鎖状降線が巡る深鉢で、5は口縁にノ字状の鎖状降線が単位的に垂下する。6は樽形を呈し鐮状降帯と4単位の橋状突起を持ち、突起下から鎖状降線が垂下する。胴中部の最大径を計る部分に巡る鎖状降線に接し、接合部にはボタン状貼付けがされる。

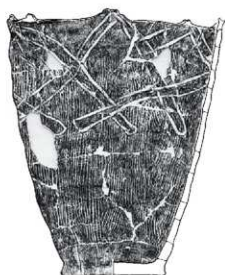
第155図は深鉢の口縁部破片である。1は波頂部に孔を伴う山形口縁で、L字状の降線を横位に連続して貼付け、降線の接合部に2個1対の刻みが入る。2・3は同一個体とみられ、刻みがされた小突起を持ち、頸部区画に沿って鎖状降線が巡り波頂部下で降線が上下に分かれる。4は波頂部下に刺突を充填した沈線区画と降線区画の曲点にボタン状貼付けをし、一部鎖状降線となる。5は刻みがされた小突起を持ち、その下位に八字状の沈線列が描かれる。6は波頂部に突起が付き下位には貫通孔が施され、降線と円形刺突列が頸部を巡る。7は口縁に沿った沈線上に単位的に2個1対の刻みが配される。

2類・・・器形が朝顔状に開くもの、降帯が胴下部まで垂下するもの、中空突起・ボタン状・鎖状貼付けを伴うもの。門前式に相当する。(第156～158図、図版58・59)

第156図・第157図1・第158図1～3は朝顔状に開く器形で、中空突起・鎖状降線を伴う深鉢である。突起には内外面にS字状・渦巻状の沈線文が描かれ、突起を起点として伸びる横位のS字状文に鎖状降線やボタン状貼付けが伴う。また第156図・第157図1ではS字状文より縦位に底部付近まで垂下する降帯がみられる。第157図2は同様の器形とみられる深鉢の胴から底部で、沈線区画し刺突を充填している。第158図3は突起下のボタン状貼付けを起点とし、端部にボタン状貼付けを伴った連鎖状貼付けで区画する。第158図4・5は同一個体の深鉢とみられ、区画降線の端部や接合部にボタン状貼付けをする。

3類・・・長胴形で胴中部に僅かな膨らみを持ち、口縁に向かって緩く外傾する器形で、胴上部に方形基調の文様を展開するもの。門前式に相当する。(第159図、図版59・60)

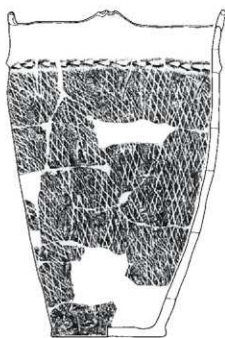
第159図1・3は平縁、2は小突起をもち、4は波状線となる深鉢である。1・2は方形の沈線区画が胴上部に施される。3は列線を伴う降線で方形区画をし、区画内には列線を伴うJ字状沈線文が描かれる。4は波頂部にボタン状貼付けがされ、方形区画された4面にJ字状・曲線的な文様を施す。文様の端部や接続部に渦巻状沈線文やボタン状貼付けがされ、各面とも違う様相を呈している。



1 WR11 II-2層(13-5)



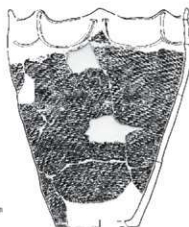
2 WS11-a II層(13-52)



4 T-1(13-47)



3 WR13 II層



5 WR11-b II-1層(13-13)

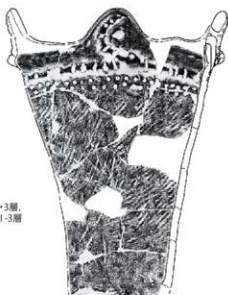


第153図 第2群1類土器(1)





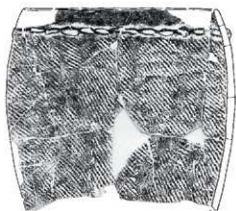
1 WR11 II-2-3層,  
WR12 II-II-3層  
(13-38)



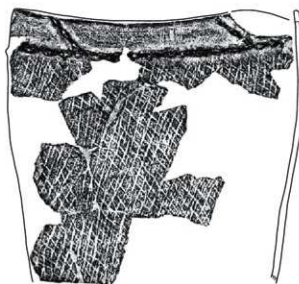
2 WR14 II層(13-76)



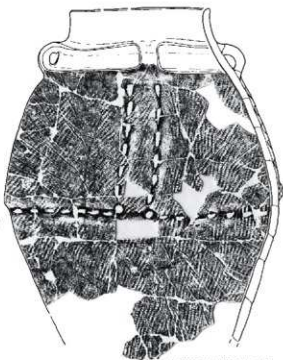
3 WS10-10-c II層, T-1(13-40)



4 WR11-b II-1層(13-110)



5 T-1

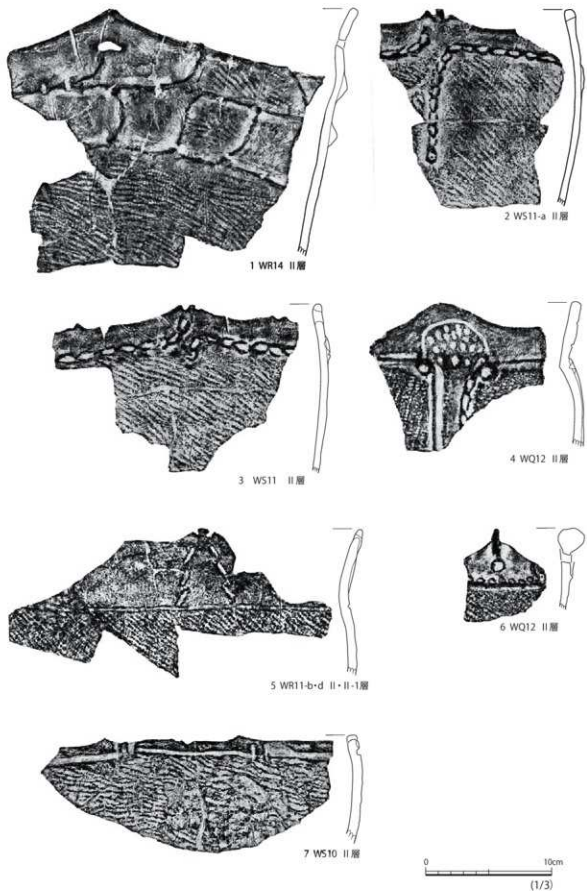


6 WR10-d-WR11-b II層  
(13-86)

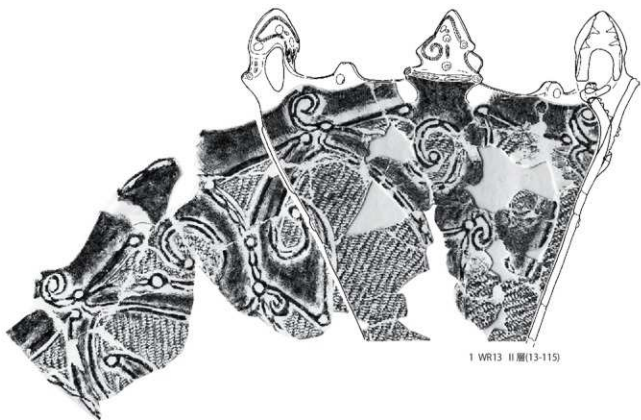


(1/4)

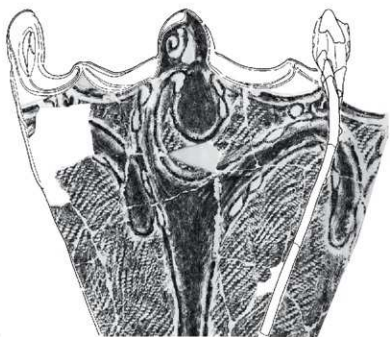
第154圖 第2群1類土器(2)



第155圖 第2群1類土器(3)



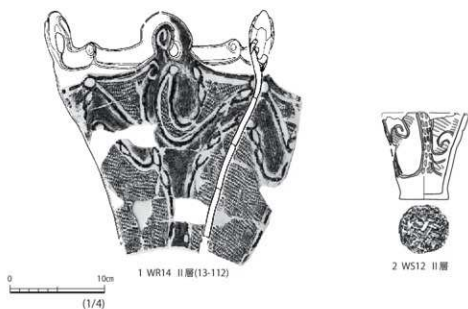
1 WR13 II層(13-115)



2 WR14 II層(13-105)



第156図 第2群2類土器(1)



第157図 第2群2類土器(2)

4類・・・鎖状降線・降線・刺突列・ボタン状貼付けが胴上部に横位展開されるもの。門前式に相当する。  
(第160図、図版60)

第160図1～3は波状線を呈し胴上部で最大径を計る深鉢である。胴上部には平行する鎖状降線や降線がJ字状・弧状に横位展開し、降線間は磨消しがされる。いずれも降線の接合部にボタン状貼付けが配される。1・2は波頂部と起点とした降線・鎖状降線が垂下し、3は波頂部に孔と渦巻状文様が施される。

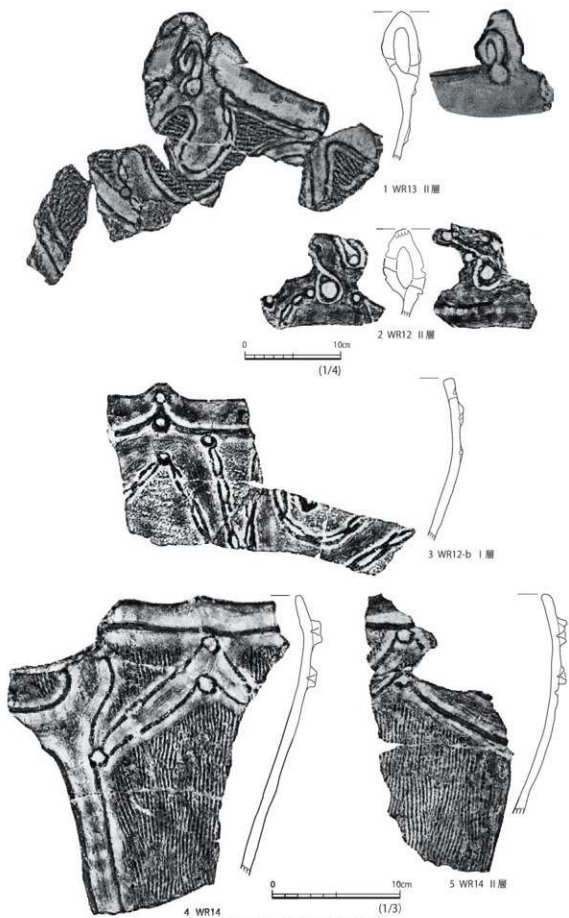
5類・・・沈線等で単位的な文様が施されるもの。門前式に併行するとみられる。(第161～163図、図版61)

第161・162図は概ね類似した器形の深鉢である。第161図1・2は胴部全体に楕円状区画が描かれる。1は頂部に刺突を作った突起下を起点とし、一部列線を作った半円状や渦巻状の文様を描き、接合部にボタン状貼付けをする。楕円状区画の一部にはボタン状貼付けを作った鎖状降線が付随する。2は2個1対の突起下に端部が渦巻き状となり横位に流れる文様が描かれる。1・2とも区画外には不完全な磨消しがみられる。

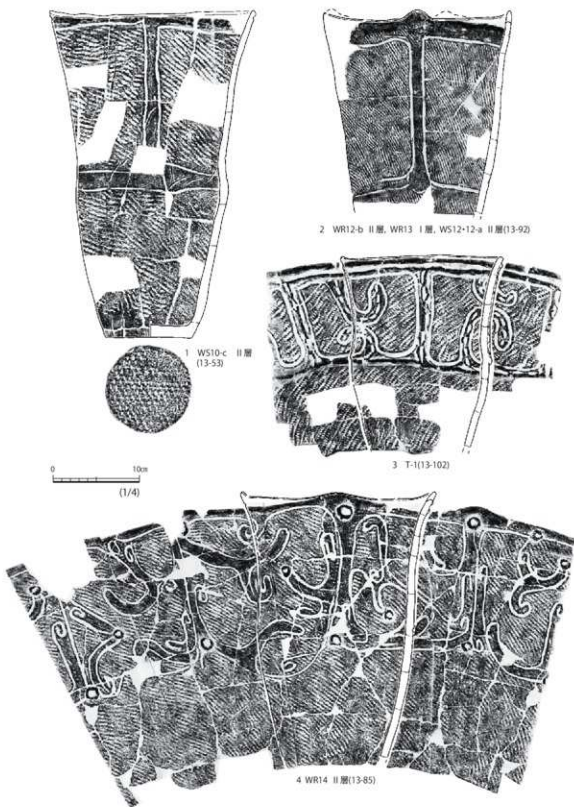
第162図1は刻みがされた波頂部を起点として刺突列が垂下し、背中合わせ的なJ字状文の分岐部分にボタン状貼付けがされる。2は頸部区画に2段の刺突列が巡り、波頂部下に刺突とS字状文が単位的に描かれる。3は刻みがされた突起部分を起点として、端部が渦巻き状になった弧状沈線が横位に配される。

第163図1・2は深鉢口縁部破片で、1はJ字状区画の接合部や端部にボタン状貼付けがされる。2は波頂部下の円形刺突を起点として、端部が渦巻き状になった弧状沈線が横位に配される。

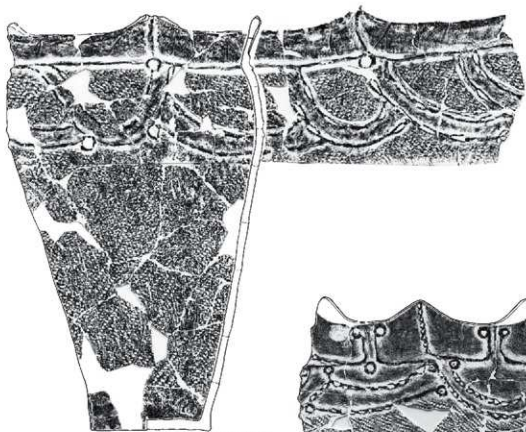
6類・・・J字状文、鉤針状文、ノ字状などを組合せた文様が施されるもの、所謂卵倒状の要素を持った文様。また、それらが横位で連結するもの。門前式から宮戸1b式にかけてとみられる土器をまとめたと、綱取1・II式、称名寺、堀之内1式の要素がみられる。(第164～177図、図版61～67)



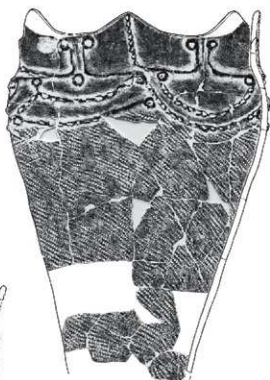
第158図 第2群2類土器(3)



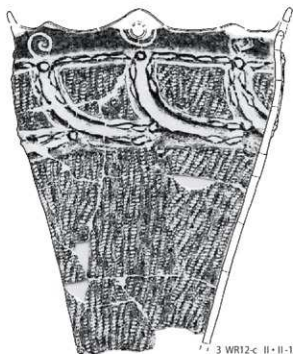
第159圖 第2群3類土器



1 WR14 II層(13-57)



2 WR12-12-b II層(13-113)

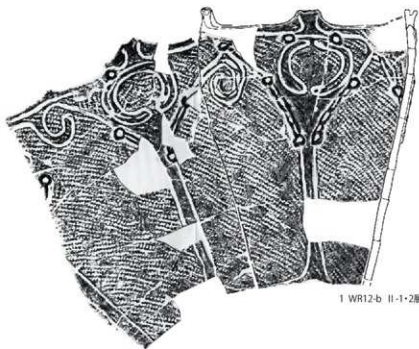


3 WR12-c II・II-1層. WR12-5 II層(13-99)



第160図 第2群4類土器





1 WR12-b II-1・2層(13-98)

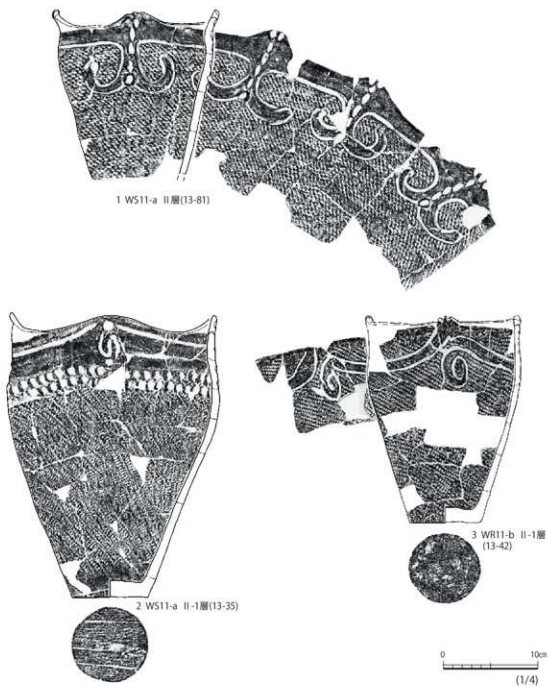


2 WR12 II層, WR12-b II-II-1-2層  
(13-56)

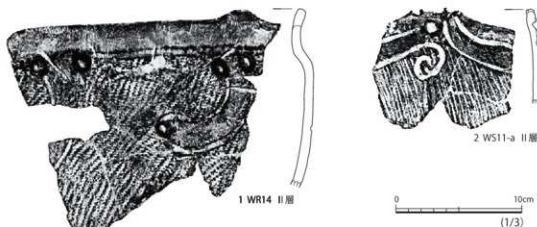


第161図 第2群5類土器(1)





第162図 第2群5類土器(2)



第163図 第2群5類土器(3)

第164・165図1は胴上部に膨らみを持つ深鉢である。

第164図1は4単位の波状線で波頂部にノ字状の隆線が貼付けされる。頸部は連鎖状隆線が巡り、単位部分となるボタン状貼付けを起点として、ノ字状とJ字状を組合せた文様を施文する。2は口唇に刺突列を持ち、波状線の頂部から刻みを伴う隆線が垂下し頸部を巡る。胴部には倒卵状的な文様が描かれ、一部鉤針状文となり、端部に円形刺突がされる。

第165図1は波頂下の円形刺突を起点として倒卵状的な文様が描かれ、そこから垂下する沈線が胴下部まで区画がされる。2・3は鉤針状文が描かれる深鉢である。2は波頂部に縦位に2個1対の円形刺突を配し、地文にハケメ状沈線が施される。3は波頂部に渦巻状沈線文を配し端部に刺突を伴い、口縁付近に補修孔がある。

第166図1は長胴的で胴中部で最大径を測る器形の深鉢である。円形刺突のある突起を起点としてJ字状文様が描かれる。2は大小8単位の波状線の深鉢で、波頂部下の緩い渦巻状沈線文を起点とし向かい合うJ字状文様が描かれる。文様の端部や接合部にはボタン状貼付けを伴った鎖状隆線が施され、口縁付近に補修孔がある。

第167図1はJ字状文や曲線のな文様が不規則に横位に展開する深鉢で、文様の起点や端部には緩い渦巻状文様や円形刺突が配される。

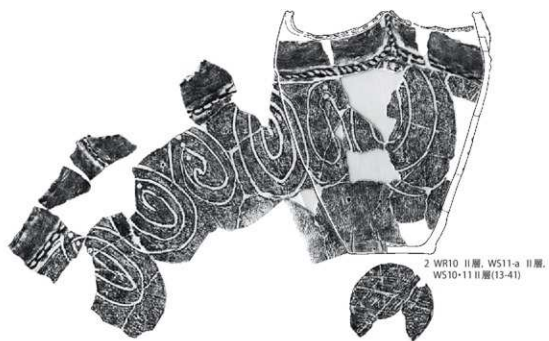
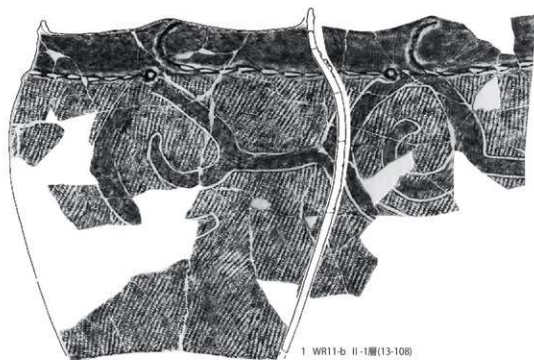
第167図2・第168図1は概ね類似した器形の深鉢である。第167図2はノ字状とJ字状を組み合わせた区画文様で、第168図1は倒卵状的な区画が描かれ区画内は不完全な磨消しとなる。

第168図2・第169図1は胴上部で最大径を計る器形の深鉢で、第168図2は大小8単位の波状線を呈し、単位となる円形刺突を起点として渦巻状文が施される。第169図1は4単位の波状線を呈し、単位となるボタン状貼付けを起点として細めの平行沈線で倒卵状的な文様を描く。第168図2・第169図1の地文は、胴上部の縄文施文方向が横、胴中部から下部が縦・斜めと、原体方向を変え一部羽状を呈する。

第169図2・3は壺で、2は無文に鉤針状文が、3は横位展開の渦巻状文が描かれている。

第170図1・2は胴部に膨らみを持つ深鉢で、倒卵状的な文様の各所に小さなJ字状や緩い渦巻状の文様が配される。波頂部を起点とした文様区画となり、区画内は不完全な磨消しがされる。3は波頂部下に端部が渦巻きになったS字状文が描かれ、ここを起点として倒卵状的な文様区画が描かれる。区画に付随する渦巻状文は胴上部にのみ配される。

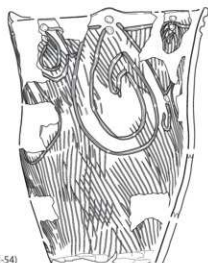
第171～173図の深鉢は倒卵状的な文様の要素を持ったものとして扱った。第171図1は胴上部に膨らみを持つ器形で、波頂部から鎖状沈線が垂下し、区画内に配される文様も鎖状である。第171



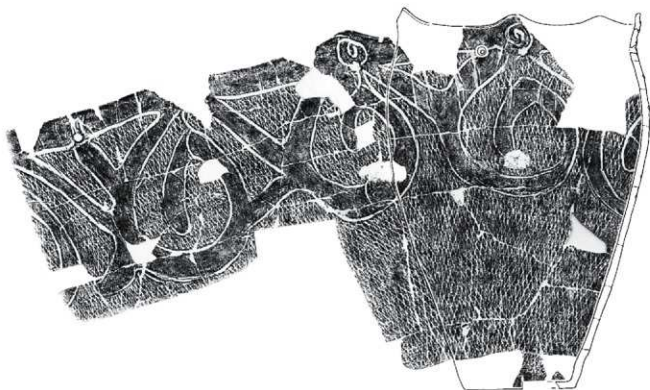
第164図 第2群6類土器(1)



1 WR11-b II-1層, WS11-a II-1層(13-54)



2 T-1



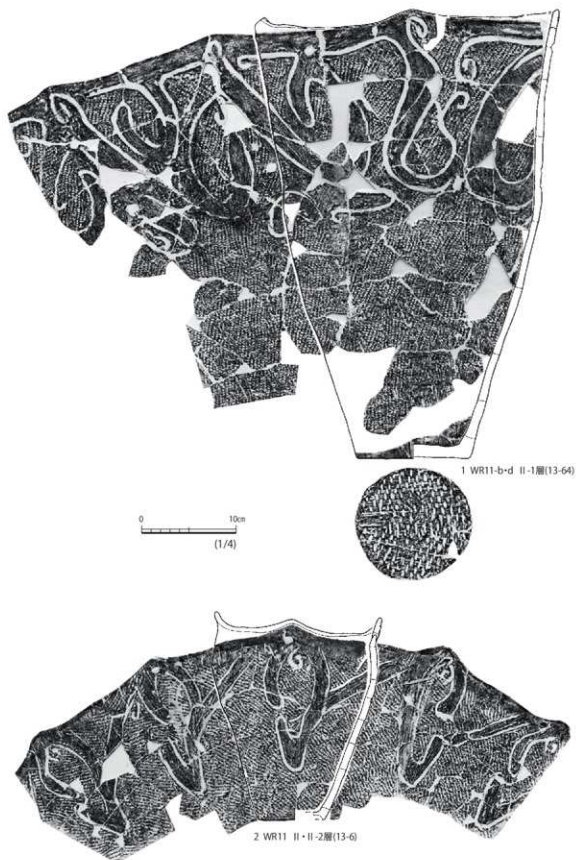
3 WR11-b II-1層, WS11-a II-1層(13-20)



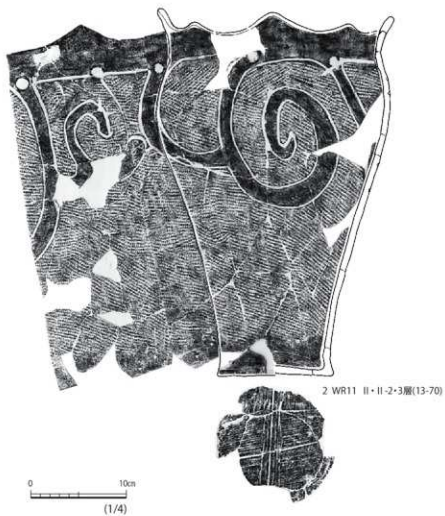
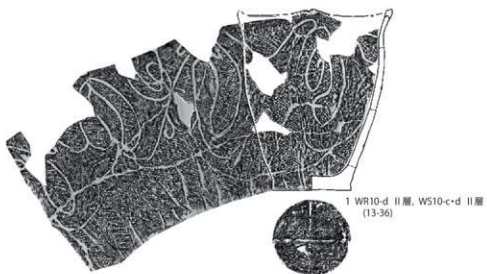
第165図 第2群6類土器(2)



第166図 第2群6類土器(3)



第167図 第2群6類土器(4)

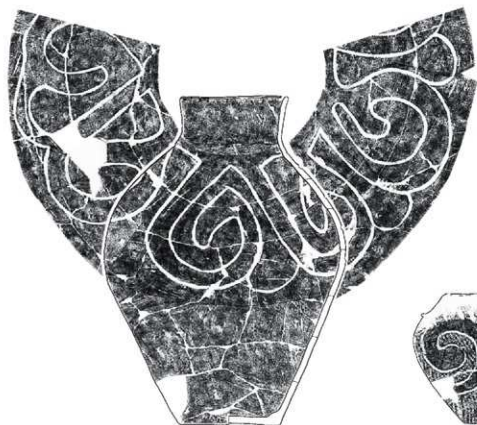


第168図 第2群6類土器(5)





1 WS11-b II層(13-44)



2 WQ12 II-2層, WR12-a II-1層  
(13-28)



3 WR12-c II層(13-84)



第169図 第2群6類土器(6)

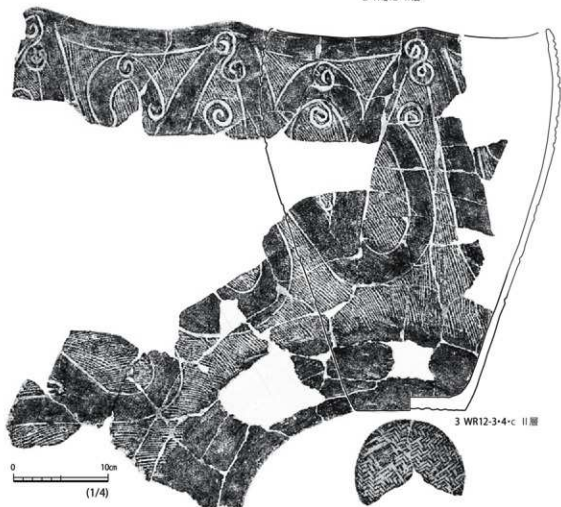




1 WR11-b II-1層



2 WQ12 II層



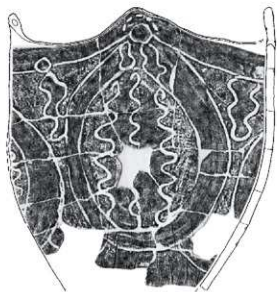
3 WR12-3-4-c II層

0 10cm  
(1/4)

第170圖 第2群6類土器(7)



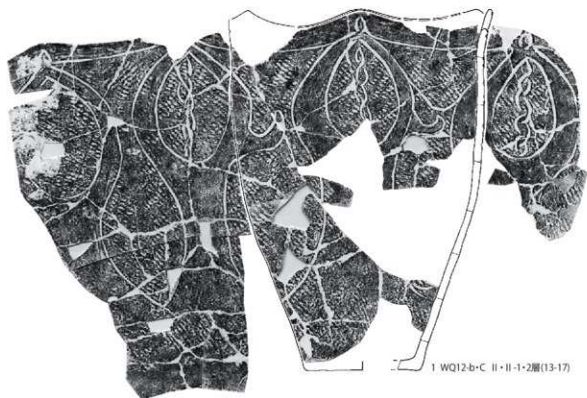
1 WR11-b II-1層(13-1)



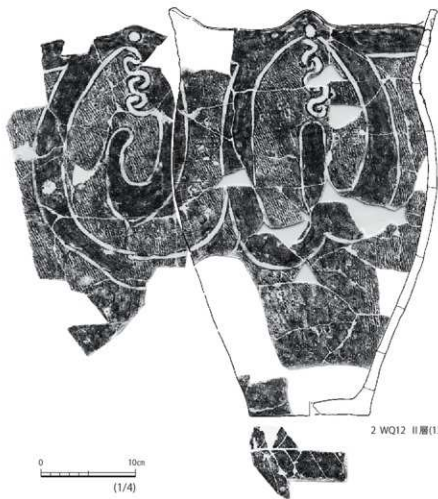
2 WS10 II層(13-104)



第171図 第2群6類土器(8)



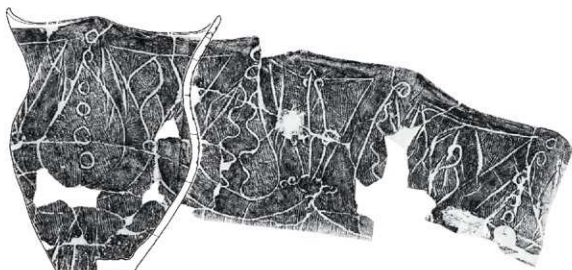
1 WQ12-b-C II・II-1-2層(13-17)



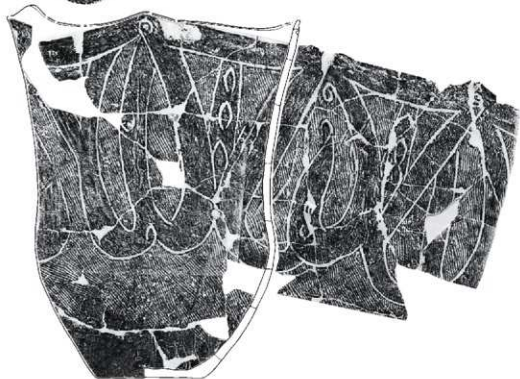
2 WQ12 II層(13-89)

0 10cm  
(1/4)

第172図 第2群6類土器(9)



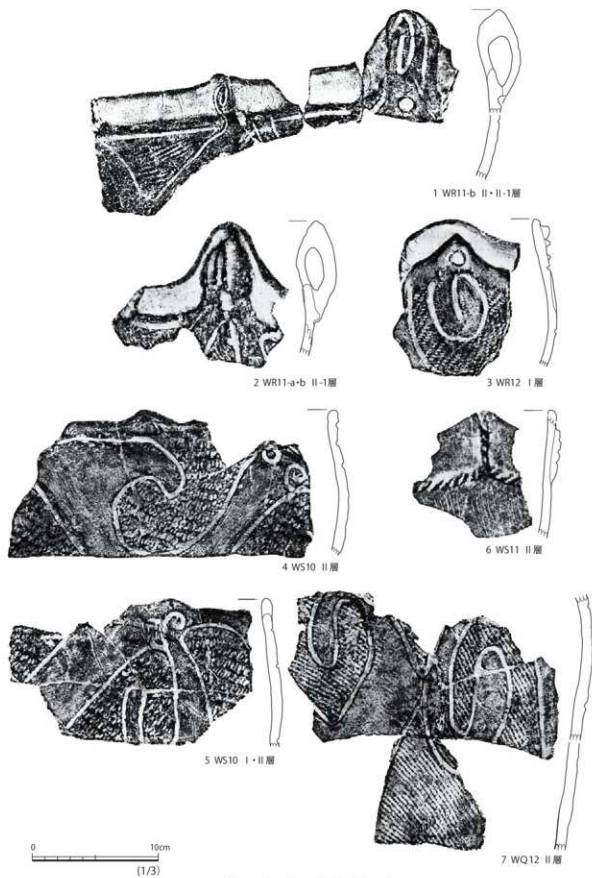
1 W511-a II層(13-46)



2 WR11-b II-1層(13-39)



第173図 第2群6類土器(10)



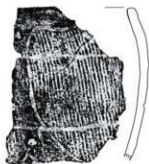
第174図 第2群6類土器(11)



1 WR11-d II-1層



2 WR11-d II-1層



3 WS11-a II層



4 WR12-4-5 II層



5 WQ12 II層



6 WQ12 II層

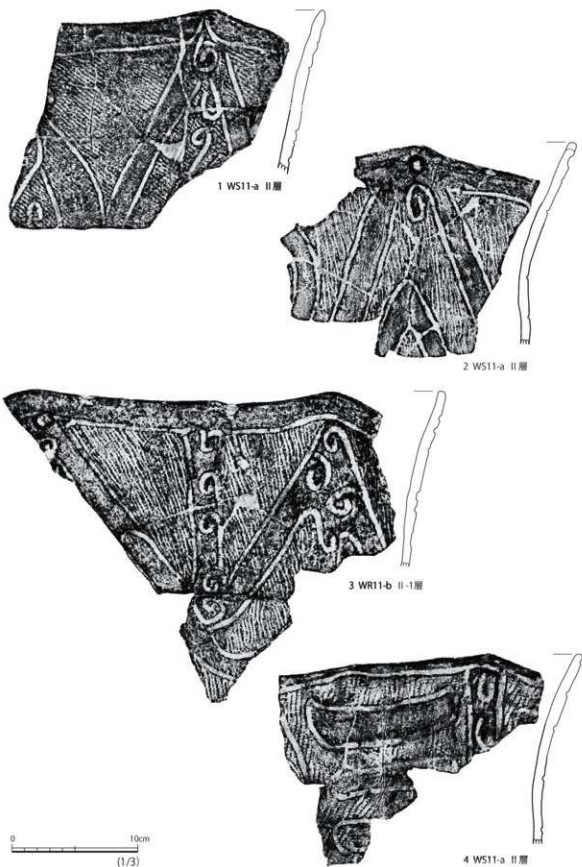


7 WR12-9 II層

0 10cm

(1/3)

第175図 第2群6類土器(12)



第176図 第2群6類土器(13)





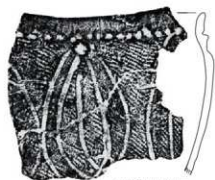
1 WS11-a II層



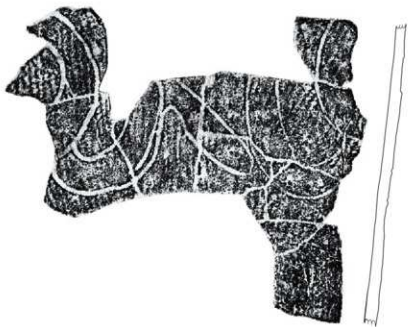
2 WQ12 II層



3 WS10 II層



4 WR11-b II-1層

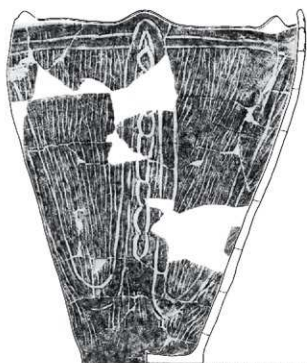


5 WR12 掘乱内



第177図 第2群6類土器(14)





1 WR10-d II層, WR11-b II・II-1層,  
WS11-a-b II・II-1層(13-102)



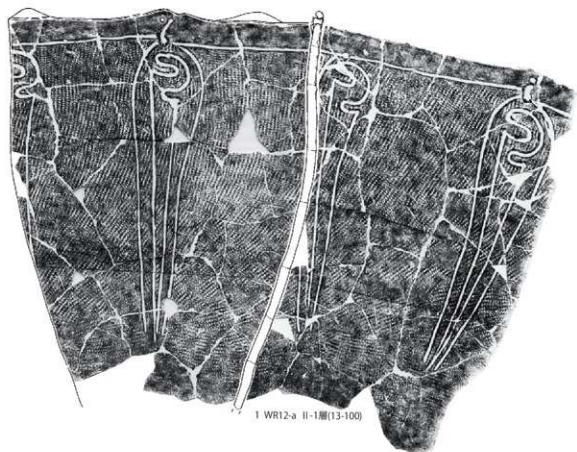
2 WQ12 II層(13-67)



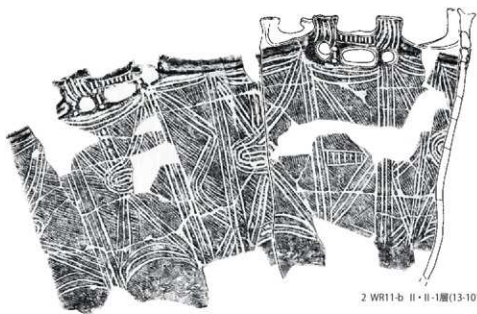
3 WR12-b II-1-2層(13-7)

0 10cm  
(1/4)

第 178 図 第 2 群 7 類土器 (1)



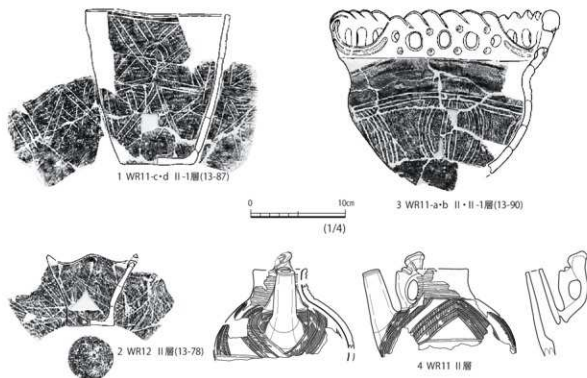
1 WR12-a II-1層(13-100)



2 WR11-b II・II-1層(13-101)



第179図 第2群7類土器(2)



第180図 第2群7類土器(3)

図2・第172図1は波頂部下の円文を起点とし卵状の区画が描かれる。第171図2は区画内に蛇行沈線が垂下し、区画外にも蛇行沈線が施される。第172図1は区画内に鎖状沈線が垂下し、底部付近まで施される区画には横位に伸びるJ字状文が付随し、区画内は不完全な磨消しがされる。

第172図2・第173図1は胴上部が括れる器形である。第172図2は波頂部下の円形刺突を起点とし、向かい合うJ字状文が胴下部で合体する文様区画となり、区画内は鎖状沈線が垂下する。

第173図1は波頂部を起点とし卵状の区画を描く。区画内には蛇行沈線が垂下する面と連続する円文が垂下する面がある。2は胴下部で括れる器形で、第172図2に類似した胴下部で合体する文様区画となり、区画内には連続する逆U字状文が垂下する。

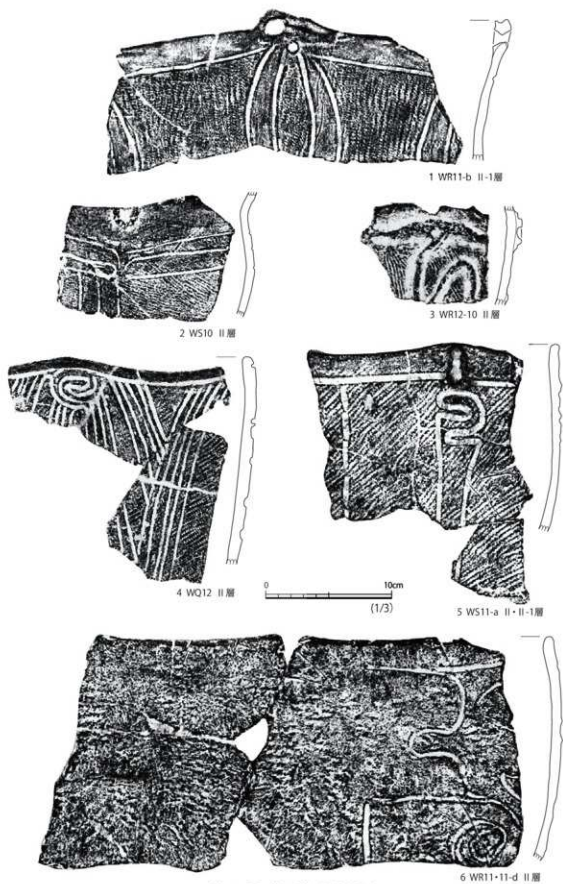
第174～177図は深鉢の口縁部・胴部破片である。

第174図1・2は中空突起部分に緩い渦巻状文と刺突が施され、その下位に倒卵状的な文様が描かれている。3は波状線の円形刺突下にJ字状区画がされ、区画内に縄文が残る。4・5は同一個体とみられ、小突起を持ちJ字状的な幅広い区画内は磨消しと渦巻状文が施される。6は刻みを伴う隆線が波頂部から垂下し頸部を巡る。7はJ字状区画がされた胴部破片である。

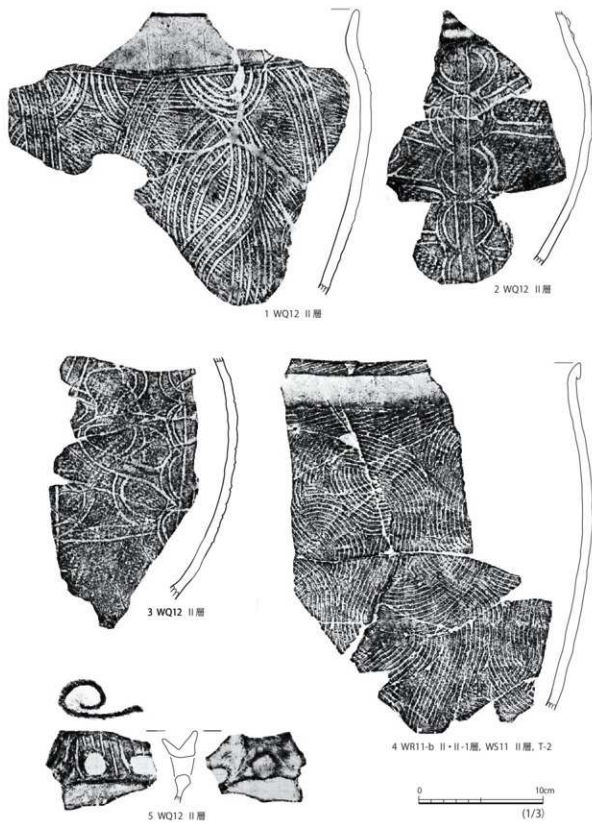
第175図と第176図1は倒卵状の・J字状区画が描かれる。第175図1は第167図1に類似した器形・文様構成になるとみられ、3個1組の円形刺突が配されている。第175図2・6は2個1対の縦位の円形刺突が単位部分に施される。第175図4は鉤針状文区画が描かれ、緩い渦巻状文が区画に配される。第175図5～7・第176図1～3は倒卵状的な文様区画に鎖状沈線・蛇行沈線・連続する緩い渦巻状文が付随し、第176図3は緩い渦巻状文が磨消し区画内に多く配されている。

第176図4は第176図1～3に類似した器形になるとみられ、方形基調の区画が描かれ、U字状文列が垂下する。

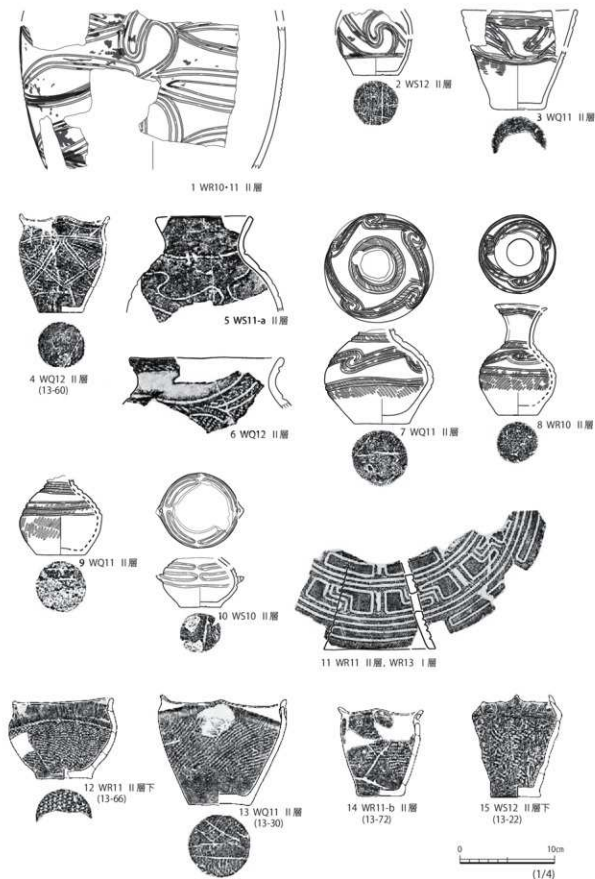
第177図1・2は曲線的・波状基調の区画が描かれる。2は沈線間隔が平行で、3は向かい合うノ字



第181圖 第2群7類土器(4)

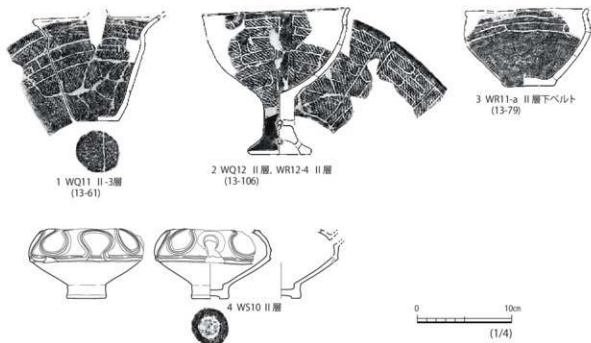


第182図 第2群7類土器(5)



第 183 図 第 2 群 8 類土器 (1)





第184図 第2群8類土器(2)

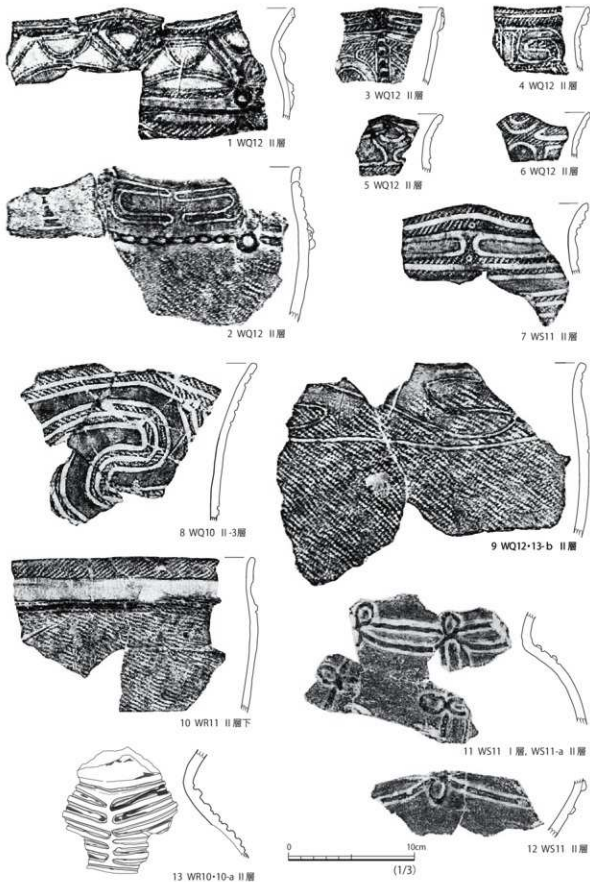
状文の間に楕円文が描かれ、その下位から蛇行沈線が垂下する。4は口縁に沿って円形刺突が巡り、ボタン状貼付けを起点とし卵状の区画沈線内に分割するような縦線を描く。5は倒卵状の文様下位の構成がみられる。地文は、第175図2・3・第176図2・3・第177図1は襷糸文、第174図4・5は0段多条、それ以外は無節や単節の縄で施文され、区画内の磨消しはいずれも不規則である。

7類・・・蕨手状文・多重沈線で描かれるもの。網取Ⅱ式、堀之内1・2式土器の要素がみられる。  
(第178～182図、図版67・68)

第178図1・2は類似した器形で小突起を有する深鉢である。1は平行沈線で口縁から胴下部に及ぶ波状を描き、突起下の逆U字状となった区画内に鎖状沈線文が垂下する。2は小型で、頸部に不規則に巡る平行沈線と垂下する3本の弧状沈線が描かれる。3は刺突を伴う4単位の突起を有する深鉢で、突起部分にボタン状貼付けをし、沈線を伴う弧状陰線で頸部区画上のボタン状貼付けと結ぶ。胴部には貼付けを起点として卵状の区画文が描かれ、区画内には列線が垂下する。この単位文様間には蕨手状文が描かれ胴下部との区画となる波頭文に繋がる。

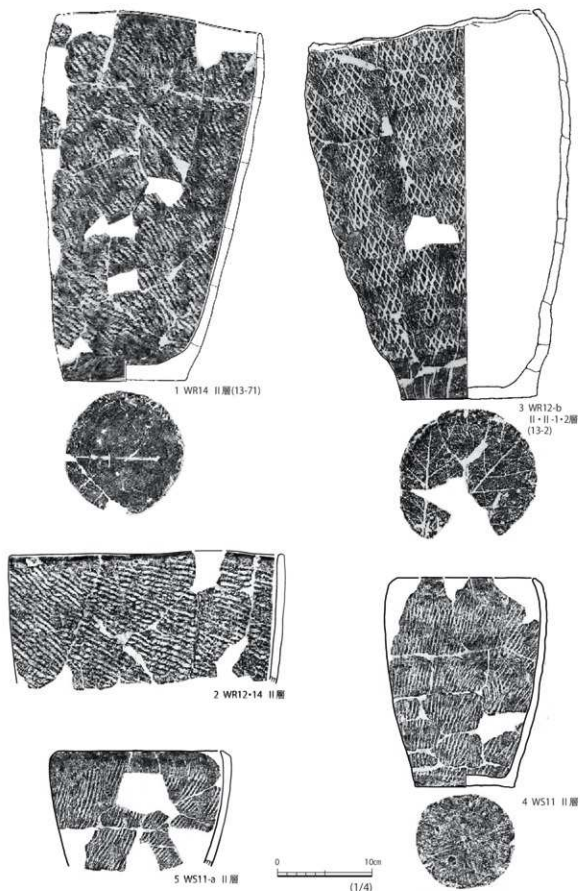
第179図1は孔のある3単位の波状線を呈する深鉢で、波頂部の孔と頸部区画上の円形刺突とを太く浅い弧状沈線で結ぶ。胴部には6単位の蕨手状文が描かれる。第178図3の区画内は不規則な磨消しがされるが、第179図1は磨消しはされていない。第179図2は2個1対の突起の直下に円形・楕円形の孔3個が施される深鉢で、胴部には4～3本1組の沈線で縦・横・斜位・弧状・渦巻状の施文をし、一部に梯子状の文様もみられる。

第180図1は斜・横・縦位に平行線が伸びて交差し、交差部分に半円状の文様が配される深鉢、2は不規則な斜位の沈線が交差し波頂部に孔を持つ小型の深鉢である。3は3単位の波状線で波状部に円形・楕円形の孔5個と上下一対の刺突が施される鉢で、胴部には4本1組の弧状・縦位沈線が6単位で施文される。4は注口土器で、頸部に多重の平行沈線が巡り、胴部は斜位基調の多重平行沈線が描かれ、沈線内には縄文が残る。注口部上部には橋状突起と渦巻状文が描かれた突起が配される。



第185図 第2群8類土器(3)

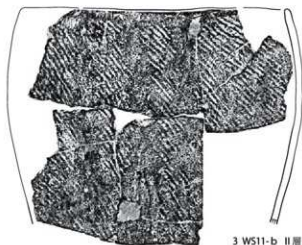




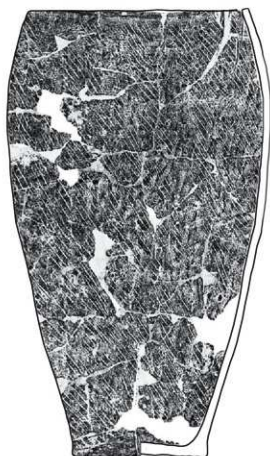
第186図 第2群9類土器(1)



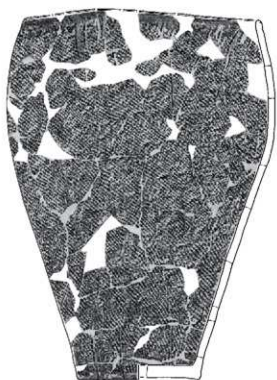
1 WR14 II層



3 WS11-b II層



2 WR12-c-12.5 II-II-1層,  
WR14 II層, 表探

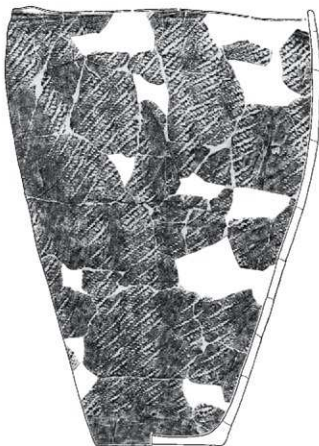


4 WR12 I層,  
WR12~10 II層, T-3西  
(13-25)

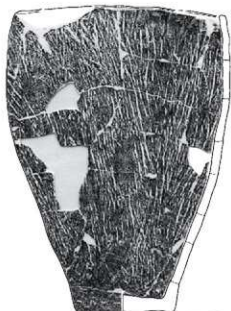


(1/4)

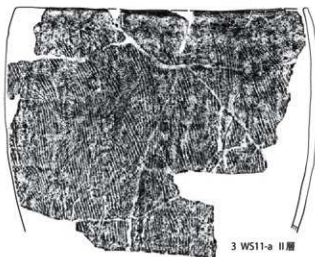
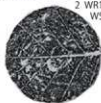
第187図 第2群9類土器(2)



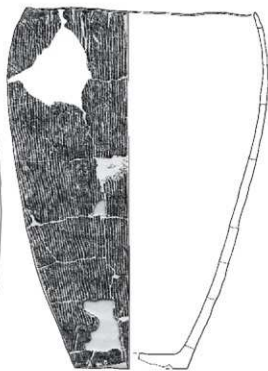
1 WR11-b-c-d II-1層(13-77)



2 WR11-d II-1層,  
WS11-a-c II-II-1層  
(13-65)

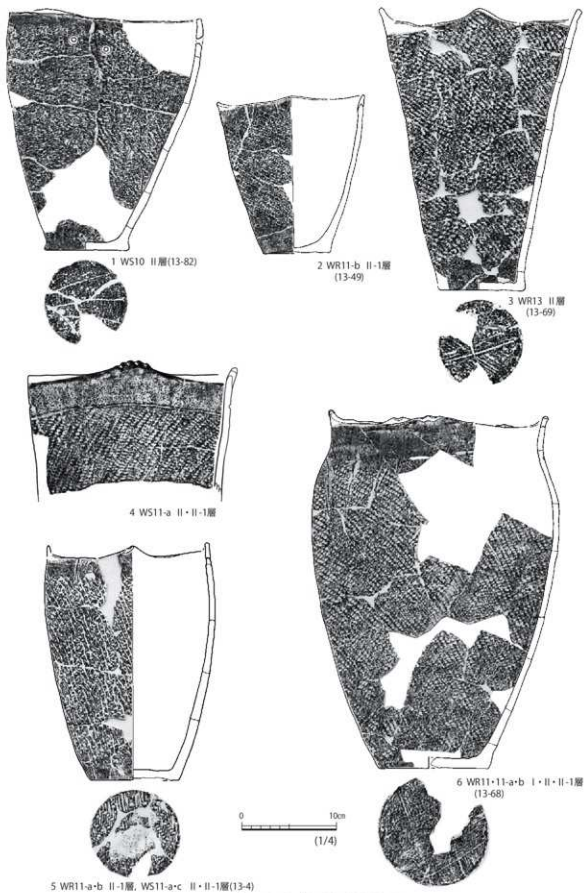


3 WS11-a II層

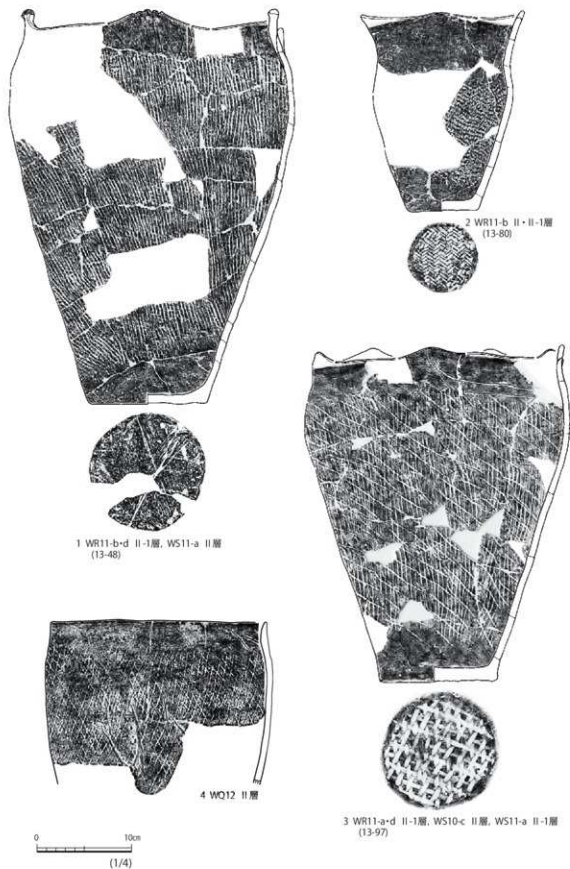


4 WR11-a-b II-II-1層  
(13-23)

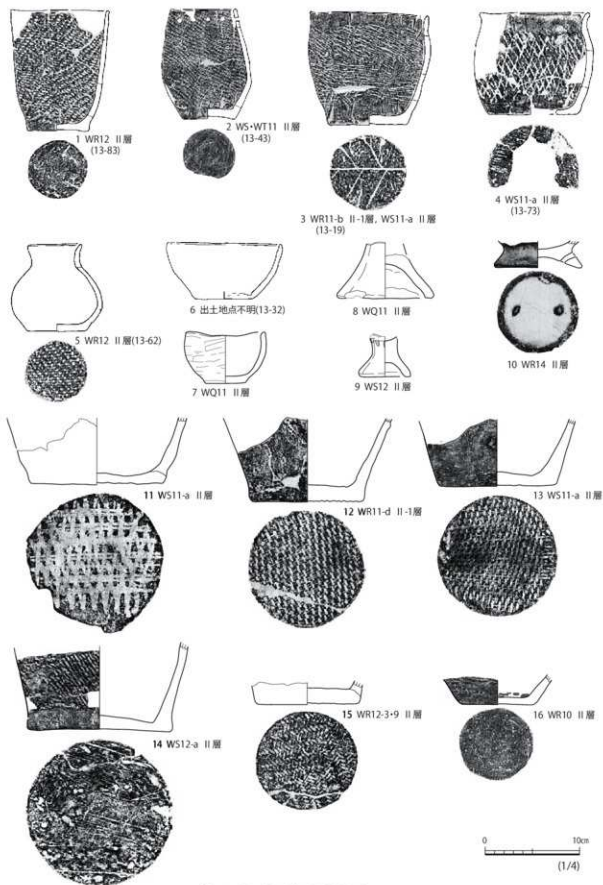
第188圖 第2群9類土器(3)



第189図 第2群9類土器(4)

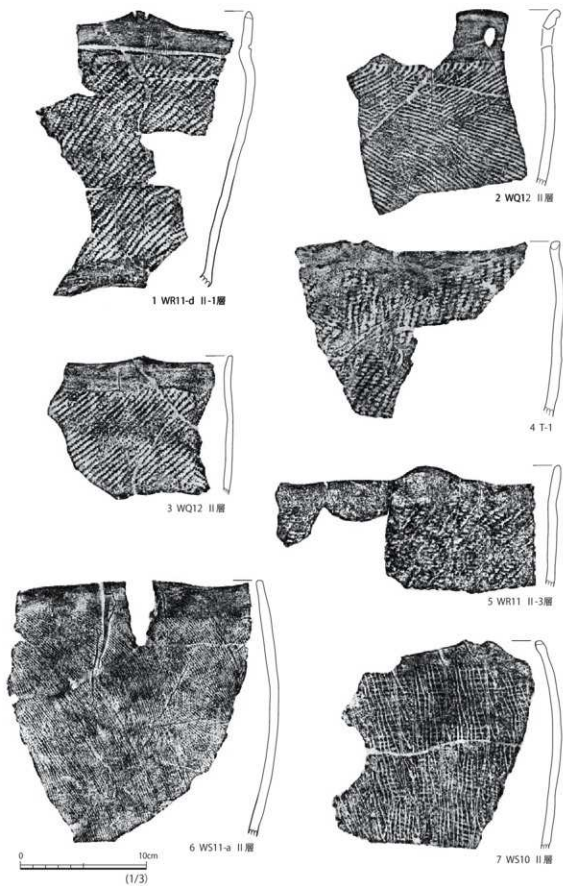


第190圖 第2群9類土器(5)

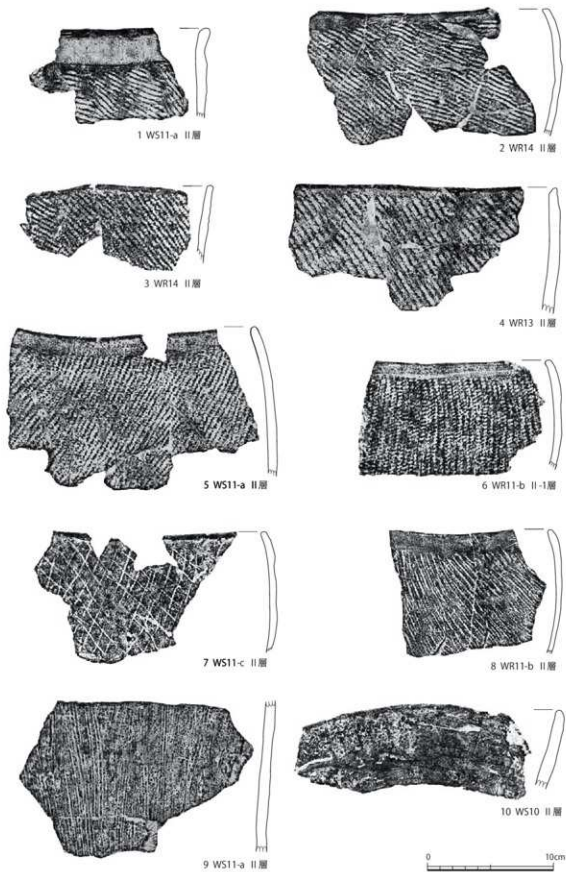


第191図 第2群9類土器(6)



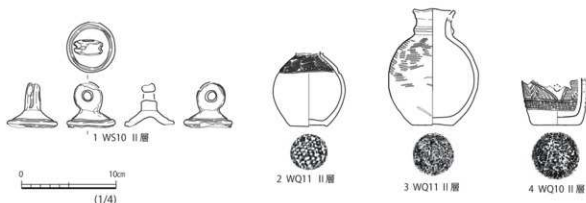


第192図 第2群9類土器(7)



第193図 第2群9類土器(8)





第194図 第3群土器

第181・182図は深鉢の口縁部・胴部破片である。

第181図1は口縁が広がる器形で、孔のある突起と直下にある円形刺突から向かい合う弧状沈線が垂下する。2は口縁の無文部分に刻みを伴う隆線が貼付けられ、3本1組の沈線が頸部と胴部に施文される。3は口縁に巡る隆線上にある円形刺突を起点として蛇行する隆線が体部に施される。4は波頂部の渦巻状沈線文を起点とし、4～5本1組の平行沈線が弧状に施される。5は波頂部に浅い円形刺突を浅い沈線で繋いだ単位文様が施され、胴部には垂下する列線と縦手状文が描かれる。6は曲線的・渦巻状の沈線文が垂下し、区画内を不規則に磨消している。

第182図1は地文となる燃糸文を施文後、4～5本1組の平行沈線で半円状・弧状・鎖状を描く。2・3は同一個体とみられ、縄文施文後に連続した円状文と縦位の平行沈線で単位部分に串団子状的な文様を描き、この文様を繋ぐように横・斜位・曲線的な平行沈線が描かれる。4は細い無節の燃糸文で半円を重ねた文様を器面全体に施す。巻きの単位は等間隔に14本とみられる。5は突起部分で口唇部は渦巻状を呈する。孔を持ち縦位に細い沈線列が施文される。

8類・・・平行沈線、曲線的・幾何学的な平行沈線で描かれるもの。十腰内1式の要素がみられる。

(第183～185図、図版68・69)

第183図1・2は3本1組の平行沈線で文様を描き、部分的に赤色顔料が付着する。1は横位の弧状文と波状文が描かれ、2は入組波状文が描かれる。3・4は小型の深鉢で、3は斜位に延びる沈線が山形状を呈し、4は格子状の施文となる。5～10は壺で、7～9は長頸となる。5は横位に楕円状文が展開し、器面には赤色顔料が付着する。6は口縁部と頸部下に原体圧痕がされ、胴部には地文施文後に平行沈線と円状文が描かれる。7～9は平行沈線・入組波状文区画内に縄文が残る。10は無地文に横位の長楕円状文が重複し、胴部には孔のある突起が2箇所つき、内面には茶褐色の付着物がみられる。11は台付鉢の台部分で、平行沈線で幾何学的な方形区画を描き、区画内には縄文が残る。方形部分の一部が削り貫かれ、2段で4単位の透かしとなる。12～15は小型の半粗製土器で、口縁部は無文帯となる。12は口縁との区画に原体圧痕が巡り、13は波状線を呈する鉢である。14は4と類似した器形の深鉢で補修孔があり、15は突起をもち口縁が内傾する深鉢である。

第184図1は口縁が外傾する器形の小型深鉢で、平行沈線間にクランク状文が施される。2の台付鉢は、重複する方形状文とクランク状文を描き、区画内には不規則に縄文が残る。台部分には孔があき透かし状となる。3は口縁を3本の平行沈線が巡り一部縦位の沈線が配される浅鉢である。4は台付の注口土器で、体部には隆線で上下対照的に曲線的な文様が描かれる。

第185図1～10は深鉢口縁部破片である。1は波状線に沿った隆線上に縄文が施文され、隆線や平行沈線が斜・横位、横位弧状に配され、接合部にはボタン状貼付けや円形刺突が施される。2は無文と

なる口縁部に向かい合うコ字状の文様が描かれ、頸部には鎖状隆線とボタン状貼付けがされる。3・4は口縁部に曲線的な文様が描かれ、3は単位となる部分に縦位の爪形刺突列が施される。5は波頂部下に円形刺突とY字状沈線が描かれ、6は波頂部に二重の半円文と幾何学的な沈線区画がされる。7は方形状区画外に縄文が残り円形刺突が施され、8は3本1組で曲線的な文様が描かれ接合部に円形刺突がされる。9は口縁部に波頭状文が描かれ不規則な磨消しがされている。10は頸部区画に原体圧痕を伴った隆線が走り、口縁部と胴部で原体の回転方向が変わる。11・12は同一個体とみられる壺の破片で、リボン状の隆線が頸部から胴下部に配される。13は多重する沈線が浮線状を作り出している壺の破片である。11～13の器面には赤色顔料が付着している。

#### 9類・・・粗製土器・底部破片をまとめた。(第186～193図、図版69～73)

口縁部は平縁と波状縁があり、歪みが激しいものもある。原体は無節・単節縄文、燃糸文、網目状燃糸文、無文、櫛目状文が施され、底部には木葉痕、笹痕、網代痕がみられる。

第186図・第187図1・2は長胴の器形を呈する深鉢である。第186図1・2は口縁が直立気味に立ち上がり、186図3～5・第187図1・2は内傾する。第186図4・5は口唇が外削ぎ状になっている。第187図3・4・第188図・第189図6・190図1・3は胴上部に膨らみを持つ器形、第189図1～5は口縁がほぼ直線的に外傾する器形の深鉢である。第189図1は補修孔があり、第190図3は波頂部から無文帯となる頸部に沈線が巡る。

第191図1～7は無文・地文のみの小型の土器である。1・2は長胴形の深鉢、3・4は鉢である。5は無文の壺、6・7は無文の浅鉢で、7は工具の調整痕がみられる。

第191図8～16は底部破片である。8～10は台付鉢の台部分で、9には浅い刻み目がみられる。10は台部分の側面に対となる貫通孔がある。11～16は深鉢もしくは鉢の底部で、11～13・15は網代、14は笹痕とみられる。前述までの土器底部にも、網代・笹・木葉痕があり可能な限り掲載した。16の内面には黒色タール状の付着物がみられる。

第192図・第193図1～9は深鉢の口縁部・胴部、10は鉢の口縁部の破片である。

第192図は波状口縁を呈し口縁部が無文帯となる。1は刻みがされた波頂部をもち、頸部に区画沈線が巡る。2は口縁に貫通孔が施され、胴部地文の一段目が横回転、以下が縦・斜め回転となり一部羽状を呈する。3・4は単節、5は付加条の縄文を地文とする。6は無節の非常に細い原体を使用した燃糸文、7は横位に何らかの施文をした後、縦位の燃糸文を施し格子状を呈する。

第193図1～8は平縁を呈する。1・2は無節、3～5は単節縄文、6・8は燃糸文、7は網目状燃糸文を地文としている。9はハケメ状沈線、10は無文である。

#### 第3群土器 縄文時代後期中葉の土器を一括した。遺跡全体の出土土器の総数としては少ない。

(第194図、図版73)

第194図1は深鉢裝飾突起部分の破片で、頂部が孔のある筒状となり、中空の作りである。2・3は肩部がなだらかな器形の壺である。2は胴上部の平行沈線区画内に縄文と列点を施し、3は頸部下に隆線が巡る。4は、沈線区画内に羽状縄文が施され、底部との区画に刻み列を伴う平行沈線が巡る。内面の調整は非常に粗く、胴下部に孔が1箇所あり、単孔土器とみられる。

土製品

ミニチュア土器 (第 195 図 1・2、図版 74)

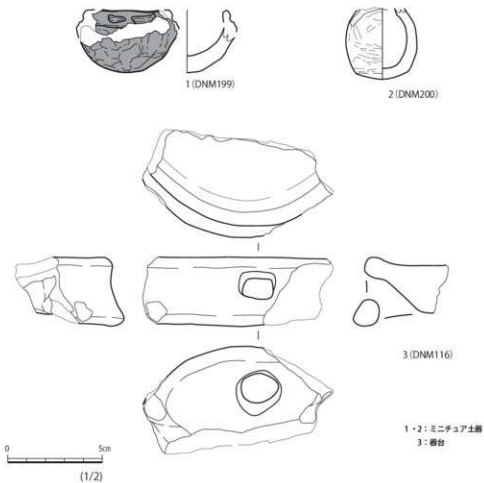
1 は碗形、2 は壺形である。

器台 (第 195 図 3、図版 74)

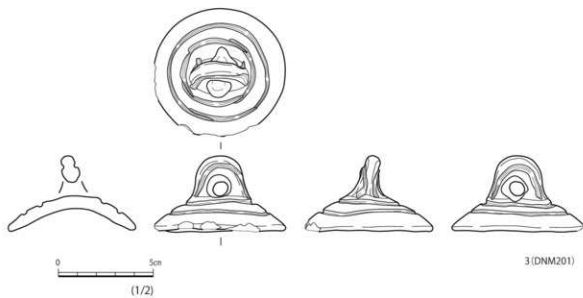
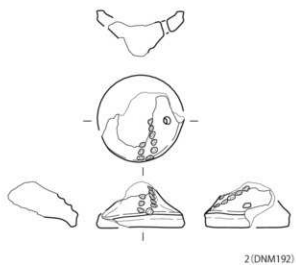
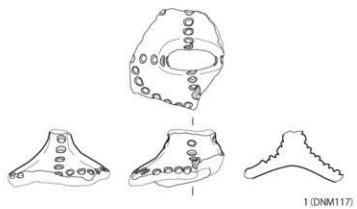
滑車状と推定される。側面から底面に向かって穿孔される。

蓋 (第 196 図、図版 74)

1・2 はツマミ部に穿孔がみられず、列点文が施されている。3 はツマミ部に穿孔があり刻線文が見られる。



第 195 図 ミニチュア土器・器台



第 196 图 盖

腕輪 (第 197 図、図版 74)

1は横走する刻線と列点によって器面を装飾している。2は窓枠状の文様を刻線と列点で描いている。

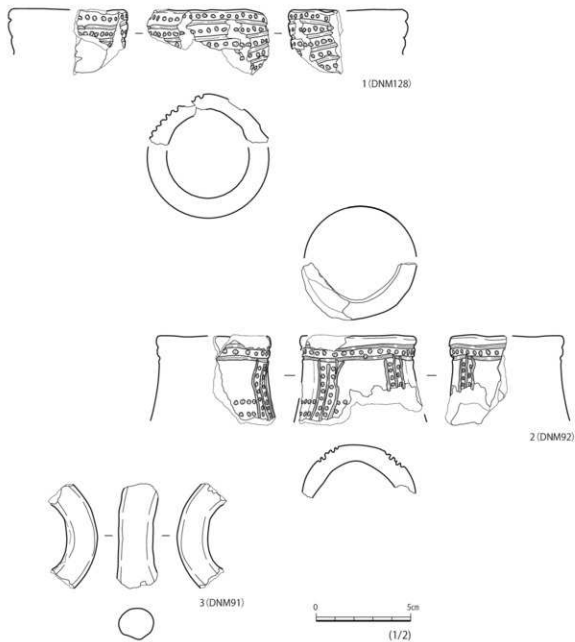
3は環状で無文と思われる。

耳飾 (第 198 図、図版 74)

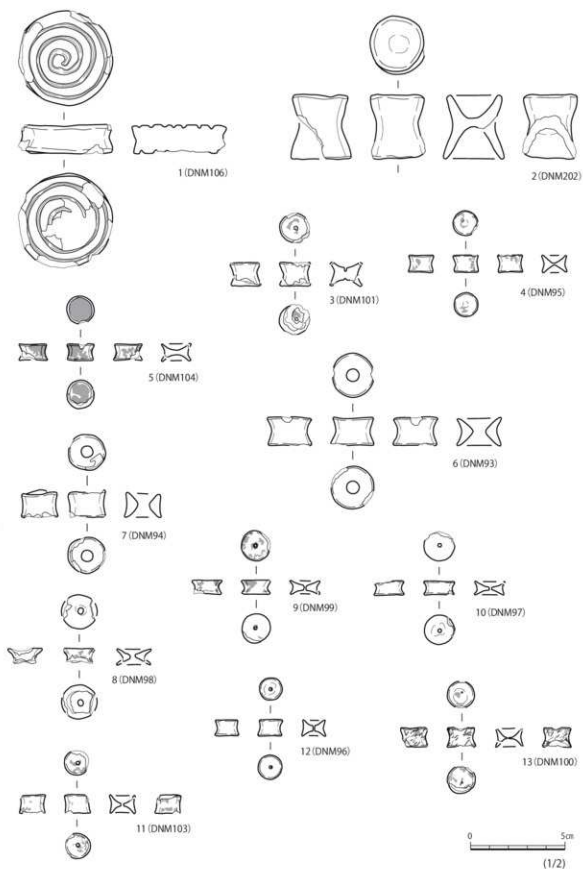
1は表裏面に渦状刻線文がみられる。2は糸巻形である。3～13は鼓型で小形である。中央が穿孔されているものといないものがある。

鐸形土製品 (第 199 図 1～3、図版 74)

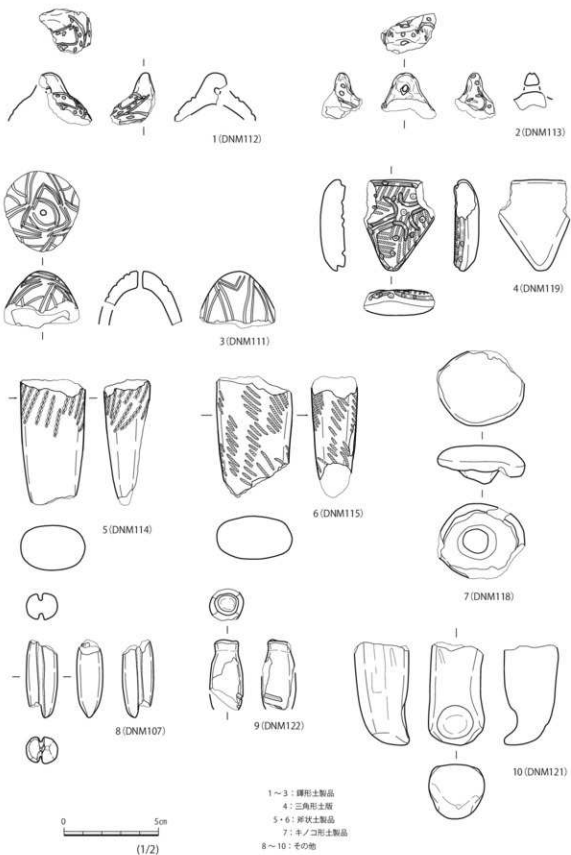
1・2ともに鈕部分の破片である。3は鐸形に近い楕円中空状の土製品である。刻線文と頂部に穿孔



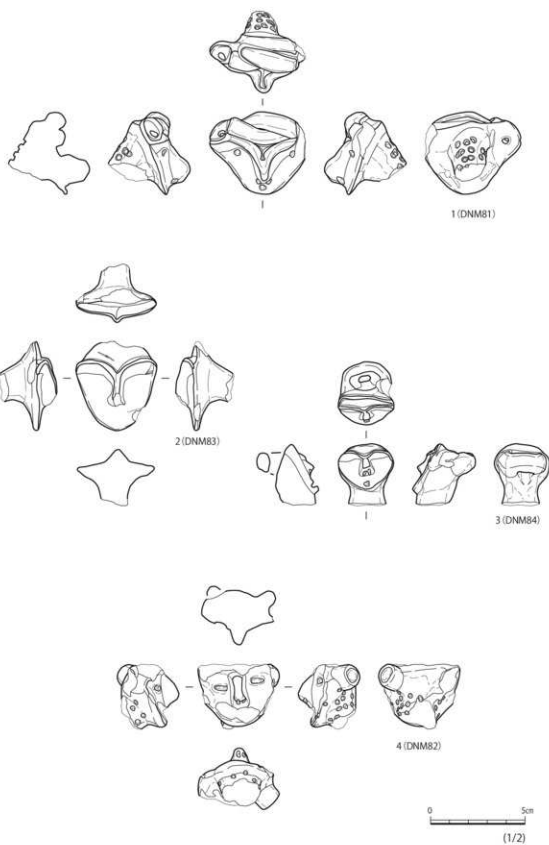
第 197 図 腕輪



第 198 図 耳飾

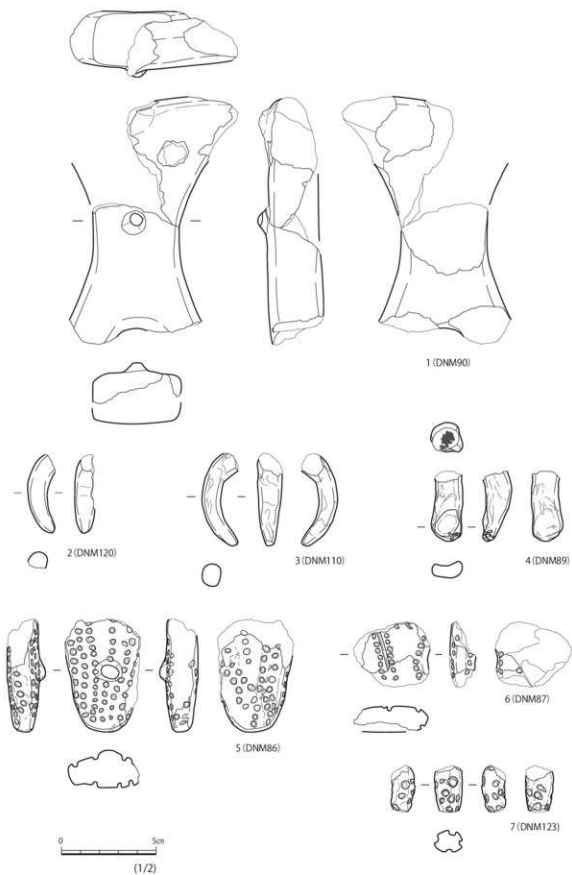


第 199 図 鐮形土製品・三角形土版・斧状土製品・キノコ形土製品 他



第 200 图 土偶 (1)





第201図 土偶(2)

がみられる。土鈴の破片の可能性ある。

三角形土版 (第 199 図 4、図版 74)

表面に刻線、円形刺突文と縄文がみられる。

斧状土製品 (第 199 図 5・6、図版 74)

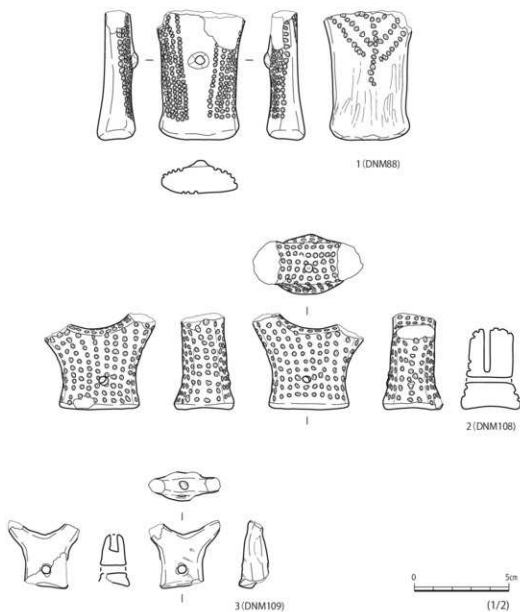
全面に縄文が見られる。断面形状から斧状土製品の破片と判断した。

キノコ形土製品 (第 199 図 7、図版 74)

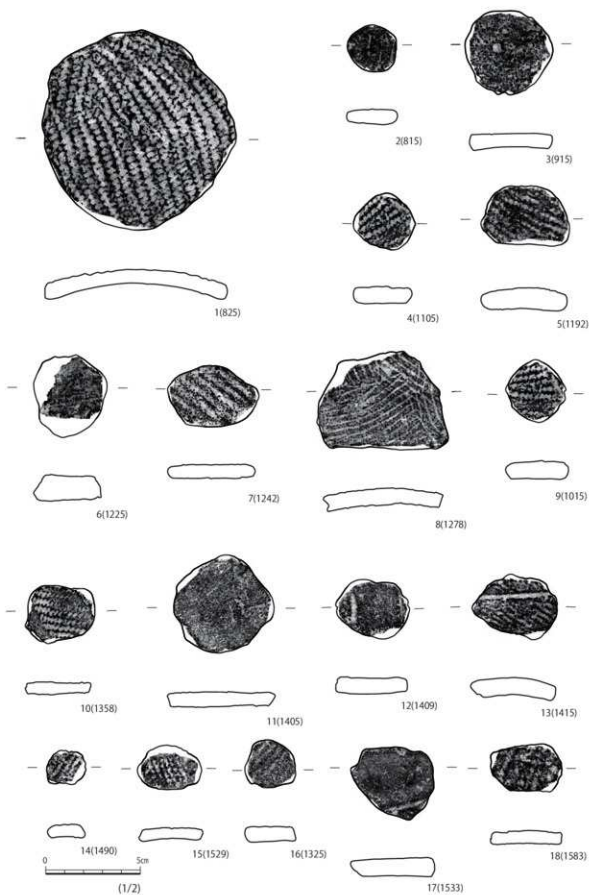
その形状からキノコ形土製品の傘部と判断した。

その他土製品 (第 199 図 8～10、図版 74)

8 は表裏面に溝が刻まれ、紐により結束されたようである。土鍾であろうか。9 の形状は 8 に似るが、溝は見られない。10 も断面が角柱状となるが、下端部が幅みあげられ一部突出する。



第 202 図 土偶 (3)



第 203 図 土器片製円盤

#### 土偶 (第 200～202 図、図版 75)

第 200 図は、すべて頭部の破片である。1 は Y 字状に眉と鼻を立体化し、頭部を鉢巻状に作り、目と口は小さく円形刺突で表している。2・3 も Y 字状に眉と鼻を作り出しているが、特に目の表現はない。3 は円形刺突で口を表わし、後頭部は髷を表わすのか円環状に作出される。4 はやや写実的な顔の表現がみられる。

第 201 図 1 は頭部と両脚を欠く、表面に 2ヶ所の突起が残る。2～4 は胸部の破片である。5～7 は胴部の破片と推定される。5 には 1ヶ所突起がみられる。いずれも列点文が施されている。

第 202 図は頭部表現がなく外観が T・Y 形を呈すると推定される土偶である。

1 は下半部破片である。表面中央に円形突起があり、その両側に 4～6 列の列点文が施され、裏面綾杉状の文様が列点で描かれている。2 は左右に広げた端部を欠く、全面に列点文が施される。上面中央と基部中央付近に穿孔がみられる。基部の孔は、表面から裏面へ貫通している。3 は左右端部と基部を欠く。無文であるが上面中央が穿孔されている。

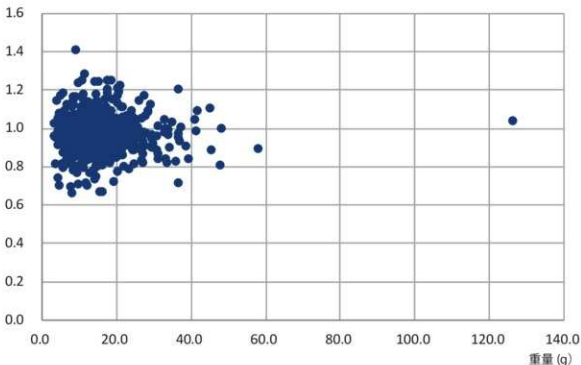
#### 土器片製円盤 (第 203 図、図表 1)

7 区から出土した土器片製円盤は、944 点を数える。そのうち半壊品を除く 686 点について、長軸を短軸で除した正円比と重量の属性分布を図表 1 に示した。

正円比は 0.9～1.2 に収束し、ほぼ円形に整形されている。重量は、おおよそ 10～20g に収まり 25g を越えるものは少ない。整形と重量の均質性に機能的意味があるようであるが、その用途は不明である。

掲載した資料は、最大のものとは最小のもの、正円に近いもの、半円形のものなどである。

長さ/幅



図表 1 7 区出土土器片製円盤の属性分布

## 石器

### 石鏃 (第 204 図、図版 75)

1～6の有茎と7～23無茎に分けられる。24・25は未成品と思われる。

1・2は茎部の挟入が深いもの。3・4は基部挟入がみられないもの。5は身部が縦長に作られたものである。6は茎と身部の境が不明瞭で菱形の形状を呈する。

無茎のものは、基部中央の挟り込みの深さによって、7～11の浅いもの、12～17のやや深いもの、18～22の深い挟り込みによって基部左右が燕尾状になるものがみられる。23は挿器の可能性もあるが、刃部角度が鋭角であるため基部が突出した円基鏃とする。

### 石錐 (第 205 図 1～6、図版 75)

1・2は管状の錐部を呈する。3～5は摘みから錐部まで連続する形状を呈する。6は錐部の破片である。

### 石匙 (第 205 図 7～11、図版 76)

7～10は全て縦型の石匙である。いずれも両側刃部を主として入念な調整が施されている。

11は摘み部を除く全周を刃部とする円形の石匙である。

### 挿器 (第 205 図 12～16・第 206 図 1・2、図版 76)

形状及び刃部角度などから挿器とした。12・13は全周を刃部としている。12は円形、13は三角形の形状を呈する。14は方形の形状を呈し、上下側縁を刃部とする。15は楕円形の形状を呈し長辺両側縁を刃部とする。16は三角形の形状を呈し、底辺を刃部とし入念な調整が施されている。

第 206 図 1・2は逆三角形を呈する。1は表面右側縁を刃部とし、2は両側縁を刃部とする。

### 石髻 (第 206 図 3、図版 76)

全面を平滑に研磨している。斧とするには細身で、身部の厚さに変化がない。

### 磨製石斧 (第 207～210 図、図版 76・77)

第 207 図は、完形あるいは全形を推定できるものである。第 208 図と第 209 図 1～3は先端部の破片と破損部を再調整後使用したものである。第 209 図 4～7は基部破片である。

第 210 図は大形の石斧である。2は実用品としては厚みがなく、儀器的可能性がある。

### 敲石 (第 211 図、図版 77)

1は上下端部と右側縁の上部に敲打痕がみられる。2は上下端部に敲打痕がみられる。

### 磨石 (第 212・213 図、図版 78)

1は全面に研磨痕がみられる。2・3は扁平で表面に研磨痕がみられる。

### 砥石 (第 214 図、図版 78)

1は表裏面ともに研磨され、その中に研磨による溝が刻まれている。2は数条の研磨による溝が観察される。

### 凹石 (第 215 図、図版 78)

いずれかの面に凹がみられるものを一括した。3は全面を研磨されている。

### 礫器 (第 216 図 1～4、図版 78～79)

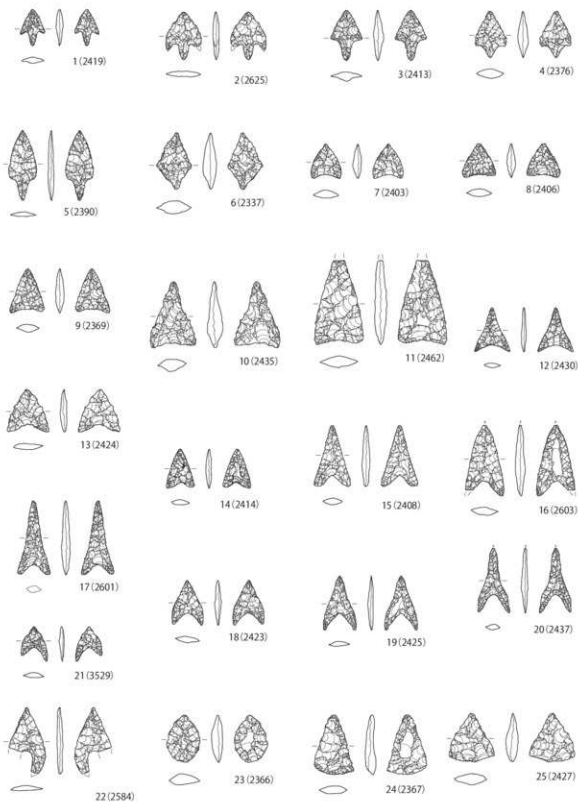
円形に近く掌に収まりの良い石材の一部を粗く調整し利器としている。挿器あるいは剤器的な用途が推定される。

### 石皿 (第 216 図 5・第 217～219 図、図版 79・80)

全て破片である。第 216 図 5 と第 217 図は底面が平らなもの、第 218 図と第 219 図 1 は底面に脚部を作り出したもの、2 は大形の据え置きしたものの破片と推定した。

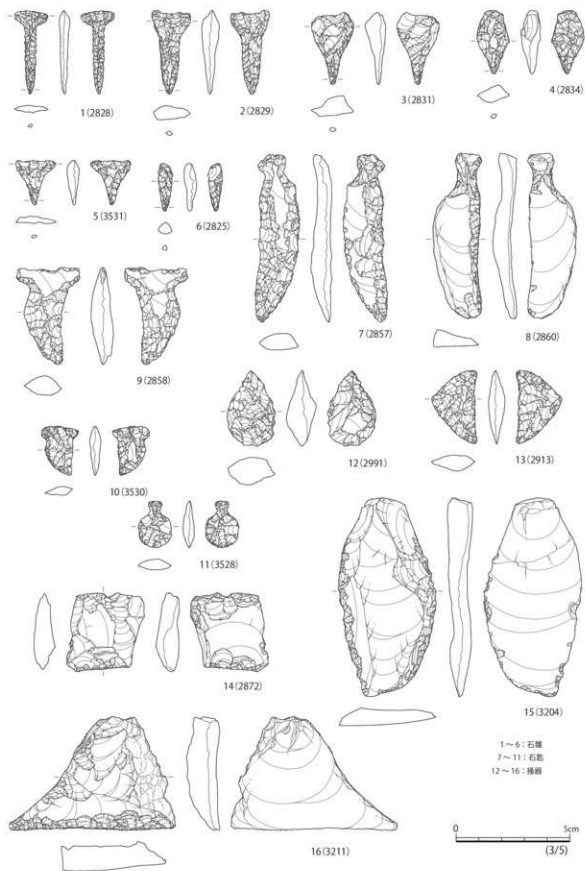
### 石棒 (第 220 図、図版 81)

第 220 図は 1～4 は石棒の破片である。1 は楕状頭部に刻線による方形区画文が見られ、その直下に一条のタガが巡る。2 は肥大した頭部上面が窪むようであるが、摩滅が著しく詳細は不明である。



0 5cm  
(3/5)

第 204 図 石鏃



第 205 図 石錐・石匙・搔器 (1)

3は横走する無数の刻線がみられる。断面円形の石棒端部の表面破片と判断した。

4は大型石棒の破片である。断面が隅丸方形を呈し、柱状剥離した自然石を整形したと思われる。

淨子(第221図1、図版81)

三角錐状に整形し、上部に1ヶ所貫通孔を設けている。

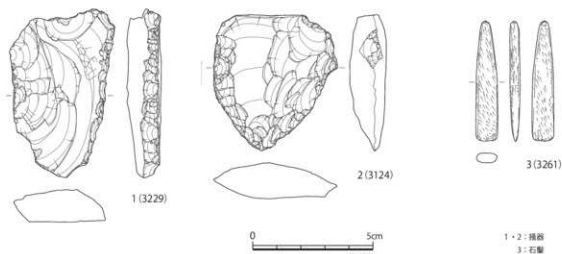
### 石製品

装身具(第221図2、図版81)

扁平で角の丸い形状を呈し、表面に直線の文様と曲線の文様を刻む。両端に貫通孔があり紐で装着したと思われる。

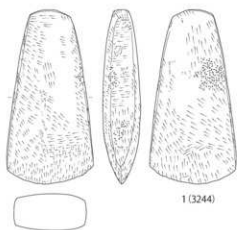
石製円盤(第221図3～5、図版81)

扁平な素材の周縁を打ち欠き、円形に整形している。

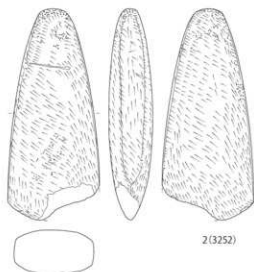


第206図 揺器(2)・石盤

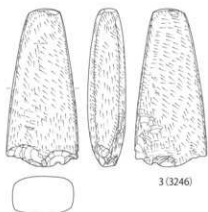




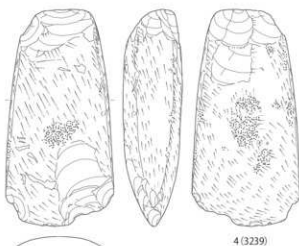
1 (3244)



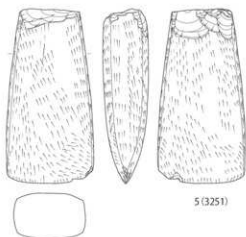
2 (3252)



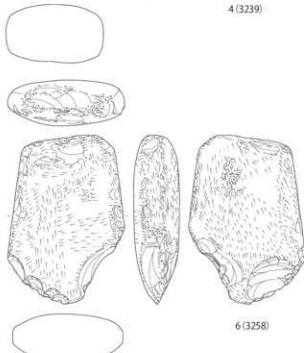
3 (3246)



4 (3239)



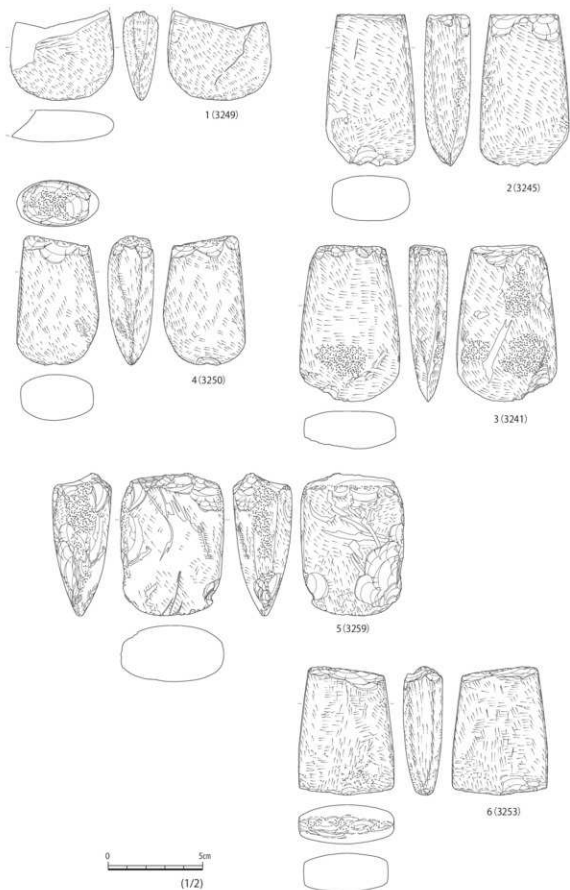
5 (3251)



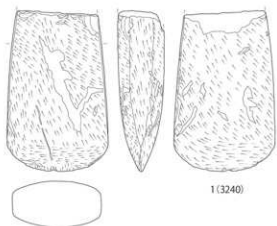
6 (3258)



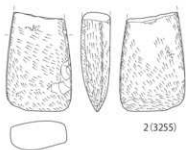
第 207 図 磨製石斧 (1)



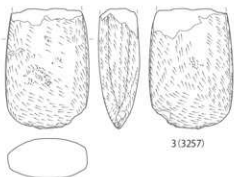
第 208 图 磨製石斧 (2)



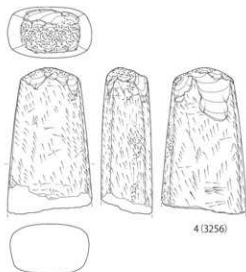
1 (3240)



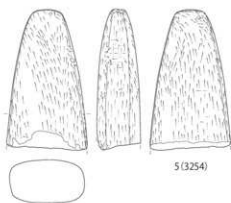
2 (3255)



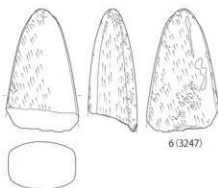
3 (3257)



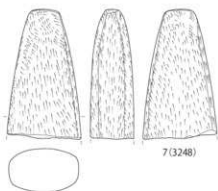
4 (3256)



5 (3254)



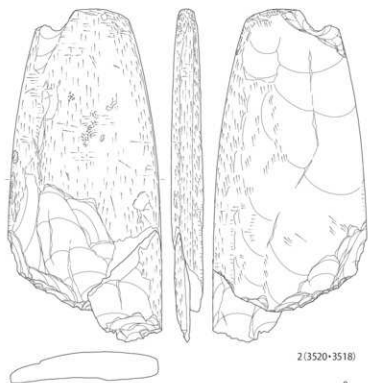
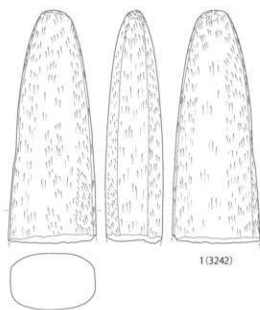
6 (3247)



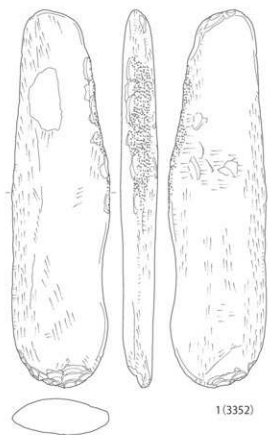
7 (3248)



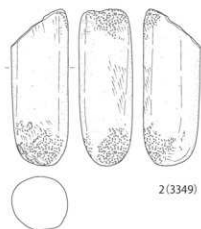
第 209 図 磨製石斧 (3)



第 210 図 磨製石斧 (4)



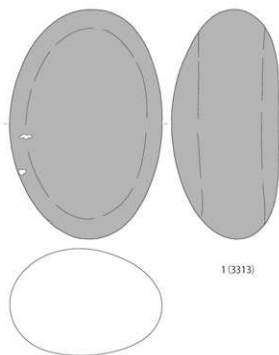
1 (3352)



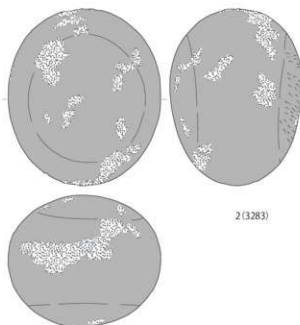
2 (3349)



第 211 図 敲石



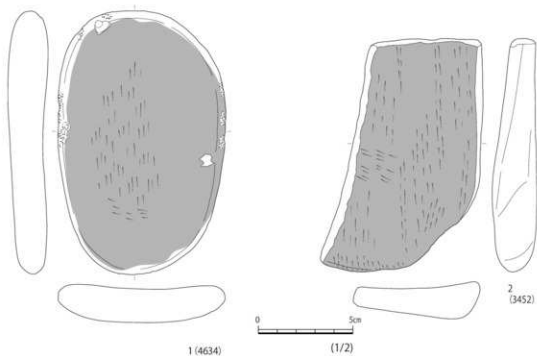
1 (3313)



2 (3283)



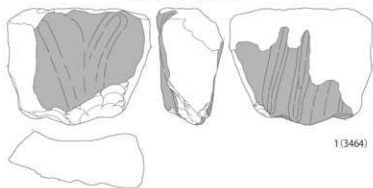
第 212 図 磨石 (1)



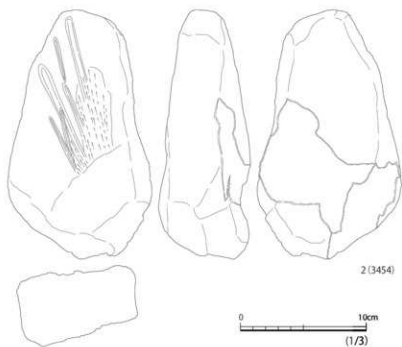
1 (4634)

(1/2)

第 213 図 磨石 (2)



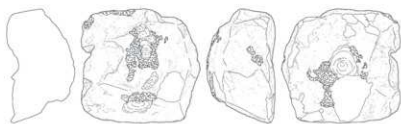
1 (3464)



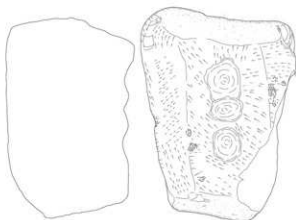
2 (3454)

(1/3)

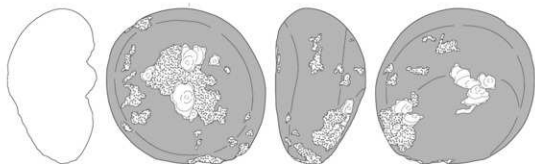
第 214 図 砥石



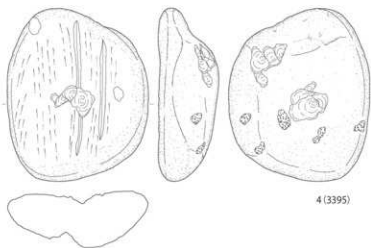
1 (3374)



2 (3427)



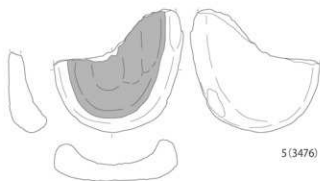
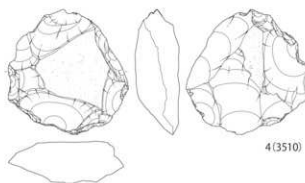
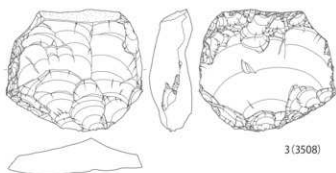
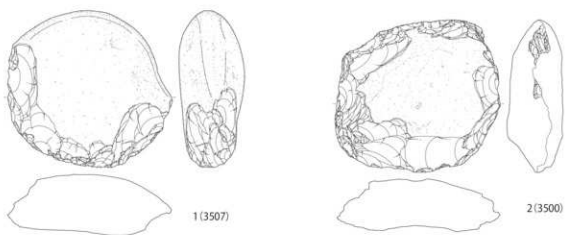
3 (3391)



4 (3395)

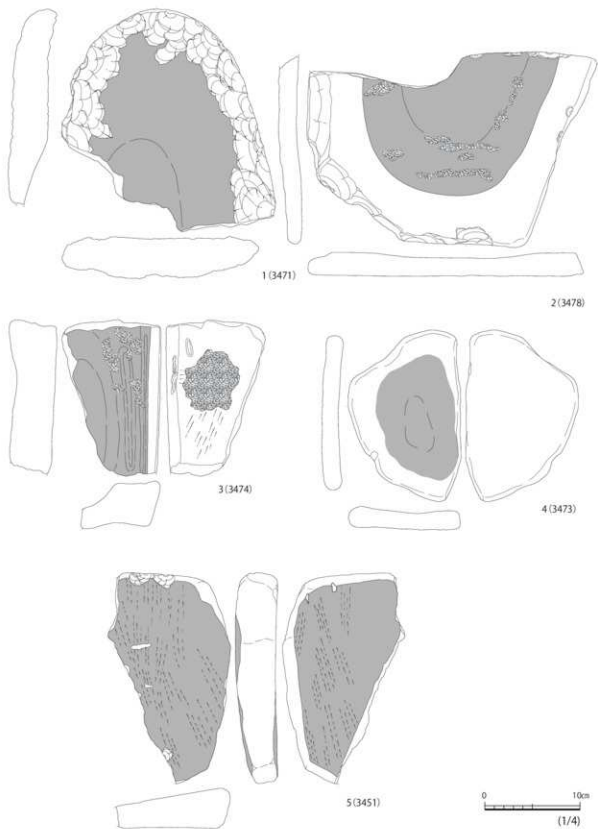


第 215 图 凹石

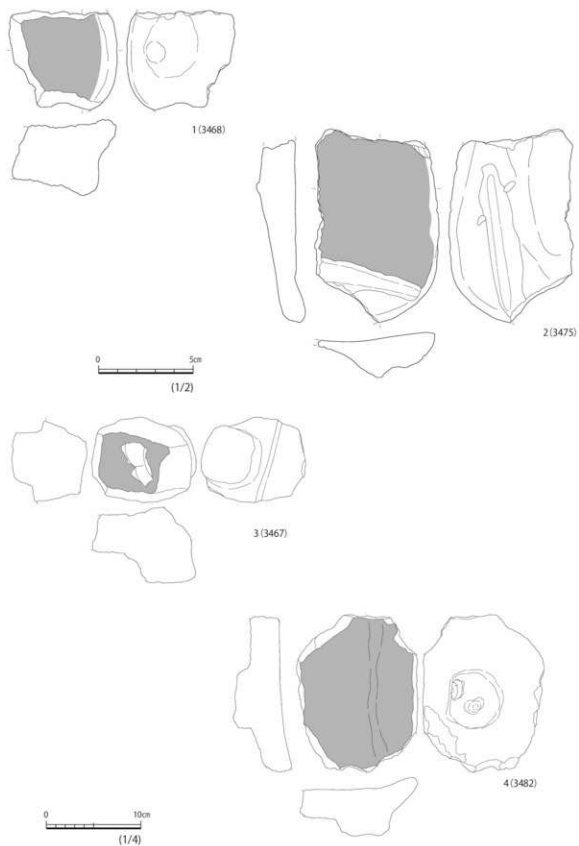


第 216 図 礫器・石皿 (1)

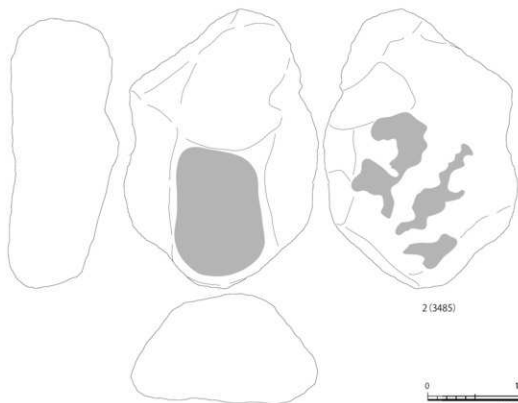
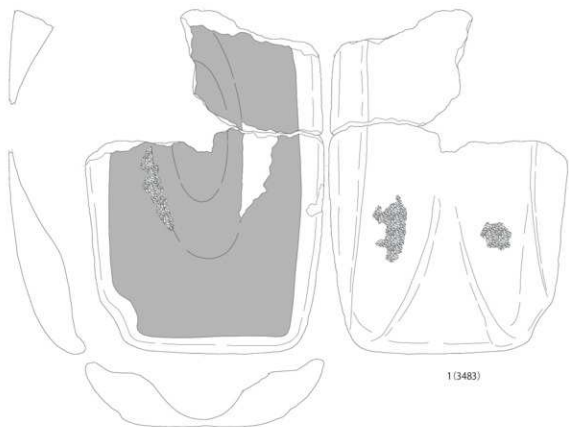




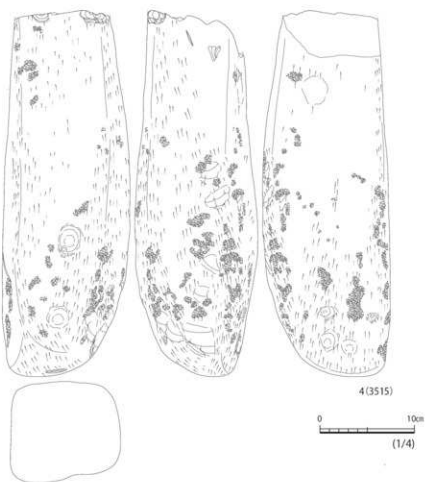
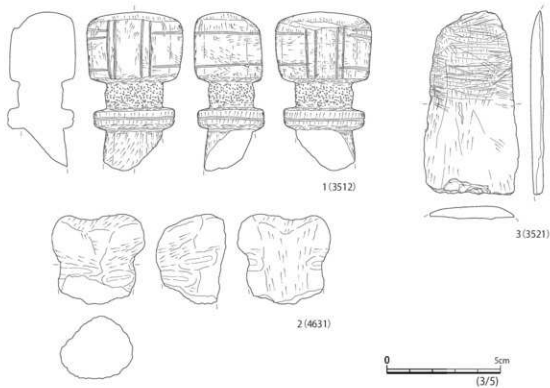
第217図 石皿(2)



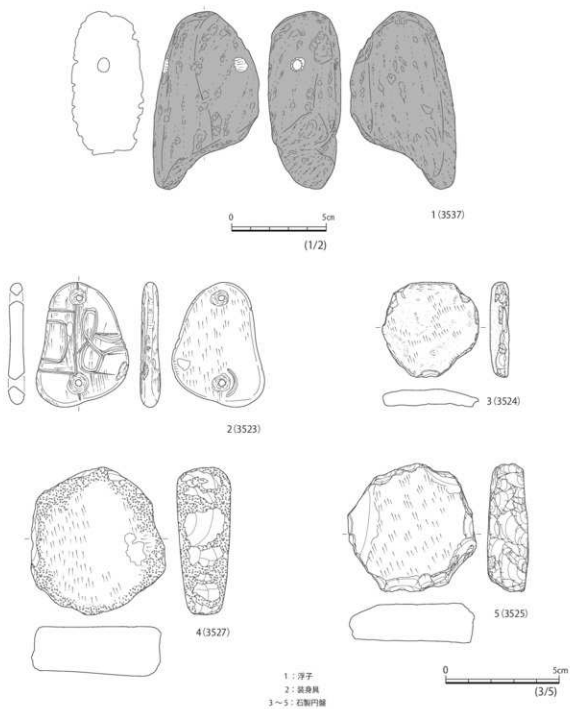
第218図 石皿(3)



第219図 石皿(4)



第220图 石棒



第 221 図 浮子・装身具・石製円盤

## 第5節 7区出土の動物遺存体

### 1. 分析資料

2013年度(平成25年度)の堂の前貝塚の発掘調査では、7区より多くの動物遺存体が出土した。本章ではこれらの分析結果を報告する。2012年度(平成24年度)におこなわれた発掘調査では、1～3区より動物遺存体が出土しており、その結果については昨年度に報告をおこなった(松崎・山崎2018)。今回分析した7区では、南東端において貝層が検出され、保存状態の良い資料が多く含まれていた。動物遺存体は発掘時に目視で取り上げられた現場採集資料と、貝層サンプルに分けられる。貝層サンプルは5mm目のふるいを用いて水洗選別がおこなわれ、微細な魚骨等が回収されている。資料の帰属時期は、縄文時代中期後葉～後期前葉(大木9～門前1b式)である。

種同定には奈良文化財研究所の環境考古学研究室が所蔵する現生骨格標本を使用し、形態的特徴を比較観察した。分析対象とした資料は、原則として腹足綱(巻貝)は殻口部もしくは殻頂部、二枚貝綱は殻頂部が残存するものとした。軟甲綱(エビ・カニ類)、ウニ綱については破片すべてを同定した。魚類は関節部が残存するもの、椎骨に関しては2分の1以上残存するものとした。爬虫類、鳥類、哺乳類は骨端部が残存するものとしたが、脆弱な資料が少なからず含まれていたことから骨幹部のみでも同定可能なものは分析対象に加えた。種名および配列、生態に関する記載については、奥谷編(2017)、中坊編(2013)、阿部監修(2008)、西村編(1995)に従った。

### 2. 同定結果

同定した動物遺存体は55分類群、計1,424点にのぼる。内訳は貝類881点、エビ・カニ類2点、ウニ類3点、魚類216点、爬虫類1点、鳥類1点、哺乳類320点である。以下では分類群ごとに分けて記載する。

#### (1) 貝類(表2・3、図表2、図版82)

##### a. 腹足綱

**ベッコウガサ** 1点を同定した。潮間帯上部の岩礁域に生息する。

**パティラ科** 27点を同定した。クボガイやコシダカガンガラなどであると思われるが、殻頂部のみ出土であったため、科での同定に留めた。

**クボガイ** 9点を同定した。潮間帯から水深20mの岩礁域に生息する。

**コシダカガンガラ** 4点を同定した。潮間帯から水深20mの岩礁域に生息する。

**イシダタミ** 4点同定した。潮間帯岩礁域に生息する。

**スガイ** 3点同定した。潮間帯岩礁域に生息する。

**ウミナ** 4点同定した。大きな湾の干潟や潮間帯の泥底上に生息する。

**タマキビ** 7点同定した。潮間帯岩礁域に生息する。

**オオヘビガイ?** 1点同定した。潮間帯岩礁域に生息する。

**タマガイ科** 1点同定した。

**ツメタガイ** 3点同定した。潮間帯から水深50mの細砂底に生息する。

**アッキガイ科** 7点同定した。レイシガイやイボニシなどと思われるが、破損のため種を特定できなかった。

**ヒレガイ** 1点同定した。潮間帯から水深20mの岩礁域に生息する。

**チヂミボラ** 3点同定した。潮間帯下部の岩礁域に生息する。

**レイシガイ** 3点同定した。潮間帯から潮下帯の岩礁域に生息する。

**イボニシ** 4点同定した。潮間帯岩礁域に生息する。

軟体動物門 Mollusca	棘皮動物門 Echinodermate
腹足綱 Gastropoda	ウニ綱 Echinoidea sp.
ベッコウガサ <i>Cellana grata</i>	
イシダタミ <i>Monodonta labio confusa</i>	脊椎動物門 Vertebrata
スガイ <i>Lunella coronatus coreensis</i>	軟骨魚綱 Chondrichthyes
バテイラ科 <i>Tegulidae</i> sp.	ネズミサメ科 Lamnidae sp.
ウボガイ <i>Chlorostoma lischkei</i>	トビエイ科 Myliobatidae sp.
コンダラガンガラ <i>Omphalius rusticus</i>	
ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i>	硬骨魚綱 Osteichthyes
タマキビ <i>Littorina brevicula</i>	スズキ属 <i>Lateolabrax</i> sp.
オオヘビガイ <i>Thylacodes adamsii</i>	ムツ属 <i>Scombrops</i> sp.
タマガイ科 <i>Naticidae</i> sp.	ブリ属 <i>Seriola</i> sp.
ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i>	タイ科 <i>Sparidae</i> sp.
アッキガイ科 <i>Muricidae</i> sp.	マダイ <i>Pagrus major</i>
ヒレガイ <i>Ceratosoma bumetti</i>	アイナメ属 <i>Hexagrammos</i> sp.
チヂミボラ <i>Nucella freycineti</i>	サバ属 <i>Scomber</i> sp.
レイシガイ <i>Reishia luteostoma</i>	マグロ属 <i>Thunnus</i> sp.
イボニシ <i>Reishia clavigera</i>	サワラ属 <i>Scomberomorus</i> sp.
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	カワハギ科 Monacanthidae sp.
	爬虫綱 Reptilia
二枚貝綱 Bivalvia	ヘビ亜目 Serpentes sp.
コベルトフネガイ <i>Arca boucardi</i>	
イガイ <i>Mytilus coruscus</i>	鳥綱 Aves sp.
ムラサキインコ <i>Septifer virgatus</i>	
マガキ <i>Crassostrea gigas</i>	哺乳綱 Mammalia
シジミ属 <i>Corbicula</i> sp.	モグラ科 Talpidae sp.
マルスダレガイ科 <i>Veneridae</i> sp.	ヒト <i>Homo sapiens</i>
オニアサリ <i>Protrpithaca jodoensis</i>	ツキノワグマ <i>Ursus thibetanus</i>
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	イヌ科 Canidae sp.
コタマガイ <i>Macridiscus melanaegis</i>	イヌ <i>Canis familiaris</i>
ウチムラサキ <i>Saxidomus purpurata</i>	アシカ科 Otariidae sp.
シラトリモドキ <i>Heteromacoma ius</i>	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
シオフキ <i>Macra veneriformis</i>	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ミルウイ <i>Tresus keenae</i>	クジラ目 Cetacea sp.
オオノガイ <i>Mya arenaria oonogai</i>	ニホンノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>
節足動物門 Arthropoda	
顎脚綱 Maxillopoda	
チシマフジツボ <i>Semibalanus cariosus</i>	
軟甲綱 Malacostraca	
十脚目 Decapoda sp.	

表 2 7 区出土動物遺存体系種名表

アカニシ 7点同定した。水深 30m 以浅の砂泥底に生息する。

#### b. 二枚貝綱

コベルトフネガイ 右 1 点同定した。潮間帯から水深 20m の岩礫に足糸で付着する。

イガイ 左 9 点、右 2 点、計 11 点同定した。潮間帯から水深 20m の岩礫域に生息する。

ムラサキインコ 左 38 点、右 39 点、計 77 点同定した。大部分が水洗選別資料から出土している。被熱率が高く、9 割以上が被熱していた。

マガキ 左 243 点、右 113 点、計 356 点同定した。貝類の中で最も多く出土した種である。同定した

資料では被熱率が低かったが、同定基準を満たさなかった破片の中に被熱したものが少なからず含まれていた。岩礁域に生息するほか、汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底でしばしばカキ礁を形成する。

**シジミ属** 右1点同定した。本属には汽水性のヤマトシジミと淡水性のマシジミが含まれるが、状態が悪く、種を特定できなかった。

**マルスダレガイ科** 左16点、右13点、計29点同定した。破損または風化が著しく、種を特定できなかった。

**オニアサリ** 左1点、右1点、計2点同定した。潮間帯から水深20mの小石混じり砂泥底に生息する。

**アサリ** 左122点、右115点、計237点同定した。マガキに次いで多く出土した種である。マガキ同様に被熱率は低いが、同定基準を満たさなかった破片の中に被熱したものが多数含まれていた。潮間帯中部から水深10mの砂礫泥底に生息する。

**コタマガイ** 左29点、右22点、計51点同定した。潮間帯下部から水深50mの砂底に生息する。

**ウチムラサキ** 右1点同定した。潮間帯から水深20mの礫混じりの砂泥底に生息する。

**シラトリモドキ** 左2点、右2点、計4点同定した。潮間帯の小石混じりの砂泥底に生息する。

**シオフキ** 左1点同定した。潮間帯下部から水深20mの砂泥底に生息する。

**ミルクイ** 右1点同定した。潮間帯下部から水深20mの泥底に生息する。

**オオノガイ** 左3点、右1点、計4点同定した。潮間帯の砂泥底に生息する。

## (2) エビ・カニ類、ウニ類

**十脚目** エビ・カニの仲間である。可動指もしくは不動指の破片を2点同定した。比較標本が不十分であったため同定が困難であった。

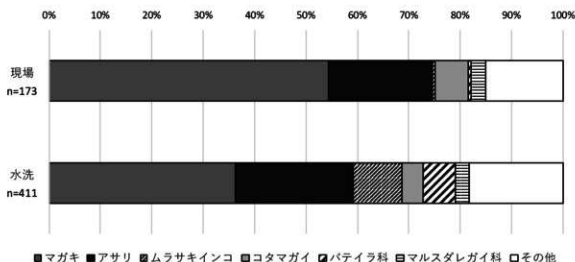
**ウニ綱** 3点同定した。すべて殻板の破片である。

## (3) 魚類 (表2・4、図表3、図版82)

### a. 軟骨魚綱

**ネスミサメ科** 2点同定した。いずれも遊離歯である。

**トビエイ科** 2点同定した。トビエイ科に特徴的な歯板が出土している。



図表2 貝類組成 (MNI)



b. 硬骨魚綱

- スズキ属** 4点同定した。すべて貝層サンプルからの出土で、現生標本との比較から体長60～70cmほどの個体が多い。
- ムツ属** 2点同定した。体長20～30cm程度の個体と推定される。
- ブリ属** 12点同定した。いずれも体長60～70cm程度の個体と推定される。
- タイ科** 16点同定した。遊離歯が半数以上を占める。中には50cm前後の個体も含まれていた。
- マダイ** 1点同定した。体長50～60cm程度の個体と推定される。
- アイナメ属** 21点同定した。カワハギ科、マグロ属に次いで多く出土した魚種であり、体長30cm前後の個体が多い。
- サバ属** 4点同定した。体長30cm前後の個体と推定される。
- マグロ属** 36点を同定した。カワハギに次いで多く出土した。すべて現場採集資料からの出土で、体長1m程度の個体から2m程度のもまで含まれていると推測される。
- サワラ属?** 1点を同定した。保存状態が悪く断定はできないものの、椎体の形状からサワラ属の可能性が高いと思われる。
- カワハギ科** 100点を同定した。前年度の調査では出土していないが、今回の調査では出土魚類のうち最も多く見られ、貝層サンプル中に椎骨や第一背鰭棘が多数含まれていた。標本との比較では体長30cm前後のものが多く。

(4) 爬虫綱

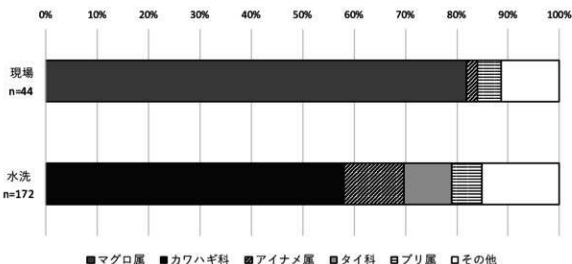
- ヘビ亜目** 椎骨を1点同定した。

(5) 鳥綱

- 不明鳥類** 1点同定した。指骨の近位端のみが残存しており、熱を受けて黒く変色している。種を特定することはできなかった。

(6) 哺乳綱 (表2・5・6、図表4、図版83)

- モグラ科** 2点同定した。前頭骨と上腕骨が出土している。



図表3 魚類組成 (NISP)

**ヒト** 2点同定した。脛骨と遊離歯が出土している。

**ツキノワグマ** 1点同定した。保存状態は良好ではないものの、上腕骨の骨幹部が出土している。

**イヌ** 2点同定した。第三、四中足骨であり、癒合が完了している。

**イヌ科** 1点同定した。左脛骨の骨幹部のみ残存しており、骨端部が欠損していたため、科での同定に留めた。

**アシカ科?** 1点同定した。橈骨の近位端のみの出土であるため同定は難しいが、形態的にはアシカ科に近い。

**イノシシ** 72点同定した。この他にイノシシの可能性の高いものが4点出土している。ニホンジカに次いで多く出土した。貝層から出土したものを除くと大部分が熱を受けて白く変色しており、指骨や中手骨、中足骨が多く見られた。年齢構成を検討できる資料は少ないが、骨端部が癒合しているものと未癒合のものが認められ、若獣～成獣まで含まれていると考えられる。

**ニホンジカ** 哺乳類のうち最も多く出土した種である。133点同定した。この他にニホンジカの可能性の高いものが3点出土している。イノシシと同様に貝層を除くと被熱した資料が多い。

また、骨端部の癒合状況から若獣～成獣まで含まれている。

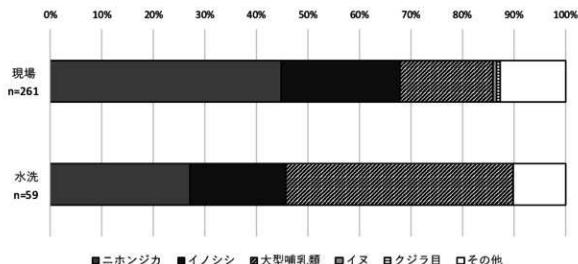
**クジラ目** 2点同定した。頭蓋骨の破片で、いずれもイルカサイズと推測される。

**ニホンノウサギ** 1点同定した。脛骨の遠位端で、被熱して白く変色している。

### 3. 考察 (図表5)

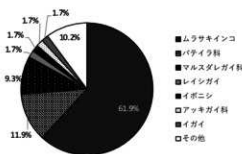
7区の発掘調査では、貝層を中心として保存状態の良い動物遺存体が多数出土した。以下では分類ごとに分析結果を示すとともに、平成24年度の調査において出土した1～3区の動物遺存体の出土傾向を踏まえた上で、堂の前貝塚における動物利用について考察する(松崎・山崎2018)。

貝類はマガキ、アサリを主体として、ムラサキインコや岩礫性の巻貝などを含む。1～3区では貝類の出土点数は少なく、ムラサキインコは出土していないが、いずれの調査でもマガキを主体とする貝層が確認され、アサリも比較的多く含まれるという共通した特徴が見られた。堂の前貝塚の面する広田湾奥部は、砂浜海岸と岩礫域が連続したリアス式海岸の発達した地形となっている。マガキとムラサキインコは岩礫域、アサリは砂泥底に生息しており、その他の貝類もすべて貝塚周辺で採集可能な種である。したがって、貝塚周辺での採貝活動が想定される。



図表4 哺乳類組成 (NISP)

また、貝類の中には熱を受けて変色したものが少なからず含まれていた。貝層から採取された水洗資料では、同定破片数 601 点のうち 118 点が被熱しており、ムラサキインコが 6 割、バテイル科やマルスダレガイ科が 1 割程度を占める。とくにムラサキインコは同定破片数の 9 割以上が被熱しており、その他の種に比べて被熱率が高い点が注目される。このような結果が生じた要因として、一つには人為的にムラサキインコに熱を加えていた可能性が考えられる。ただし、堂の前貝塚と同じく広田湾沿岸に所在する中沢浜貝塚では、縄文時代中期末のムラサキインコを主体とする貝層が分析されており、被熱率は非常に少なかったことが指摘されている（佐藤・熊谷 2001）。したがって、今後慎重に検討する必要がある。



図表 5 被熱した貝類の割合 (n = 118)

魚類は、現場採集資料ではマグロ属、水洗選別資料ではカワハギ科を主体としてアイナメ属、タイ科、ブリ属、スズキ属などが出土した。1～3区で比較的多かったニシン科やウミタナゴ科などの小型魚類は出土していないが、7区では 5mm 目のふるいを使用しており、5mm 以下の小さな魚骨については回収されていない可能性がある。出土した魚類は季節的な移動を繰り返す回遊性魚類と、周年にわたってあまり移動しない定住性魚類に分けられる。現場採集資料で最も多く出土したマグロ属は外洋性回遊魚であり、クロマダロ、メバチ、ビンナガなどが含まれる。そのうちより沿岸性の強いのはクロマダロで、三陸沿岸では初夏から秋にかけて来遊することから、来遊季節に合わせて漁獲されたと推測される。水洗選別資料では、基本的には沿岸からあまり移動しない定住性魚類の占める割合が高かった。最も多く出土したカワハギ科は、広田湾周辺ではカワハギ、ウマヅラハギなどが漁獲され、岩礁域から内湾に広く現れ、周年沿岸で生息する（井田ほか 1992）。以上のことから、季節的に来遊するマグロ属などを対象としつつ、沿岸に生息する魚種を中心とした漁撈活動が想定される。

哺乳類は、ニホンジカとイノシシを主体として、イヌ、クジラ目、ツキノワグマ、ノウサギ、モグラ科などが少量出土した。また、種を特定できなかったものの中にも大型哺乳類と思われる破片が少なからず含まれていた。ニホンジカとイノシシは、貝層中から出土したものを除くと大部分が被熱しており、出土部位は指骨や中手骨、中足骨などの破片が多かった。年齢構成を検討できる資料は少なかったものの、若い個体から老齢の個体までが狩猟の対象となっていたと考えられる。前回分析した 1～3 区の報告でも指摘したように、陸前高田市や気仙沼市周辺地域では、中期後半以前にはマグロ属などの大型回遊魚が多量に出土し、哺乳類は非常に少ない。しかしながら、中期後半以降になると哺乳類が増加する傾向があり、それまでの動物利用に変化が生じた可能性がある（松崎 2017、松崎・山崎 2018）。1～3 区および 7 区のいずれの地区においても哺乳類が多く出土したことは、堂の前貝塚において活発な狩猟活動がおこなわれていたことを示しており、当該時期における動物利用を検討する上で重要なデータと言える。

#### 4. まとめ

堂の前貝塚の 7 区から出土した動物遺存体は、基本的には 1～3 区とほぼ同様の分析結果が得られた。すなわち、岩礁域および砂浜における採貝活動に加えて、季節的な回遊をおこなう魚類や沿岸に生息する魚類を対象とした漁撈活動、ニホンジカやイノシシを対象とした狩猟活動を活発におこなっていたと推測される。近年、復興事業に伴う発掘調査によって、縄文時代中期後葉～後期前葉に比定される動物遺存体の分析データが蓄積されつつある。今後、当該時期における動物利用に関する研究が進展することを期待したい。

## 引用文献

- 阿部永監修 2008『日本の哺乳類 改訂2版』東海大学出版会
- 井田齊・朝日田卓・斎藤裕也・寺島裕児 1992『岩手の魚百科』岩手日報社
- 奥谷喬司編著 2017『日本近海産貝類図鑑 第二版』東海大学出版会
- 佐藤正彦・熊谷賢 2001『中沢貝貝塚発掘調査報告書—平成9年度発掘 骨角器・自然遺物編—』岩手県陸前高田市教育委員会
- 中坊徹次編 2013『日本産魚類検索 全種の同定 第三版』東海大学出版会
- 西村二郎編著 1995『原色検索日本海岸動物図鑑 [II]』保育社
- 松崎哲也 2017『動物資源利用からみた三陸地方南部の縄文時代前・中期の生業形態』『宮城考古学』17、57-72
- 松崎哲也・山崎健 2018『1～3区出土の動物遺存体』『堂の前貝塚発掘調査報告書 III—平成24年度復興交付金対象事業関連遺跡発掘調査—』岩手県陸前高田市教育委員会、239-248

表3 現場採集資料 貝類

種名	WQ10		WR13		WS10		WS11		WT11	
	B	B	I	B	I	B	I	B	I	
満足層										
ハテイラ科										1
コシタカガンガ										1
ウミミナ			2	1						
タマガイ科									1	
ツメタガイ				1						1
チヂミガラ										1
レイシガイ										1
アカニシ		2				2			2	1
二枚貝類										
イガイ										3 / 1
ムラサキイソコ										1 / 0
マガキ			5 / 1	1 / 1	4 / 1	2 / 2	17 / 14	65 / 48		
シツシ属	0 / 1									
マルスタシガイ科			4 / 4							1 / 1
オニツサリ									1 / 1	
アサリ			0 / 3	2 / 1					17 / 6	16 / 11
コタマガイ			1 / 1	1 / 2					4 / 2	5 / 5
シラトリモドキ									1 / 2	
シオフキ									1 / 0	
ミルワイ									0 / 1	
オオノガイ			1 / 0							0 / 1

\* 左右のあるものは（左/右）で示した。

表4 現場採集資料 魚類

種名	出土部位	SU2		WR11	WR13	WS11	WS12	WT11	
		B	埋土	B	B	B	B	I	B
軟骨魚類									
スズミサザ科	遊離歯			1		1			
硬骨魚類									
ブリ属	主棘歯								0 / 1
	椎骨								1
	アイナメ属								1
	サハ属				1				
	マグロ属	股棘歯		0 / 1					
不明魚類	椎骨	12	3	2				1	17
	椎骨			1			1		

\* 左右のあるものは（左/右）で示した。

表5 現場採集資料 哺乳類

種名	出土部位	部分	SU1		SU2		WQ11	WQ12	WR11	WR12	WR13	WS10		WS11	WS12	WT11	
			II	覆土	II	覆土	II	II	II	I	II	II	I	II	II	II	
ヒト	脛骨	骨幹部														0/1	
フキノワグマ	上腕骨	骨幹部														0/1	
イヌ	第三中足骨	近位端														1/0	
	第四中足骨	近位端～骨幹部														1/0	
イヌ科	脛骨	骨幹部														1/0	
アンカ私?	脛骨	近位端			1												
イノシシ	頰蓋骨	切歯骨								0/1							
		側頭骨														1/0	
	高脛骨	下脛 I1			1/0												
		下脛 M3						1/1									
		臼歯片	1					1								2	
	下顎骨													1/0		0/1	
	肩甲骨	遠位端														0/1	
	上腕骨	遠位端			0/1					0/1							
	脛骨	骨幹部					0/1										
	第三中手骨	近位端	0/1					0/1									
	第四中手骨	近位端						1/0									
	第五中手骨	近位端							1/0								
	手指骨	骨幹部	0/1											0/1			
	脛骨	近位端							2/0								
		遠位端														3/0	
	距骨		1/1							1/0							
	踵骨									0/1							
	第三中足骨	近位端	1/0														
	第四中足骨	近位端	1/0							2/0							
	中手骨	遠位端								1							
	ノ中足骨		1														
	趾骨		0/1													0/1	
	椎骨	頸椎	1							2							
		寛骨	寛骨臼							1/0							
	肋骨	骨幹部															1
	肋骨	基節骨	1				1	1	3							1	
		中節骨	2					1	3		1						
		末節骨	1													1	
	イノシシ?	種子骨								1							
		尺骨	遠端切端							0/1							
		大指骨	近位端							0/1							
	肋骨	基節骨							1								
	ニホンジカ	頰蓋骨	寛骨								0/1						
		舌骨											1				
高脛骨		上脛 M1orM2						1/0									
		下脛 M1orM2						1/0									
		下脛 M3						1/0									
		臼歯片														1	
角		角皮部														1	
		分岐部														1	
		破片					2		1							1	
肩甲骨		遠位端	1/0												0/1		
		骨幹部														1/1	
上腕骨		遠位端	2/0													0/1	
		骨幹部															
尺骨		遠端切端												1/0		1/0	
		骨幹部															
中手骨		近位端							0/1							1	
		遠位端								1						1	
手指骨			0/1	0/1						1/1							
大趾骨		骨幹部														1/0	
肋骨		近位端								0/1							
		近位端～骨幹部														1/0	
		骨幹部														1/0	
		骨幹部～遠位端												0/1	1/0		
		遠位端													1/1	1/0	
頰蓋骨													0/1				
距骨										1/1							
踵骨										1/1	1/0					1/0	
中足骨		近位端								0/2						1/1	
		近位端～骨幹部														0/2	
		遠位端								1							
		骨幹部								3							2

表6 現場採集資料 哺乳類(続き)

種名	出土部位	部分	S11		S12		WQ11		WQ12		WR11		WR12		WR13		WS10		WS11		WS12		WT11					
			II	層土	II	層土	II	II	II	I	II	II	I	II	I	II	I	II	I	II	II	II	II	II				
ニホンジカ	中手骨 / 中足骨	遠位端		1										10											2			
		骨幹部																								1		
	足根骨		1/0		1/0								0/2															
	脛骨	頭端														1												
		頭端																									1	
		頭端																									1	
		頭端									1																	
	寛骨	寛骨臼												0/1														
	指骨	趾節骨		2		1					1			2													4	
		中節骨		2							2			7														
基節骨			1	2						1			8													2		
ニホンジカ?	指骨	遠位端																								1/0		
	指骨	不明		1							1																	
クジラ目	頭蓋骨	破片									1																	
	指骨										0/1																	
ノウサキ	指骨	遠位端												1/0														
大型哺乳類	上腕骨	近位端																									1	
		遠位端													0/1													
	大腿骨	骨幹部																										1
		近位端																										1
	踵骨?													0/1														
	脛骨	頭端		1																								1
		頭端													1													
		趾端		1																								
	肋骨	肋骨突起		1								1			3													
		肋骨突起													4													
	肋骨	遠位端													1													
		近位端													5													1
	指骨	趾節骨													3													
		中節骨																										
		末節骨													4													
		不明					1								4												4	
	種子骨													4													2	
不明哺乳類	脛骨	極体												1														
		関節突起													1													
	寛骨	寛骨臼												1														
	寛骨臼												2		14											3		

※ 左右のあるものは「左/右」で示した。

※ 同定部位は原則骨端部が残存するものとし、骨幹部の中心まで残存していた場合には「骨端部～骨幹部」とした。

表7 水洗選別採集資料 エビ・カニ・ウニ類

種名	出土部位	WT11
		数
軟骨類		
十脚目	可動物 / 不動物	2
ウニ類		
ウニ類	殻板	3

表8 水洗選別採集資料 貝類

種名	WT11
	数
確認種	
ベッコウガサ	1
イシダタミ	5
イシダタミ?	1
スガイ	3
ハテイル科	26
タボガイ	9
コシダカガンガラ	3
ウニナ	1
タマキビ	9
オオヘビガイ?	1
ツメタガイ	1
アツキガイ科	7
ヒレガイ	1
チヂミボラ	2
レイシガイ	2
イボニシ	4
不明種貝	8
不明産貝類	2
二枚貝類	
コヘルトフネガイ	0 / 1
イガイ	6 / 1
ムラサキインコ	37 / 39
マガキ	149 / 43
マルスタレイ科	11 / 8
アサリ	87 / 94
コタマガイ	17 / 12
ウチムラサキ	0 / 1
シラトリモドキ	1 / 0
オオノガイ	2 / 0
不明二枚貝	2 / 2
	(2)

※ 左右のあるものは (左 / 右) で示した。

表9 水洗選別採集資料 魚類

種名	出土部位	SJ2	WT11
		数	数
軟骨魚類			
トビエイ科	歯板		2
硬骨魚類			
スズキ属	角骨		0 / 1
	肩甲骨		1 / 0
	湯骨		1 / 0
	主上顎骨		1 / 0
ムツ属	椎骨		2
ブリ属	角骨		2 / 0
	肩甲骨		1 / 0
	湯骨		2 / 2
	主上顎骨		2 / 0
	前上顎骨		0 / 1
タイ科	関節蓋骨		0 / 1
	上舌骨		1 / 0
	椎骨		3
	副椎弓骨		1
	遊離歯	10	
マダイ	角骨		0 / 1
アイナメ属	角骨		0 / 3
	肩甲骨		0 / 1
	後部頭骨		0 / 1
	口蓋骨		1 / 1
	上舌骨		0 / 1
	舌顎骨		1 / 2
	前上顎骨		0 / 1
	椎骨	1	4
	方骨		1 / 2
サハ属	主眼窩骨		0 / 1
	椎骨		2
サワラ属?	椎骨		1
カワハキ科	基後頭骨		1
	基顎骨		4
	第一椎骨		2
	第一背棘		10
	椎骨		83
不明魚類	角骨		1 / 0
	肩甲骨		1 / 1
	上舌骨		0 / 1
	第一椎骨		1
	関節蓋骨		5
	椎骨		2
	不明		1

※ 左右のあるものは (左 / 右) で示した。

表 10 水洗選別採集資料 哺乳類・鳥類・爬虫類

種名	出土部位	部分	S11		SJ2	WR12	WT11	
			塵土	砂	塵土	II		
モグラ科	頭骨	前頭骨					1	
	上顎骨	矢形					1	
ヒト	頭骨						1	
イノシシ	頭骨	下顎 I1					1 / 0	
		下顎 C					1 / 0	
		下顎 M3					2 / 0	
	手骨					0 / 1		
	大頰骨	近位端						1 / 1
		骨幹部						
	第三中手骨	近位端			0 / 1			
中手骨 / 中足骨	遠位端					1		
指骨	基部骨		1		1			
	末節骨							
イノシシ?	指骨	末節骨				1		
ニホンジカ	頭骨	臼歯			1			
		遠位端					1 / 0	
	中足骨	遠位端	2					
		骨幹部		1			1	
	中手骨 / 中足骨	遠位端					1	
		基部骨	1	1			1	
	指骨	中節骨	2		1			
		末節骨	1	1			1	
		不明	1					
	大型哺乳類	上顎骨	遠位端	1				0 / 1
歯骨?			1					
椎骨		椎体	1					
		椎体板	8					
		関節突起	3					
指骨		近位端					1 / 0	
		基部骨					1	
指骨		中節骨	2					
		末節骨	1				2	
		不明	1		1		2	
中型哺乳類	中手骨 / 中足骨	矢形				1		
不明哺乳類	部位不明			1				
不明鳥類	指骨					1		
ハビ類目	椎骨					1		

※ 左右のあるものは「左/右」で示した。

※ 同定部位は原則骨端部が残存するものとし、骨幹部の中心まで残存していた場合には「骨端部～骨幹部」とした。



## 第三章 自然科学分析

### 第1節 堂の前貝塚における放射性炭素年代（AMS測定）

#### 1 測定対象試料

##### ①堂の前貝塚4区

堂の前貝塚4区は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前139番地1（北緯39°1′48″、東経140°40′41″）に所在する。測定対象試料は、土坑から出土した炭化物の合計3点である（表11）。これらの試料については、縄文時代中期末から後期初頭の可能性が指摘されている。

##### ②堂の前貝塚6区

堂の前貝塚6区は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前（北緯39°0′19″、東経141°40′23″）に所在する。測定対象試料は、土坑から出土した炭化物6点である（表13）。

##### ③堂の前貝塚7区

堂の前貝塚7区は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前133番地1（北緯39°1′48″、東経140°40′41″）に所在する。測定対象試料は、竪穴建物跡や貝層から出土した炭化物の合計4点である（表15）。

SH10は竪穴建物跡で、埋設土器内から試料No.4が採取された。この竪穴建物跡を利用した土器捨て場である土器集積SU2から試料表80、表16が出土した。試料表31は、WT11区II層中の混土貝層から採取された。試料表80、表16は縄文時代後期初頭、No.4は中期末と推定され、表31は中期末～後期初頭の可能性が指摘される。

#### 2 測定の意義

遺構の埋没時期を把握する。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。  
その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta$  13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は  $\delta$  13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 11・13・15 に、補正していない値を参考値として表 12・14・16 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい(14C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上(14C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も  $\delta$  13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 11・13・15 に、補正していない値を参考値として表 12・14・16 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta$  13C 補正を行い、下 1 桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 12・14・16 に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## 6 測定結果

### ①堂の前貝塚 4 区

測定結果を表 11・12 に示す。

試料の 14C 年代は、試料 a が  $3920 \pm 30$ yrBP、試料 b が  $3820 \pm 20$ yrBP、試料 c が  $3850 \pm 30$ yrBP である。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、古い方から順に試料 a が縄文時代後期初頭頃、試料 c が後期初頭から前葉頃、試料 b が後期前葉頃に相当し (小林編 2008)、3 点とも可能性が指摘される時期に一致する値、もしくは近い値である。

試料の炭素含有率はすべて 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

### ②堂の前貝塚 6 区

測定結果を表 13・14 に示す。

6 区 SK48 出土試料 4 点の 14C 年代は、 $3940 \pm 30$ yrBP (サンプル 5) から  $3870 \pm 30$ yrBP (サンプル 6) の狭い幅に収まり、誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で一致するものも含まれる。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古いサンプル 5 が 2483 ~ 2349cal BC の間に 3 つの範囲、最も新しいサンプル 6 が 2453 ~ 2296cal BC の間に 3 つの範囲で示され、全体として縄文時代中期末葉から後期初頭頃に相当する (小林編 2008)。

試料の出土層位は、上層から 2 層 (サンプル 3)、5 層 (サンプル 4)、6 層 (サンプル 5)、8 層 (サン

ブル6)の順であるが、上下関係にある層位の間で年代差は特に認められない。

その他の土坑出土試料の14C年代は、6区SK36出土サンプル1が $3500 \pm 30\text{yrBP}$ 、6区SK09出土サンプル2が $3400 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 $\sigma$ )は、サンプル1が1880～1772cal BC、サンプル2が1741～1660cal BCの間に各々2つの範囲で示され、いずれも縄文時代後期中葉頃に相当する(小林編前掲)。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

### ③堂の前貝塚7区

測定結果を表15・16に示す。

試料の14C年代は、No1が $3770 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2が $3870 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.4が $4030 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.3が $3860 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 $\sigma$ )は、古い方から順にNo.4が縄文時代中期末葉頃、No.2が後期初頭頃、No.3が後期初頭から前葉頃、No.1が後期前葉頃に相当する(小林編2008)。SI10のが埋設土器と、廃棄後のSI11を利用して形成されたSU2との前後関係に整合する測定結果となっている。また、4点とも推定される時期に一致する値、もしくは近い値である。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表 11 堂の前貝塚 4 区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta 13C$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta 13C$ (‰) (AMS)	$\delta 13C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133029	試料 a	4 区 SK30 底面ビット	炭化物	AAA	$-27.37 \pm 0.36$	$3.920 \pm 30$	$61.42 \pm 0.20$
IAAA-133030	試料 b	4 区 SK22	4 層	炭化物	AAA	$27.60 \pm 0.44$	$62.12 \pm 0.19$
IAAA-133031	試料 c	4 区 SK22	1 層	炭化物	AAA	$-28.51 \pm 0.36$	$61.96 \pm 0.20$

[#6335]

表 12 堂の前貝塚 4 区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta 13C$  未補正值、暦年較正用 14C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta 13C$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133029	$3.960 \pm 30$	$61.12 \pm 0.19$	$3.915 \pm 26$	2469calBC - 2431calBC (27.1%) 2424calBC - 2402calBC (16.6%) 2381calBC - 2348calBC (24.5%)	2475calBC - 2335calBC (91.2%) 2324calBC - 2305calBC (4.2%)
IAAA-133030	$3.870 \pm 20$	$61.79 \pm$	$3.824 \pm 24$	2296calBC - 2266calBC (22.5%) 2261calBC - 2206calBC (45.7%)	2402calBC - 2382calBC (2.3%) 2349calBC - 2197calBC (91.4%) 2166calBC - 2151calBC (1.6%)
IAAA-133031	$3.900 \pm 30$	$61.51 \pm 0.19$	$3.845 \pm 25$	2396calBC - 2386calBC (2.7%) 2346calBC - 2277calBC (46.4%) 2252calBC - 2229calBC (13.7%) 2222calBC - 2211calBC (5.5%)	2456calBC - 2418calBC (8.5%) 2407calBC - 2375calBC (10.1%) 2368calBC - 2356calBC (1.8%) 2351calBC - 2205calBC (75.0%)

[参考値]

表 13 堂の前貝塚 6 区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta 13C$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta 13C$ (‰) (AMS)	$\delta 13C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-132034	サンプル 1	6 区 SK36	7 層	炭化物	AAA	$-26.92 \pm 0.58$	$3.500 \pm 30$ $64.71 \pm 0.20$
IAAA-132035	サンプル 2	6 区 SK37	3 層	炭化物	AaA	$-26.86 \pm 0.62$	$3.400 \pm 30$ $65.50 \pm 0.21$
IAAA-132036	サンプル 3	6 区 SK48	2 層	炭化物	AAA	$-24.56 \pm 0.53$	$3.920 \pm 30$ $61.36 \pm 0.20$
IAAA-132037	サンプル 4	6 区 SK48	5 層	炭化物	AaA	$-25.64 \pm 0.50$	$3.910 \pm 30$ $61.43 \pm 0.21$
IAAA-132038	サンプル 5	6 区 SK48	6 層	炭化物	AAA	$-25.44 \pm 0.47$	$3.940 \pm 30$ $61.24 \pm 0.19$
IAAA-132039	サンプル 6	6 区 SK48	8 層	炭化物	AaA	$-25.83 \pm 0.35$	$3.870 \pm 30$ $61.74 \pm 0.20$

[#6187]

表 14 堂の前貝塚 6 区放射性炭素年代測定結果 ( $\delta 13C$  未補正值、暦年較正用 14C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta 13C$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-132034	$3.530 \pm 20$	$64.46 \pm 0.18$	$3.495 \pm 25$	1880calBC - 1862calBC (12.2%) 1851calBC - 1772calBC (56.0%)	1891calBC - 1746calBC (95.4%)
IAAA-132035	$3.430 \pm 20$	$65.25 \pm 0.20$	$3.398 \pm 26$	1741calBC - 1711calBC (29.8%) 1699calBC - 1660calBC (38.4%)	1750calBC - 1628calBC (95.4%)
IAAA-132036	$3.920 \pm 20$	$61.42 \pm 0.19$	$3.922 \pm 26$	2471calBC - 2433calBC (29.4%) 2423calBC - 2403calBC (15.2%) 2380calBC - 2349calBC (23.6%)	2479calBC - 2335calBC (92.2%) 2324calBC - 2306calBC (3.2%)
IAAA-132037	$3.930 \pm 30$	$61.34 \pm 0.20$	$3.914 \pm 26$	2468calBC - 2431calBC (26.9%) 2424calBC - 2402calBC (16.7%) 2381calBC - 2348calBC (24.6%)	2474calBC - 2335calBC (91.0%) 2324calBC - 2305calBC (4.4%)
IAAA-132038	$3.950 \pm 20$	$61.18 \pm 0.19$	$3.939 \pm 25$	2483calBC - 2440calBC (39.0%) 2420calBC - 2404calBC (10.9%) 2379calBC - 2349calBC (18.3%)	2560calBC - 2536calBC (5.3%) 2492calBC - 2344calBC (90.1%)
IAAA-132039	$3.890 \pm 20$	$61.64 \pm 0.19$	$3.873 \pm 25$	2453calBC - 2419calBC (18.4%) 2406calBC - 2377calBC (17.3%) 2350calBC - 2296calBC (32.5%)	2464calBC - 2286calBC (95.0%) 2247calBC - 2244calBC (0.4%)

[参考値]

表 15 堂の前貝塚 7 区放射性炭素年代測定結果 (δ 13C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133032	試料 表 80	7 区 SU2 上部	炭化物	AAA	-27.95 ± 0.38	3,770 ± 20	62.55 ± 0.19
IAAA-133033	試料 表 16	7 区 SU2 下部	炭化物	AAA	-25.56 ± 0.29	3,870 ± 30	61.75 ± 0.20
IAAA-133034	試料 No.4	7 区 S110 掘埋設土層内	炭化物	AAA	-22.29 ± 0.42	4,030 ± 30	60.55 ± 0.19
IAAA-133035	試料 表 31	7 区 WT11 日置 中の混土貝層	炭化物	AaA	-28.47 ± 0.33	3,860 ± 20	61.88 ± 0.18

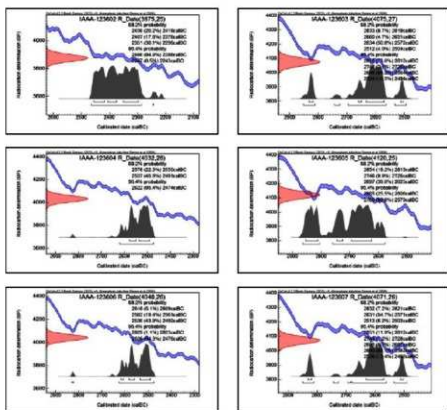
[#6336]

表 16 堂の前貝塚 7 区放射性炭素年代測定結果 (δ 13C 未補正值、暦年較正用 14C 年代、較正年代)

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 の暦年代範囲		2 の暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-133032	3,820 ± 20	62.17 ± 0.18	3,769 ± 24	2269calBC - 2260calBC ( 6.6%)		2287calBC - 2133calBC (92.8%)	
				2206calBC - 2141calBC (61.6%)		2079calBC - 2062calBC ( 2.6%)	
				2453calBC - 2419calBC (18.0%)			
IAAA-133033	3,880 ± 30	61.68 ± 0.19	3,872 ± 25	2406calBC - 2377calBC (17.1%)		2464calBC - 2286calBC (94.1%)	
				2350calBC - 2296calBC (33.1%)		2247calBC - 2236calBC ( 1.3%)	
IAAA-133034	3,990 ± 20	60.88 ± 0.19	4,030 ± 25	2577calBC - 2559calBC (18.6%)		2620calBC - 2606calBC ( 3.9%)	
				2536calBC - 2491calBC (49.6%)		2600calBC - 2593calBC ( 1.7%)	
						2587calBC - 2475calBC (89.8%)	
IAAA-133035	3,910 ± 20	61.44 ± 0.18	3,855 ± 23	2432calBC - 2423calBC ( 4.0%)		2458calBC - 2276calBC (83.3%)	
				2403calBC - 2380calBC (11.4%)		2253calBC - 2210calBC (12.1%)	
				2349calBC - 2285calBC (47.3%)			
				2248calBC - 2235calBC ( 5.5%)			

[ 参考値 ]

図表 6 暦年較正年代グラフ (参考)



## 第2節 堂の前貝塚6区における花粉分析

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、堂の前貝塚で出土した土坑の堆積物について、堆積物の検討と花粉分析を行い、当時の植生ならびに環境を検討する。

### 2. 試料

分析試料は、以下の12点である。

通し番号	地区	遺構番号	層位	報告時試料名	
1	EC28	SK36	3層	No.1	暗オリーブ褐色礫混砂質シルト
2	EC28	SK36	3層	No.2	暗オリーブ褐色礫混砂質シルト
3	EC28	SK36	5層	No.3	暗褐色砂質粘土混シルト
4	EC28	SK36	5層	No.4	暗褐色砂質粘土混シルト
5	EB28	SK37	3層	A	暗褐色わずかに礫を含む砂質粘土混シルト
6	EB28	SK37	3層	B	暗褐色わずかに礫を含む砂質粘土混シルト
7	EA21・22	SK48	2層	2層上	褐色礫含む砂質粘土混シルト
8	EA21・22	SK48	2層	2層下	褐色礫含む砂質粘土混シルト
9	EA21・22	SK48	5層	5層	暗褐色礫含む砂質粘土混シルト
10	EA21・22	SK48	6層	6層上	褐色砂質粘土混シルト
11	EA21・22	SK48	6層	6層下	褐色砂質粘土混シルト
12	EA21・22	SK48	8層	8層	褐色砂質粘土混シルト

表 17 堂の前貝塚6区花粉分析試料採取表

花粉分析の事前調査として試料となった土坑の堆積物の粒度組成を調べた(図表7)。SK08では上部の3層は泥(シルト・粘土)で占められ、下部の5層は礫と泥(シルト・粘土)が多い。いずれも砂は少なく、特にピークは認められず淘汰は受けていない。いずれの試料も風化と土壌化を受けて生成されたとみなされる。SK09では上部2層上では砂が多く、中粒砂でピークを示し淘汰が認められる。2層下、5層、6層上では、礫が多く泥(シルト・粘土)も多い。8層では泥(シルト・粘土)が占める割合が高い。これらは同様に風化と土壌化を受けて生成されたとみなされる。図表9に示したように有機物含有量は低率であり、いずれの試料も炭化および分解を受けた微細植物遺体片がやや多いが、未分解のものは出現せず、風化ないし土壌化による強い分解を受けて生成された堆積物とみなされる。

### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレバート作製
- 8) 検鏡・計数

鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉 (1973)、中村 (1980) を参照して行った。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、草本花粉 1、シダ植物胞子 1 形態の計 2 である。これらの学名と和名および粒数を表 18 に示し、傾向をみるために図示した。出現した分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[草本花粉]

キク亜科

[シダ植物胞子]

単条溝胞子

##### (2) 花粉群集の特徴

###### 1) EC28 SK36 (No 1～No 4)

いずれの試料も花粉はほとんど検出されない。試料 No 2 においてキク亜科がわずかに検出された。

###### 2) EB28 SK37 (A, B)

いずれの試料も花粉が検出されず、試料 A からわずかにシダ植物単条溝胞子が検出された。

###### 3) EA21・22 SK48 (2 層上、2 層下、5 層、6 層上、6 層下、8 層)

いずれの試料からも花粉、シダ植物胞子とも検出されなかった。

#### 5. 考察とまとめ

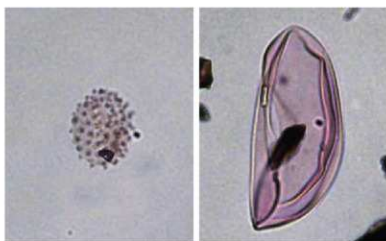
堂の前貝塚の土坑の堆積物について花粉分析を行った。その結果、SK08 3 層試料 No 2 と SK09 3 層試料 A からそれぞれ 1 粒ずつ花粉とシダ植物胞子が検出されたのみであった。この状況は試料の項で示したように、試料となった堆積物が風化しない土壌化を強く受けた堆積物であるため、花粉や胞子が分解したと考えられる。わずかに出現した花粉種は相対的に乾燥を好むキク亜科であり、シダ類も乾燥を好む。以上のことから、詳細な植生復原は困難であるが、遺跡が高台に立地すること、キク亜科やシダ類などの乾燥を好む植物の生育が認められることなどから、堂の前貝塚は乾燥した環境下にあったと推定される。

#### 参考文献

- 土質工学会編 (1979) 土質試験法, p.2-5-1～2-5-23, 4-2-1～4-3-11.  
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.  
中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-102.  
中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.  
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.  
金原正明・金原正子 (2013) 植生と農耕における土壌層分析の実証的研究. 日本文化財科学会第 30 回大会研究発表会要旨集, p.112-113.

分類群		EC28 SK36				EB28 SK37		EA21・22 SK48					
学名	和名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	A	B	2層上	2層下	埋土5層	埋土6層上	埋土6層下	埋土8層
		Nonarboreal pollen	草本花粉										
Asteroidae	キク亜科		1										
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	単条溝胞子					1							
Arboreal pollen	樹木花粉												
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Nonarboreal pollen	草本花粉		1										
Total pollen	花粉総数	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Pollen frequencies of 1cm	試料1cm中の花粉密度		0.7 × 10										
Unknown pollen	未同定花粉												
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

表 18 堂の前貝塚6区花粉分析結果



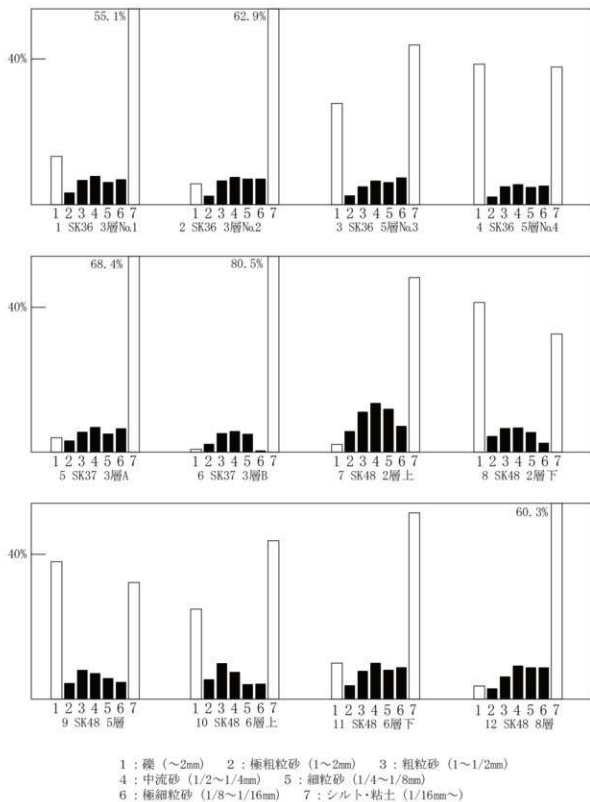
1 キク亜科  
(EC28 SK36 No.2)

2 シダ植物単条溝胞子  
(EB28 SK37 A)

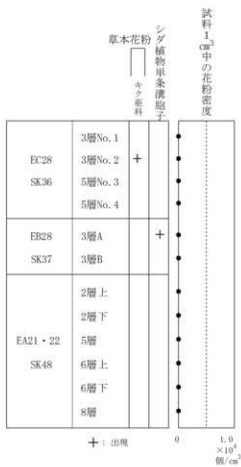
— 10 μm

写真7 堂の前貝塚6区から検出された花粉・胞子

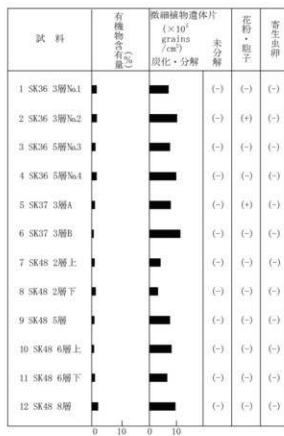




図表 7 釜の前貝塚 6 区採取花粉分析試料 (堆積物) 粒度組成



図表 8 堂の前貝塚 6 区における  
花粉ダイアグラム



図表 9 堂の前貝塚 6 区花粉分析試料  
の有機物・有機遺体含有量

## 第IV章 まとめ

今回の調査では、7区から複式竪穴を付設する比較的遺存状態が良好な3棟の竪穴建物が検出された。

3棟の竪穴建物は、縄文時代中期後葉から後期前葉にかけて、重複することなく近接して構築されている。

さらに、SI11 竪穴建物廃絶後の中期末から後期前葉には、同竪穴跡に人為的遺物投棄が行われている。

この投棄行為は、平成24年度に1区で調査された遺物包含層の形成時期とも符合しており、これら多量の遺物を残した集団は、遺跡の北に広がる低地に面した緩斜面に居住したと推定される。

6区の調査で検出された400基余りの小土坑群の構築時期は、縄文時代以降、近現代までに及ぶものと思われるが、調査時に構築時期や配列を確定することはできなかった。

調査終了後、これらの小土坑群について再検討を行った調査担当者は、6区北側調査地点のSK48土坑より南で検出された地山層の段差に着目し、段差から北には土坑群が存在せず、段差から南では縄文時代の遺構の遺存状態が不良である事などから、小土坑が群在する6区南側調査地点で平坦面造成のために切土が行われたと推定している。また、小土坑群の中の径40～60cmの土坑は、2～3m間隔で整列する箇所も見受けられ、段丘上や丘陵尾根上に小土坑が散在し、室町時代の城館跡と推定された市内の本宿館跡（横田町）（注1）・中沢遺跡（広田町）（注2）と同様の様相を呈する事、海上交通の要衝となる立地などから、同時期の集落あるいは居館跡である可能性を指摘している。

しかし、過去の調査事例と同様に、整理作業においても小土坑群の構築時期を確定できる出土遺物は皆無であった。

（注1）陸前高田市教育委員会 2015 『本宿館跡発掘調査報告書』 陸前高田市文化財調査報告 第29集

（注2）陸前高田市教育委員会 2017 『中沢遺跡発掘調査報告書』 陸前高田市文化財調査報告 第31集

\* 6区の小土坑群については、平成25年度奈良市派遣職員で発掘調査を担当された奈良市埋蔵文化財センター主任 安井宣也氏のご教示をいただきました。深く感謝申し上げます。

# 图 版



図版 1 4区調査状況(1)



中央部調査終了状況(西から)



東端部調査終了状況(南から)



西端部調査終了状況(南から)



発掘区北壁の土層(南から)



発掘区東壁の土層(西から)

図版 2 4区調査状況 (2)



S14 調査中 (北から)



S14 焼土断面 (東から)



S14 南北土層断面 (東から)



SB2 調査終了 (北から)



SB2-a 完掘状況 (南から)

図版3 4区調査状況(3)



SB2-b 完掘状況(東から)



SB2-c 完掘状況(西から)



SB2-d 土層断面(南から)



SB2-d 完掘状況(南から)



SK20 土層断面(南から)



SK20 調査終了(西から)



SK21 土層断面(南から)



SK21 調査終了(南から)



図版 4 4区調査状況 (4)



SK22 土層断面 (西から)



SK22 中央ビット土層断面 (東から)



SK22 壁面 (東から)



SK22 調査終了 (北から)



SK23 調査終了 (西から)



SK24 調査終了 (東から)



SK25 土層断面 (西から)



SK25 調査終了 (南から)

図版 5 4区調査状況(5)



SK27 土層断面(東から)



SK26・27 調査終了(北から)



SK28 土層断面(南から)



SK28 調査終了(北から)



SK29 土層断面(東から)



SK29 調査終了(西から)



SK30 土層断面(東から)



SK30 調査終了(西から)

図版 6 4区調査状況(6)



SK31 土層断面 (東から)



SK31 調査終了 (南から)



SK32 雑集積検出状況 (南から)



SK32 調査終了 (南から)



SP171 調査終了 (南から)



SP178 調査終了 (南から)



SP179 調査終了 (西から)



SP180 調査終了 (東から)

図版 7 5区調査状況



5区遺構検出状況(東から)



5区東半遺構検出状況(南西から)



5区中央遺構検出状況(北東から)



5区調査終了状況(東から)



5区東半遺構完掘状況(南西から)



5区東端遺構完掘状況(東から)

図版 8 8区調査状況



8区調査終了状況(北から)



8区中央部調査終了状況(南から)



図版9 6区調査状況(1)



6区南側遺構検出状況(北東から)



6区南側遺構検出状況(南西から)

図版 10 6区調査状況(2)



6区南側調査終了状況(北東から)



6区南側調査終了状況(南西から)

図版 11 6区調査状況(3)



6区南側北端遺構検出状況(南西から)



6区南側北端遺構検出状況(東から)



6区北側調査終了状況(北から)



6区北側調査終了状況(南から)



6区南側北壁土層堆積状況(北東から)



6区北側東壁土層堆積状況(北西から)



図版 12 6区調査状況(4)



SI5・6 検出状況(南東から)



SI5・6 調査状況(北から)



SI5・6 土層断面(北から)



SI5・6 調査終了(北から)



SI7 調査終了(北東から)



SI7 調査終了(北から)



SI8 調査状況(南から)



SI8 調査状況(南西から)

図版 13 6区調査状況(5)



S18 炉断面 (南から)



S18 炉調査状況 (南東から)



S18 調査終了 (南から)



S18 調査終了 (南東から)



SK33 調査状況 (北から)



SK34 調査状況 (南から)



SK34 土層断面・土器出土状況 (南から)



SK34 底面・土器出土状況 (南から)

図版 14 区調査状況 (6)



SK35 土層断面 (北から)



SK36 土層断面 (東から)



SK36 炭化物層検出状況 (西から)



SK37 土層断面 (西から)



SK37 底面礫検出状況 (南西から)



SK37・46 調査状況 (北から)



SK38 断面 (北から)



SK39 土層断面 (東から)

図版 15 6区調査状況 (7)



SK40 土層断面 (南から)



SK41 土層断面 (西から)



SK42 土層断面 (北から)



SK43 土層断面 (南から)



SK44 土層断面 (北から)



SK44 調査終了 (南から)



SK45 土層断面 (南から)



SK45 調査終了 (北から)

図版 16 6区調査状況(8)



SK46 土層断面・底面礫検出状況(南から)



SK37・46 土層断面(西から)



SK47 土層断面(西から)



SK47 調査終了(南から)



SK48 土層断面(北から)



SK48 調査終了(東から)



SK49 土層断面(北から)



SS2 検出状況(南から)